



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	完新世初頭における移動・居住形態の復元的研究：北海道における石刃鍬石器群を例に
Author(s)	高倉，純
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第4586号
Issue Date	1999-03-25
DOI	https://doi.org/10.11501/3151267
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32658
Type	doctoral thesis
File Information	4586.pdf



学 位 請 求 論 文（平成 10 年度）

完新世初頭における移動・居住形態の復元的研究

—北海道における石刃鏃石器群を例に—

高 倉 純

北海道大学大学院文学研究科日本史学専攻（考古学）博士後期課程

目 次

はじめに	1
第Ⅰ章 遺跡間変異と移動・居住形態の復元	3
1 目的	3
2 問題の所在	4
3 中石器時代の自然環境と生業形態	6
4 北西ヨーロッパの移動・居住形態研究	8
5 日本の移動・居住形態研究	22
6 まとめ	30
第Ⅱ章 北海道における石刃鏃石器群の石器製作技術	33
1 目的	33
2 検討対象	34
3 石刃剥離技術の検討	34
4 考察	50
5 まとめ	54
第Ⅲ章 石刃鏃石器群をのこした〈集団〉の移動・居住形態	55
1 目的	55
2 検討資料	57
3 石器製作技術の比較検討	59
4 組成の比較検討	68
5 移動・居住形態の検討	75
6 まとめ	81
第Ⅳ章 石刃鏃石器群の遺跡立地とその背景	83
1 目的	83
2 石刃鏃石器群の遺跡立地	84
3 完新世初頭における北海道東部の海岸線	91
4 遺跡間変異の問題と海岸線	100
5 まとめ	101

謝辞 108

註および引用・参考文献 109

はじめに

先史時代の〈狩猟採集集団〉が、ある地理的範囲内で何らかの移動活動をおこなっていたこと、またそれが彼らの生活や社会のあり方に重大な影響をあたえていたであろうこと、はここで強調するまでもなかろう。そのあり方はまた、彼らが対峙していた自然環境に対する適応戦略の結果を何らかのかたちで反映しているものと考えざるをえないため、人間行動と自然環境とのかかわりに関心を抱く考古学者にとっては、何よりも真っ先に取り組みねばならない課題として認識されてきた。このように、移動にかかわる諸活動の復元は、先史考古学者にとって重要かつ緊急性をもつ課題としてうけとめられてきた歴史があるのである。

本稿では、〈狩猟採集集団〉がいかなる地理的範囲をどのように移動し、広義の居住地点ではどのような活動が繰り広げられていたのかを考察しようとする研究を、〈移動・居住形態研究〉と呼ぶことにする。こうした移動・居住形態研究は、第Ⅰ章で論じるように、ヨーロッパや日本においてさまざまな研究が積み重ねられてきた。しかし、これまで多大で継続的な関心がはらわれてきたにもかかわらず、なおそれらの研究においては、方法論上の問題が充分には整理されていないように考えられる。

その大きな理由は、活動の全体のなかのある一部分の痕跡でしかない個別遺跡の分析だけでは、移動・居住形態の復元に直接的に応えることはできないからである。不可避的に、複数遺跡間の関係性について分析をおこなっていく必要性がでてくるのであるが、そのステップに進もうとすると、ある地理的範囲内に分布するさまざまな遺跡を、同じ〈狩猟採集集団〉がのこした一連の地点群としてどのように認識していけばよいのか、という重大な課題に直面せざるをえないのである。これまでの移動・居住形態研究が、一般的な予測ないしは可能性の指摘にとどまっていた場合が多いのは、このような問題に対して一定の方法論的枠組みをもって対処し、具体的な資料分析の実践を積み重ねていこうとする試みが少なかった結果なのではなかろうか。

本稿では、移動・居住形態研究にとって不可欠な複数遺跡間の関係性について検討する際の方法論的問題について議論をおこない、移動・居住形態に関する仮説モデルの性格について、いくつかの提案をおこなう。さらに、北海道の完新世初頭に出現する石刃鏃石器群を題材にして、その実践を試みていくことにしたい。

本稿は、以下のⅠ～Ⅳ章から成り立っている。第Ⅰ章では、遺跡間変異の議論から移動・居住形態の復元へむかうための方法論的枠組みを確立するために、当該研究の基本的視座をあき

らかにする。そのために、北西ヨーロッパおよび日本における更新世終末～完新世初頭を対象とした移動・居住形態研究について総括的なレビューを試み、問題点の整理とこれからの研究の展望を考察する。

前述したように、本稿では、北海道の石刃鏃石器群をのこした集団の移動・居住形態の復元をおこなっていくことにする。その具体的な作業を第Ⅱ～Ⅳ章において実施することにした。移動・居住形態の復元のためには、遺跡間における石器製作技術・石器組成・遺跡種別・遺跡立地などの比較検討をおこなう必要がある。これらの検討を第Ⅲ章において具体的に展開し、移動・居住形態に関する仮説モデルを提起する。ただし、その前段の作業として、石刃鏃石器群における石器製作技術の全体像を把握する必要があるため、第Ⅱ章でその具体的作業を実施することにした。

最後の第Ⅳ章では、北海道東部の石刃鏃石器群が発見されている遺跡を網羅的に集成して、遺跡立地の検討をおこなうことから、土地利用のパターンの解明を試みることにする。遺跡間における石器製作技術の比較作業をおこなうために、第Ⅲ章でとりあげた遺跡は、一定の点数の石器がまとまって検出されているものにしばらざるをえなかった。しかしながら、地理的景観内における集団の行動連鎖のパターンの解明には、あらゆる種別の遺跡の解析が重要な意味をもつことはまちがいない。第Ⅳ章では、地理的景観内のいかなる地点がどのような活動をおこなうことを目的として選択されているのか、を具体的に検討していくことにする。また、移動・居住形態の復元にとって重要な当該期の自然地形の変化、とくに旧海岸線と遺跡立地との関係についても分析をおこない、遺跡立地の検討であきらかにされた解釈の補足を試みていくことにしたい。

本稿の構成は以上のようなかたちをとる。ただし、この構成からもあきらかなように、移動・居住形態研究の実践的側面に関しては、本稿ではきわめて限られた対象についてしか議論することはできなかった。そのため、完新世初頭における移動・居住形態の全体像を示しえたとはいえないが、移動・居住形態の復元にあたって考慮されるべき方法論的諸問題については、一定の新展望を示しえたのではないかと考えている。

I 遺跡間変異と移動・居住形態の復元

1. 目的

更新世終末から完新世初頭にかけての〈狩猟採集集団〉が、いかなる地理的範囲をどのように移動し、広義の居住地点ではどのような活動が繰り広げられていたのかを考察しようとする〈移動・居住形態¹⁾〉の研究が、当該期の先史考古学的研究における主要テーマのひとつであることはまちがいない。移動・居住形態の復元は、その通時的・地域的な変化をたどることによって、自然的・社会的環境に対する人類の適応の様態を解明することに直截につながるものと考えられる。それゆえに日本をふくめた世界各地で多くの研究が積み重ねられてきた。

ただし、日本でこうした研究テーマに重大な関心がはらわれるようになったのは、1960年代の終わり頃からである。一方、ヨーロッパでは、1950年代前後からさまざまな研究の試みがなされてきており、一遺跡の検討だけにとどまらない、広域の地理的範囲内に散在する複数の遺跡間の相互関係に視野をひろげた検討の積み重ねが認められるのである。また、日本では貝塚や洞穴遺跡をのぞくとほとんど発見が期待できない動物遺存体が、ヨーロッパでは開地・洞穴遺跡の両者から石器群と共伴した状態でみつかると多く、生業活動の動向を十全にふまえた移動・居住形態の復元が可能となっている。

以上から、更新世終末～完新世初頭にかけての移動・居住形態研究の方法論的枠組みを議論していくためには、日本における研究動向を整理するだけでなく、ヨーロッパでの研究の方向性とその内容を把握しておく必要があることがわかっていく。そのために本章では、北西ヨーロッパにおける諸研究を検討し、あわせて日本での研究の現状と課題を明確にすることによって、当該テーマに関する今後の展望を考察してみたい。

本章では、北西ヨーロッパのなかでも、とりわけブリテン島と南スカンディナヴィアの中石器時代研究を通観していくことにする。両地域においては、後期旧石器時代と比較すると多様な生業活動が開始・本格化され、また移動活動にウェイトをおいた行動のパターンから、定住的なそれへの緩やかなシフトが進行していった時期とも考えられている。そこでは、さまざまな資料を対象にした多角的な研究が試みられてきており、それら相互の比較をおこないつつ検討をすすめていくのは、きわめて有効な作業といえるだろう。

もちろん、ここでの検討作業が、彼我の研究の優劣をあきらかにすることに目的があるのではない。あくまでも、それぞれの地域での研究の現状と問題点を把握することによって、今後

の研究の推進にとって有望な展望をえることを目的としたいのである。

以下の各節では、最初に移動・居住形態研究の基本構図をあきらかにし、研究の視点を提示する（第2節）。次に、北西ヨーロッパ中石器時代の自然環境や生業形態を概観し（第3節）、ブリテン島と南スカンディナビアにおける諸研究のレビューをおこなう（第4節）。さらに、それと対比させるかたちで、日本の後期旧石器時代から縄文時代初頭にかけての時期の移動・居住形態研究についても検討をおこなっていく（第5節）。

2. 問題の所在

先史時代の〈狩猟採集集団〉の活動場所は、単一地点のみで完結するのではなく、必要に応じた移動をおこなった結果、ある一定の地理的範囲内の複数地点にまたがるものである。そのため、活動の一部の痕跡にすぎない単一地点（遺跡）の分析だけで、〈狩猟採集集団〉の活動の全体像を復元するのはおよそ不可能なことであろう。くわえて、地点に応じて活動内容に変異が生じている可能性を考慮にいれるならば、単一地点（遺跡）で復元された活動の単純な総和が、〈狩猟採集集団〉の活動の全体像というわけにはいかなくなる。

ヨーロッパにおいては、個別遺跡の立地環境を詳細に分析する一手法として遺跡領域分析（site catchment analysis）が、1970年代前後にさかんに試みられた。それらの分析は、民族誌から予測される日常的な活動範囲を安定した条件とみなし、地形などから予測される利用可能な資源の分布状況にもとづいて、遺跡の利用季節や生業対象を推定しようとするものであった。しかし、Rowley-Conwy（1993:187）によって指摘されているように、移動・居住形態のなかでの個別遺跡の位置づけがあきらかにされないかぎり、単純にそれぞれの遺跡の立地状況からなされるだけの解釈では、容易に誤った結論を導きだしかねない危険性が予測される。

そこで重要な課題になるのは、〈狩猟採集集団〉がのこしたさまざまな地点から読みとられる活動の内容を、遺跡間変異（inter-site variability）としてどのように統合し解釈すべきか、という点である。移動・居住形態研究では、複数の地点間（遺跡間）の関係性を考察の対象にすえるが、そこでは必然的に、ある地理的範囲内に分布するさまざまな遺跡を、同じ〈狩猟採集集団〉がのこした一連の地点群として接続していく作業の必要性が浮上してくる。こうした作業をかりに〈遺跡間接続²¹⁾〉と呼ぶならば、移動・居住形態研究のなかでは、遺跡間接続をおこない遺跡間変異の実態を解釈するための適切な方法こそが、まず第一に論議されなければならない課題といえるだろう。しかしながら、実際に遺跡間接続の問題を論議しようとする、さまざまな困難が生じてくることは、これまでの多くの経験的事実が示すところである。

そうした困難が生じる理由のひとつに、考古学的な時間枠が固有にもっている制約があげられるであろう。考古学的な時間枠は、一般的に編年というかたちで議論される。そうした編年は、型式論・層位論的操作によって導きだされるが、その場合の時間の刻みには〈ある一定の時間幅〉を見込まざるをえない、という事情がある。たとえ遺跡間の〈同時性〉が編年的議論によって確定できたとしても、それが〈ある時間幅のなかでの同時性〉を指示するかぎり、遺跡間接続の問題をそれのみで解決することができないのは自ずとあきらかといえる。つまり、

いくら細かい編年が設定できたとしても、それだけでは遺跡間接続の全面的な解決にはつながらないのである。もちろん、編年に関する知見は、検討対象をしばらくこんでいく際に重要な役割をはたすものであり、移動・居住形態研究においても十分な考慮がはらわれるべきことはいうまでもなからう。

ここで議論の筋道を明確にするために、考古学が復元の対象とする〈行動〉を、そのレベルの差に応じて区別しておくことにしよう。すなわち、①個々の遺物の製作や使用にかかわる〈個別行動〉、②仮設的に想定しえるある遺跡の〈生活面〉を舞台にして共時的に繰り広げられていた〈単位行動〉、③ある地理的範囲内で〈狩猟採集集団〉がある期間内に繰り広げていた〈行動連鎖〉、のそれぞれを論理的に区別することが可能である。

本章で議論しようとする移動・居住形態は、まさに最後にあげた行動連鎖にかかわるものである。原理的にいって行動連鎖とは、個々の遺跡の〈生活面〉を舞台にした単位行動の集合から成り立っていることはまちがいない。しかしながら、重複堆積物（palimpsest）の例をあげるまでもなく、そうした単位行動が考古学的記録のなかにすべて分離された痕跡として常態的に残存していると考えすることはできない（阿子島 1995:1-2）。考古学的な議論の焦点のひとつとなっている〈生活面〉ないし〈文化層〉には、複数の単位行動が折り重なっているものがふくまれている可能性が高いのである。したがって、分離・区分された単位行動の痕跡を集積するという帰納的なアプローチから、〈狩猟採集集団〉がのこした行動連鎖の全体像を把握しようとするのは、きわめて困難な作業といわねばならないだろう。単位行動の痕跡ごとの〈集団〉同定という問題もふくめて、のこされた課題は多い。

では、以上のような問題を勘案したうえで、現時点でどのような視点が移動・居住形態の復元には有効なのであろうか。ここで注目すべきなのは、〈狩猟採集集団〉が、ある地理的範囲のなかで複雑かつ多岐にわたって繰り広げた行動連鎖のなかに認められる何らかのパターンに着目することによって、移動・居住形態の復元が可能になるのではないかと、という視点である。行動連鎖の〈内部構造³⁾〉とでも呼びうるそうしたパターンは、〈狩猟採集集団〉が対峙していた資源状況と社会・文化的諸条件とに応じて、とりわけ諸活動の時間・空間的分化（季節的分化を中心とする）と、それに対する人員・活動場所・運用技術・使用道具の時間・空間的配置の計画・組織化、というかたちで顕在化するものと考えられる。

こうしたパターンは、Binford（1989）が「行動における計画性の深度（planning depth）」という概念で言い表そうとしたことに、よく符号するものである。Binford が論じているように、それは、先史時代のあらゆる時期・地域に普遍的に認められるものではなく、人類の進化過程のなかのある段階（とくに後期旧石器時代以降）になって、発現の条件がそろったものと想定される。したがって、本稿で検討の対象とする更新世終末～完新世初頭の中・高緯度地帯では、そうした何らかのパターンが行動連鎖に存在していたと考えたうえで、検討作業を推しすすめていくプランをもつことは、妥当な前提と考えてよいであろう。

こうした視点が考古学的な議論にとって重要な意味をもつのは、以下のような予測を可能にするからである。すなわち、そうしたパターンは、ある地理的範囲のなかで累積的に形成された考古学的記録のなかに、われわれが観察しうるような何らかの傾向性をのこすのではないかと、という予測である。一般的にそのようなパターンは、単位行動の振幅にもかかわらず、世代の

交代、個別の〈小集団〉の違いを越えて存在していくものと考えられる（阿子島 1997:105）。したがって、かりにそうした傾向性を考古学的記録のなかから摘出することができれば、近似的ながらも移動・居住形態に関する仮説モデルを提示することが可能となるであろう。

ここで近似的と述べたのは、議論の対象となっている〈集団〉が、厳密には個別の〈小集団〉だけでなく、同じような行動連鎖のパターンをみせていたであろう複数の〈小集団〉にまで範囲がひろげられているからである。いうまでもなく、移動・居住形態研究において行動の軌跡を読みとるべき対象は、日常生活の基本的な単位となっていたと仮設される個別の〈小集団〉にちがいない。しかし、仮説モデルの復元的研究という手続きをとるかぎり、そうした〈小集団〉を考古学的記録のなかから識別・摘出し、その詳細な行動復元を試みていくのはきわめて難しい課題といえるだろう。

いずれにしても、以上のような問題設定が可能になったので、考古学的記録のなかからどのようにして傾向性を摘出するのか、また、摘出した傾向性は〈集団〉の行動連鎖のパターンをどのように反映しているのか、という点に当面の議論の焦点をあてていかなければならない。くわえて、そうした議論の展開過程で、遺跡間接続の問題をどのように論じることができなのか、という点についても充分な考察が必要となるであろう。以下の節では、北西ヨーロッパと日本における諸研究を検討するなかで、こうした問題点に関する具体的な議論を吟味し、今後の展望を探っていくことにしたい。

なお、ここで言及しておかねばならないのは、遺跡間における石器接合資料をめぐる問題についてである。遺跡間における石器接合資料は、それが検出された遺跡相互間での何らかのつながりを直接的に表示するものであるだけに、遺跡間接続の問題の解決に重大な寄与をなす可能性があることはまちがいない。しかしながら、石器接合資料は、一母岩を消費する過程に介在した何らかの個別行動のエピソードを反映しているだけである、という点を見過ごすべきではなかろう。つまり、そこで把握された個別行動のエピソードの単純な総和が、〈集団〉の行動連鎖のパターンであると短絡的に考えることはできないのである。たとえ検出例が量的に増えたとしても、行動連鎖のパターンを理解しようとするかぎり、何らかの仮説モデルを設定する手続きを避けることはできないであろう。いずれにしても、遺跡間における石器接合資料の検出が、遺跡間接続に対してもつ検証手段としての有効性は、検証すべき仮説モデルの必要性を逆に提起しているといってもよからう。

3. 中石器時代の自然環境と生業形態

現在、北西ヨーロッパにおける〈中石器時代〉の定義は、氷河期の終結から農耕・牧畜経済の成立までの期間を指す用語（Rowley-Conwy 1986:17）として一般的に定着しているようである。本題にはいる前にまず、当該期の自然環境と生業形態の概要について整理しておく。

12,000yrs BP 前後のヤンガー・ドリラス期を最後にして晩氷期の寒冷気候は全ヨーロッパで終結をむかえ、後氷期初頭のプレ・ボリアル期から気候の温暖化が開始する。北西ヨーロッパの中石器時代は、まさに晩氷期が終了した後の温暖化の開始からその最盛期をむかえるにいた

る時期に対応する。気候環境の変化は、人間をとりまく自然環境のさまざまな側面を変化させることになる。最終氷期の最寒冷期には、スカンディナビア半島からデンマークやブリテン島までをおおっていた氷床が北方へ大きく後退した結果、10,000～9,000yrs BP⁴⁾以降、それらの地域においても、人間集団による連続的な居住活動をおこなうことが可能になったとみられている（Nygaard 1989、Morrison and Bonsall 1989、Bang-Andersen 1989）。氷床の北方への後退後は次第に森林植生へ移行していき、温暖海洋性気候のアトランティック期（6,000yrs BP前後）をむかえると、カバ・マツ、さらにはナラ・カシ混合林を中心とする植生がひろく分布するようになったことが、花粉分析や植物化石の検討によってあきらかにされている（Simmons 1981:93-102）。

こうした植生の変化に連動して、動物相も顕著な変化をみせる。晩氷期から後氷期初頭にかけての南スカンディナビアやブリテン島では、トナカイ・ウマといった草原系の大・中形動物が動物相の中心であったが、ボレアル期・アトランティック期をむかえると、更新世においては相対的に動物相中での比重が低かったアカシカ・エルク・ノロジカ・オーロックス・イノシシという、草原よりも森林を好み移動性も低い動物種群（Gamble 1986:104-109）が卓越するようになる（Grigson 1981:112-115）。

氷河の消滅によって引き起こされた海水面の上昇は、湖であったバルト海に海水を流入させ、干上がっていたブリテン島東部からスカンディナビア半島までのあいだに、現在みることができそうな北海を形成させるなど、大規模な地形改変をもたらすことになった。ただし、海岸線の変化には地域的変異がみられるようで、それにはグレーシャルアイソスタシーなどによる地殻隆起量の地域差（海津 1994:82-84）が大きく関連していたものと考えられる。更新世から完新世初頭にかけての急激な海水準変動の結果、本稿で検討対象とする北西ヨーロッパの沿岸部には、多数の島や入り組んだ入り江が形成されるようになった（Larsson 1990:259-263）。そうした沿岸部の地形環境が、さまざまな魚類や貝類、鳥類、海獣類にとっての格好の生息場となったのである。

以上にみるような植生・動物相・地形環境の変化の結果は、当然ながら生業活動の内容にも大きな変化をあたえることになった。研究者によって想定する変化の解釈はさまざまである。後期旧石器時代終末のマドレーヌ文化期の場合（Sturdy 1975、Bahn 1977）と同様に⁵⁾、大きな群れをなして季節的に移動する大・中形陸棲動物を、集中的な狩猟対象とする生業形態が引き続きおこなわれていたと想定するよりも、狩猟だけでなく植物質食料や水産資源も多角的に利用されていたと想定される場合の方が多い。水産資源が利用されていたことは、遺跡立地や道具構成、貝塚から検出される豊富な魚介類の遺存体から復元可能である。しかし、Clarke（1976）がかつて推定していた植物質食料の利用は、中石器時代に関するかぎり、炭化したハシバミが検出される場合を除くとほとんど直接的な痕跡はのこされないため、具体的な利用状況を復元することはきわめて難しい（Price 1985:354）。

以上の状況からもあきらかなように、石器や動物・植物遺存体といった通常の考古学的記録だけでは、生業活動の比率を論じていくのはきわめて難しいことなのである。生業活動の比率を復元するためのあらたな手法としては、人骨の組織にふくまれる炭素・窒素安定同位体比の分析が、近年デンマークを中心として積極的に実施されており（Tauber 1981、Price *et al.* 1985、

Price 1989、Richards and Mellars 1998)、一定の成果があげられている。ただし、このような分析が実施されているのはまだ地域的にかぎられており、地域差・年代差を考慮にいたした食性の復元までには達していない。今後のデータの蓄積が必要であろう。

4. 北西ヨーロッパの移動・居住形態研究

(1) ブリテン島の移動・居住形態研究

a. 動物遺存体による研究

ブリテン島の中石器時代研究が、いまだに生業活動や移動・居住形態の研究に関心をよせる先史考古学者の注目をあつめているのは、スター・カー遺跡の発見・調査とその後の研究の展開によるところが大きい(Clark 1954)。スター・カーの出土資料は、1980年代にいたるまでさまざまな角度からの再検討がおこなわれてきた。それは、発掘調査の精度の高さとその後の研究につながる問題意識とを、Clarkの研究が当初から備えていたことを雄弁に物語るものであろう。現在にいたるまでの議論の潮流の出発点を刻印しているという点で、スター・カー出土の資料にもとづいた移動・居住形態の議論から、検討をはじめていくことにしたい。

なお、ブリテン島とくにイングランドの中石器時代は、前半期(10,000～8,500yrs BP)と後半期(8,500～5,500yrs BP)とに二分する見解(Jacobi 1973:237-238、Mellars 1974:81-90)が一般的である。スター・カーは、イングランド中部のヨークシャー州東部に位置し(図 1-1)、編年的には中石器時代前半期に属するため、のちの移動・居住形態に関する論議は、前半期に関するものがとくに多くなっている。

スター・カーの原報告で動物遺存体の項目を担当したFraser and King(1954:93-95)は、アカシカなどに関して現生種における角の成長・脱落の季節的サイクルと、出土資料の分析結果とをつきあわせることによって、同遺跡が冬から初春にかけて居住されていたことを指摘した。この報告をうけClark(1972)は、ブリテン島北部に現生するアカシカの習性として、冬季は雪を避けるため低地において大きな群れを形成し、夏季は比較的冷涼で蚊なども発生しない高地へ小群に分散しながら移動する行動がみられることから、アカシカを主要な食料源として狩猟していた人間集団も、アカシカを追尾するために冬季はスター・カーが位置するような低地に居住し、夏季は高地に移動していたであろうという仮説モデルを提示した。

高地に立地する遺跡の利用季節についてのデータは提示されなかったが、季節性を軸にすると、高地・低地それぞれに立地する遺跡は、相互補完的位置をしめていたと想定されることから、高地・低地間を季節的に移動する標高移動(alitudinal mobility)もしくはトランスヒューマンス型(阿子島 1995)と呼ばれる移動・居住形態を、そこで復元したのである。また、多出した骨角製狩猟具や搔器に着目し(図 1-2)、それらは狩猟活動とともに骨角器製作活動や動物の皮の処理作業もおこなわれていたことを示していると考え、スター・カーは、「バンド」のような単位の集団が日常的な生活を営んでいた拠点集落であったことも、あわせて指摘している。

こうしたClarkの研究は、動物遺存体の分析による遺跡利用の季節性推定の結果を援用しつ

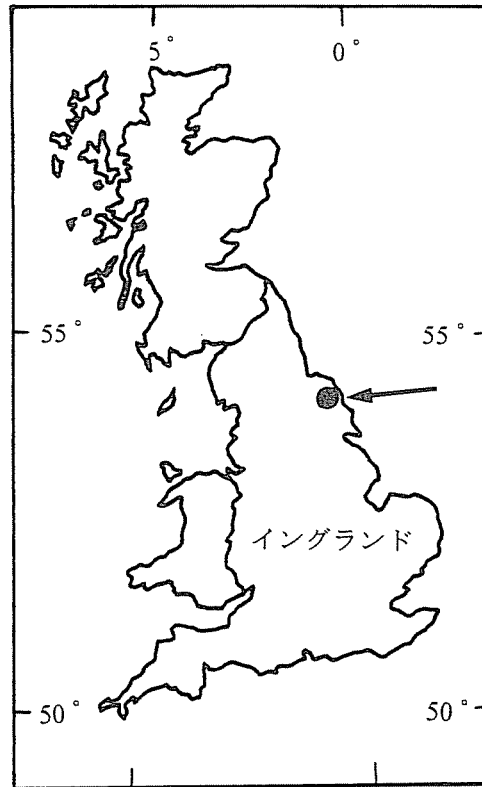


図 1-1 スター・カー遺跡の位置

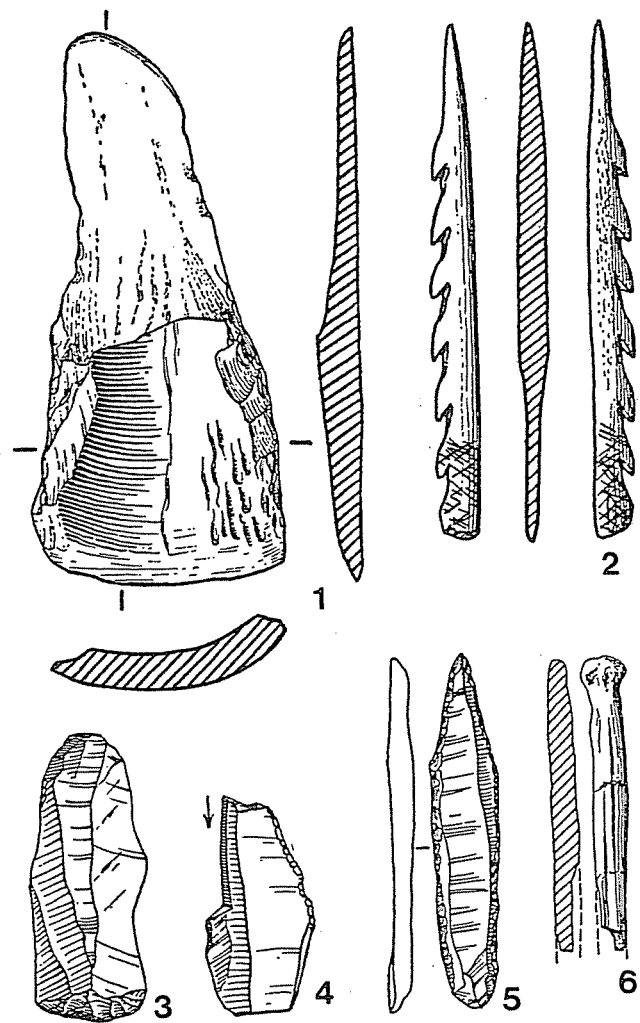


図 1-2 スター・カー遺跡出土の遺物 (Clark 1954)

つ、推定される生業形態と遺跡の分布・性格との関係を包括的に説明する仮説モデルを提示した点で、移動・居住形態の研究史のなかでも特筆されるべき位置をしめているといっても過言ではない。遺跡の利用季節を推定し、季節性という軸で遺跡間のつながりを立証しようとする視座は、ドイツのマドレーヌ文化期を対象にした Sturdy (1975) の論考のような、後期旧石器時代を対象とする研究にも引き継がれることになる。また、ブリテン島の中石器時代研究という局面にかぎっても、Clark の指摘に基づいて Jacobi (1978) らは、イングランド中部の高地において、中石器時代遺跡の摘出を試みるようになった。

しかし、その後の研究の経過をみると、仮説の追認というより、データの再吟味にもとづいた批判が大勢をしめるようになってしまった。批判の第一点としては、仮説モデルの提示の際に傍証として重視されたアカシカの動物行動学的知見に関して、さまざまな地域におけるアカシカの行動の知見を整理してみると、地域の環境に応じて行動形態に多様さが認められるため、かならずしも高地・低地間の季節的移動がおこなわれていたという保証がないこと、さらに、スター・カーが属する時期は森林植生が展開するような時期に相当するため、森林植生下でアカシカが長距離移動をおこなっていたとは想定しがたいこと、といったような見解が提示されたのである (Legge and Rowley-Conwy 1988:13-21、Myers 1989:88-89)。

さらに、生業形態から予測される集団行動とは別に、仮説モデルの論拠になっている遺跡の利用季節の推定方法にも疑義がはさまれた。Clark らは、利用季節を推定するにあたってアカシカの角などを利用しているが、それらは道具の素材になりうるものであるだけに、人為的に採取されたり保存されたりする可能性が高く、遺跡での利用季節を推定するための安定した指標にはなりえないという問題がある (Pitts 1979:37、Grigson 1981:119)。より安定した指標として Legge and Rowley-Conwy (*ibid* 22-39) は、ノロジカやアカシカの歯の解析から死亡季節を推定することによって、スター・カーが晩春から夏にかけて居住されていることをつきとめた。また、Clark は、生業体系のなかでアカシカが主要な食料源であったことを前提に仮説モデルを提示したが、スター・カーから出土した各種の動物遺存体の個体数をカウントし直すと、相対的にアカシカの割合が低いこと、ノロジカなどもよく狩猟されていることがあきらかとなった (Pitts 1979:38-39)。遺跡の性格を理解するうえでは、アカシカ以外の断片的な痕跡しかのこされていない動物の狩猟季節をも加味する必要性を主張した Andresen らは、遺跡形成論的な視点から、スター・カーがある特定の季節だけではなく、1年中のさまざまな季節に断続的に利用されていた狩猟・解体のための地点であったのであろう、との指摘もあわせておこなっている (Andresen *et al.* 1981:32-33)。

以上のような利用季節の推定に対する見直しは、スター・カーが拠点的な集落であったとの Clark (*ibid*; 31) の見解にも修正を迫ることになった。具体的には、骨角製狩猟具や搔器が多出していることからみて、拠点的な集落として理解するよりは、骨角製狩猟具の製作や動物の毛皮の処理作業が集中的におこなわれていた遺跡とみたほうがよい (Pitts 1979:32-33)、という意見がだされている。また、スター・カーから出土したアカシカやノロジカなどの遺存体の部位別出現頻度が、Binford (1978) が報告するヌナミウト・エスキモーのカリブー狩猟キャンプにのこされた動物骨の部位別頻度ときわめて類似することから、スター・カーは、狩猟キャンプの性格を有していた遺跡なのではないか (Legge and Rowley-Conwy *ibid* 69-93)、という想定も

提案されている。Legge らは、狩猟キャンプで狩猟・解体されたのち、食料に関連する部位が選択的に本拠地へ持ち運ばれていたことを推測している。

以上のような批判を整理すると、スター・カーは、おもに夏季居住の結果のこされた遺跡であり、さらに拠点的な集落と理解するよりは、狩猟キャンプのような特定作業がおこなわれた地点と想定したほうがよい、ということになるであろう。こうした理解が妥当ならば、低地と高地とを季節的に標高移動するという、Clark の〈アカシカ追尾モデル〉は、抜本的な修正を要することになったといえよう。

b. 石器組成・遺跡規模による研究

動物遺存体とは異なる検討対象によって、ブリテン島における中石器時代の移動・居住形態を考察しているのが、Mellars (1976a) や Simmons (1979)、Myers (1989) である。このうち、Myers の論考は、中石器時代前半期から後半期にかけての遺跡規模、利用石器石材、石器製作技術の変化を技術組織 (organization of technology) 論の観点から説明しようとしたものである。Simmons の論考は、高地における森林焼却とそれが生業活動におよぼす影響について考察しているものである。両者ともに、移動・居住形態の復元が、資料の具体的な分析・操作をとまなっておこなわれているわけではないため、ここでは上記の紹介だけにとどめておく。一方で、Mellars は、各種データを分析・操作することによって、移動・居住形態の復元をおこなっている。以下では、その論議の展開をおってみることにしよう。

Mellars (*ibid*) はまず、動・植物相に関する古環境分析から復元される資源状況を考えると、アカシカを主要な対象とした動物狩猟とともに、水産資源や植物質食料の獲得も生業体系のうえでは大きな位置をしめていたことが推測されることから、それら複数の部門を対象にした生業活動に従事するために、集団がある季節には集合し、ある季節には分散する離合集散という事態を想定する。とくに、資源が欠乏する冬季には、積雪量・気温・風などの条件がよい低地でアカシカ狩猟や漁労活動に従事するために、比較的大きなサイズの集団が形成されていたのではないかと推測する。一方、植物質食料のように、量的に安定して資源の獲得地点が分散している対象におもに依存する夏季においては、分配の必要性も生じないことから、集団サイズは冬季と比較すると相対的に小規模なものになることを推測する。そうした季節的な集団サイズの差は、遺跡の規模に観察される類型的な差異に反映するものと考え、遺跡の規模から遺跡での占地期間とともに居住していた集団サイズの推論もおこなっている。その結果、低地には大規模な遺跡が、高地には小規模な遺跡がみられる傾向があること、さらにハシバミや搔器の出土を勘案することによって、低地もしくは沿岸域の遺跡の多くが冬季に数家族が結集して利用されたもの、高地は冬季より分散した集団がおもに夏季に利用していたもの、と解釈した。

Mellars はほかに、狩猟活動と結びついた森林への火入れの存在を想定し (Mellars 1976b)、それと移動・居住形態とのかかわりについても考察 (Mellars and Reinhardt 1978) をおこなっている。

ブリテン島の中石器時代遺跡のなかでは、スター・カーのように豊富な動物遺存体が検出されている遺跡はきわめて少数である。Mellars らは、このような状況のもとで、古環境分析の結果から想定される資源利用の状況に、遺跡規模や石器組成などの検討結果を照合することによって、移動・居住形態の仮説モデルを提示しようとする。動物遺存体のような稀少な資料で

なく、普遍的に認められる資料を検討対象にとりあげようとする指向性は、きわめて重要な意味をもっていよう。また、遺跡規模、石器組成の差を機能論的観点から解釈したという点では、ムステリアン論争における Binford ら（1966）の主張以降の潮流によく合致しており、遺跡間変異に対する機能論的解釈が具体的に展開されているところでも、論議の展開が示唆的なことはたしかである。

しかしながら、解釈にいたるまでのプロセスには、さまざまな問題点を指摘することが可能である。第一に、Mellars は動物遺存体が検出されていない遺跡に関しても利用季節の推定をおこなっているが、そこでの季節性推定の方法は、あきらかに厳密さを欠いているものといわざるをえない。その内容を具体的に述べると、検討の対象とした遺跡から搔器やハシバミが出土した場合、搔器の出土は、良質な毛皮が獲得できる冬季の集中的な狩猟・解体作業の結果を示し、またハシバミは、越冬用食料として保存されていたものと仮定することで、冬季居住の遺跡と判定する（Mellars 1976a:392-394）といった具合である。

第二は、重複堆積物（palimpsest）の存在を指摘しておきながら、遺跡規模の差異を主要な指標にして設定された類型が、遺跡での占地期間や占地していた集団サイズの差異を反映していると論じている点である（*ibid*: 377-380）。こうした解釈は、しかしながら、累積的・回帰的に遺跡が形成される可能性を考慮にいれるならば、いま一度再考が必要なことはあきらかであろう。遺跡規模の解釈をおこなっていくためには、すくなくとも遺跡の形成過程に関する行動と痕跡のあいだの何らかのモデル化を試み、それに則った解釈の提示をおこなっていくべきである。

第三に、Mellars は遺跡間での遺跡規模・石器組成・遺跡立地の差異を手がかりにして、移動・居住形態の復元にアプローチしているが、そうした諸項目の差異が遺跡間接続の成立の必然性を導きだすことにはなっていない点を指摘しておきたい。この点について詳しくは後考してみたい。

（２）南スカンディナビアの移動・居住形態研究

a. 南ノルウェーにおける研究

南スカンディナビアのなかでも、特異な地形環境のなかでの〈集団〉の行動連鎖のパターンが論じられている南ノルウェーの研究動向を最初に検討し、さらに補足的にデンマークの研究についてもとりあげていきたい。

南ノルウェーの中石器時代は、フォスナⅠ・フォスナⅡ・ネストベットⅠ・ネストベットⅡに区分され、フォスナ文化期は 10,000 ～ 8,100yrs BP、ネストベット文化期は 8,100 ～ 5,200yrs BP という年代観（Nygaard 1990:229-231）があたえられている^{61）}。

スカンディナビア半島の南部は、特異な地形的特性をもっている地域である。沿岸部では、氷河の浸食作用によって形成されたフィヨルドが内陸奥深くまで達しているため、複雑に入り組んだ海岸線がみられ、さらにそこには大小さまざまな島が点在しており、海岸沿いや島といっても外洋に接するエリアか内湾のエリアかで、自然環境に顕著な差が生じることになっている。くわえて、海岸線から半島の中央を南北に縦断する脊梁山脈までの距離が比較的近接しているため、短距離のあいだに標高が急上昇し、それにともない自然環境も急激に変わること

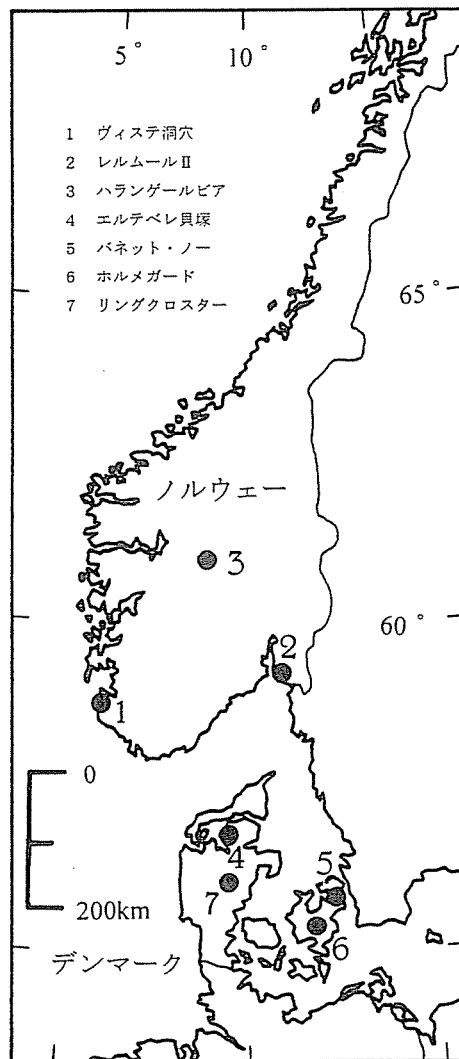


図 1-3 南スカンディナビアの遺跡

なる。

フォスナ文化期の沿岸部の遺跡においては、そうした多様な自然環境中の豊富な水産資源に照準をあわせた活発な漁労活動がおこなわれていたとともに、小規模ながら狩猟活動もおこなわれていたことが、遺跡の立地や分布、出土する石器組成から推定（Bang-Andersen 1996:431）されている。フォスナ文化期の遺跡では、ノルウェー南東のレルムールⅡ遺跡において典型的に復元されているように、短期間の居住活動しかおこなわれていなかったと考えられている（Skar and Coulson 1987）。一方、次代のネストベッ文化期になると、沿岸部における遺跡は、フォスナ文化期の遺跡と比較するとその規模が大きくなっているため、遺跡における滞在時間がより長くなっていた傾向が指摘されている（Nygaard 1987:150-152、1990:231-233）。南西ノルウェー沿岸部のネストベッ文化期に属するヴィステ洞穴から出土した資料の分析では、漁労や陸獣・海獣狩猟など各種の生業活動が通年的におこなわれていたことがあきらかにされており（Mikkelsen 1978:88-94）、定住化への動向をうかがうことができる。いずれにしても、両期を通じて基本的な居住活動は、沿岸部において営まれていたと考えてまちがいのなかろう。

南ノルウェー中石器時代の移動・居住形態を理解していくためには、フォスナ・ネストベッ両期を通じて存在する内陸部の山岳・高地帯の遺跡の解釈が問題となる。内陸部で発見されている遺跡からは動物遺存体が検出されていないため、具体的な生業形態を直接的には把握できない。しかし、当時の動物相に関する古環境的な知見と、現生トナカイの移動ルートに近接する地点に遺跡が立地することからみて、トナカイやエルクを対象とした狩猟活動が内陸部でおこなわれていたことが考えられている（Indrelid 1975:14-16、Bang-Andersen 1989:347）。サケ科を対象とする内水面漁労がおこなわれていた断片的痕跡もみついているが、生業活動のなかでのウェートは相対的に低かったとみられている。重要なことは、以上のように推定される資源だけでは、内陸部のなかだけでの通年的居住を維持することが、この段階ではまだ困難であったことを示唆している点にある（Indrelid 1978、Bang-Andersen 1996）。

遺跡規模が小さく、石器組成には偏りがみられる（内陸部の遺跡では石斧などがみられない）、といった考古学的記録の傾向性が認められることの多い内陸部の遺跡は、短期間利用のための狩猟キャンプの性格を有しており、沿岸部からの季節的移動の結果のこされた可能性が推定されている（Mikkelsen 1978:106-110、Bang-Andersen 1996:433-440）。沿岸部と内陸部とを季節的に移動するという行動連鎖のパターンは、比較的狭い地理的範囲内に異なる地形的景観が接しているという、当該地域の特異な地形的・環境的条件を有効に利用しようとしたあらわれとみることができる。また、Indrelid（1975:16）や Mikkelsen（1978:104）は、内陸部のなかだけでの通年的居住を想定することが困難になる傍証のひとつとして、沿岸部でのみ産出するフリントが内陸部の遺跡においても石器石材の中心として利用されていることを指摘する。ちなみに、移動活動が想定されている沿岸部と内陸部のあいだの距離は、海岸線が複雑に入り組んでいるため 50km から 200km まで前後することになる。

b. デンマークにおける研究

次に、デンマークの中石器時代における移動・居住形態研究の状況を検討していこう。なお、デンマークの中石器時代は、マグレモーゼ文化期（9,500 ～ 7,700yrs BP）・コンゲモーゼ文化期（7,700 ～ 6,600yrs BP）・エルテベレ文化期（6,600 ～ 5,300yrs BP）という順で継起していっ

たとえられている (Tauber 1972)。

エルテベレ文化期では、沿岸部でも内湾に面する地点には、大規模な貝塚や通年居住がおこなわれていたと考えられている遺跡が出現する。そして、内陸部の湖・河川沿いや湾内の小島などでは、陸獣・海獣・鳥を対象とした狩猟活動がおこなわれていた痕跡をのこす小規模な遺跡が検出されている。それらの分布の傾向性から、沿岸部の内湾に面する地点に拠点的な集落を配置し、内陸部や湾内の小島などに資源獲得のための小規模な派遣隊を繰り出す、という仮説モデル (Rowley-Conwy 1983:118-126) が提示されている。

このうち内陸部での状況は、ユトランド半島の内陸に所在するスカナボー湖畔に立地するリンクロスター遺跡の動物遺存体を分析した結果、①利用季節が冬・春季であること、②遺跡の性格が狩猟キャンプであること、が把握された (Rowley-Conwy 1993:179-185) ことにもとづいている。②は、アカシカやオーロックスの部位別出現頻度が、グリーンランド・イヌイットのカリブー狩猟キャンプの部位別出現頻度ときわめて類似していることから推定されており、この場合、遺跡で実際におこなわれていた活動としては、アカシカなどが狩猟され解体作業がおこなわれたのち、食料として利用される部位は、遺跡外に持ち出されていたことが考えられている。

一方、内湾に面する地点に立地するいくつかの大規模な遺跡は、その遺跡規模や検出された動物遺存体の分析からみて、季節的に限定して利用されていたとは考えがたく、通年的に居住活動が営まれていたであろうことが指摘 (Rowley-Conwy 1983:122-123、Andersen and Johansen 1986) されている。ただし、エルテベレ文化期末葉には、内陸部においても河川や湖沼の水産資源に動・植物質食料を組み合わせることによって、通年的居住をおこなっていた集団が発生していたのではないかとする見解が、プレステリングン遺跡などの分析からだされている (Noe-Nygaard 1983:139-140)。そのため、前記の仮説モデルが、エルテベレ文化期全般にあてはまるのかどうかは、予断を許さない状況にあるといえよう。

一方、前段階のコンゲモーゼ文化期では、明確な通年的居住の痕跡がまだ確認されていないが、同期に属するジールランドの入り江に浮かぶ島に立地していたと考えられているバネット・ノーなどの調査によって、遺跡内の空間利用に明確なパターン化がみられることがわかっている (Price and Brinch Petersen 1987:94-99、Brinch Petersen 1989:328-329)。居住活動のなかでの空間利用の分割・規則化が進行していたことがうかがえる。こうした現象は、定住的な居住活動が営まれる前段階の様相を示すものと評価することが可能かもしれない。コンゲモーゼ文化期の遺跡には、湖畔に立地するものと入り江沿いに立地するものとが認められる。だが、両者に立地している遺跡は、いずれも検出された魚類や動物遺存体から夏季利用と推定されており (Brinch Petersen 1973:93-98)、季節性を軸として補完的状况が復元されているわけではない。

マグレモーゼ文化期に属する内陸部の湖畔に立地するホルメガード遺跡は、長いことマグレモーゼ文化期のなかでも唯一冬季に利用されていた遺跡と考えられていた (Price 1980:222)。しかし、出土したイノシシの歯の分析によって、夏季に利用されていた遺跡と推定されることになった (Rowley-Conwy 1993:179-184)。そのため、コンゲモーゼ文化期と同様にマグレモーゼ文化期の段階でも、内陸部の湖岸に立地するほとんどの遺跡は夏季に居住されていたことになり、明確に冬季利用が把握されている遺跡は、デンマークでは現在みつからないことに

なる。こうした状況を説明するために、マグレモーゼ文化期の段階では旧海岸線が現在よりもかなり低位にあり、当時の沿岸部の大部分は現在水没してしまっているため、いま海面下になっている大陸棚にこそ冬季利用されていた遺跡があるのではないか、という推定が提案されている（Rowley-Conwy 1993:180-184）。

以上のように、海岸線の変化による遺跡の水没という事態が、デンマークのマグレモーゼ・コンゲモーゼ両期の移動・居住形態の復元に大きな制約をあたえているのはあきらかである。デンマークと比較すると地殻の隆起が顕著であった南ノルウェーでは、旧海岸線と現在の海岸線の位置がそれほど変わっていないため、沿岸部における遺跡が水没を免れているのとはきわめて対照的である（Indrelid 1975:11-14、Price 1985:342-345）。動物遺存体が検出されている遺跡が多いため、一遺跡がもっている情報量は比較的豊富なのであるが、それに対して全体的な移動・居住形態の復元がいまひとつ進捗していないデンマークの中石器時代研究は、海水面の変化といったマクロな自然地形の変化が、遺跡の遺存状況、ひいては復元される移動・居住形態像に大きな影響をあたえる可能性があることを示唆している。後氷期初頭の移動・居住形態研究をすすめていくうえでは、そうした変化が遺跡の遺存にどのような影響をあたえているのかについて、つねに注意をはらっておく必要がある（第IV章参照）。

（3）仮説モデルの導出過程

ここまで、ブリテン島と南スカンディナビアにおける移動・居住形態研究について検討をくわえてきた。以下では、提起された仮説モデルの導出過程をめぐる問題について考察していきたい。

a. 動物遺存体の検討にもとづく仮説モデル

遺跡から検出された動物遺存体の分析にもとづいた仮説モデルは、ブリテン島の Clark やデンマークの Rowley-Conwy の研究にみられるように、遺跡利用の季節性に注目することによって、複数の遺跡間でのつながりをあきらかにしようとしているものである。彼らがとくに注目しているのは、遺跡間における〈相互補完性〉である。すなわち、ある任意の〈地域〉が冬季居住を示す遺跡によってしめられるならば、夏季居住を示す遺跡もしくは〈地域〉とのあいだで、何らかの行動連鎖上のつながりが存在しなければならないからである。こうした〈相互補完性〉の指摘は、まさに第2節で述べたような、行動連鎖のパターンにかかわる傾向性を、ある地理的範囲内の考古学的記録のなかから明解に摘出しているものといえるだろう。それによって、季節的な標高移動の存在が端的にとらえられているのである。図 1-4 の a は、この仮説モデルを理想形に仕上げた状態を示しているものである。

また、ネガティブな手続きではあるが、動物遺存体の再検討によって標高移動を中心とする移動・居住形態の仮説モデルが反証された場合、逆に一定の地理的景観内を範囲とする移動・居住形態を推定することが可能になる。実際、Legge and Rowley-Conwy（1988:94-96）は、そうした手続きによって一定地域内での短距離・周回的移動という結論に到達している。Legge らの研究は、移動・居住形態を復元する論拠を動物遺存体の検討にもとづく遺跡の利用季節にもとめた点で、結論はまったく正反対でありながらも、Clark の視座を引き継いでいることはまちがいない。

動物遺存体の分析にもとづく遺跡の利用季節の推定は、生物学的現象に高い一般性・汎用性を認めるミドル・レンジ研究の視点にたつて（Binford 1977）、現生種のパターンを先史考古学の資料解釈にも適用しているものであり、〈生物学的一般性〉という枠組みに依拠して提示された仮説モデルとみることができる。動物の成長という〈生物学的現象〉を、考古学的記録に認められる傾向性の意味づけに適用することによって、移動・居住形態という〈文化的現象〉を解釈しようとしている点に、上記した仮説モデルの特徴が集約しているとみてもよからう。

もちろん、Clark の仮説モデルに関しても、いくつかの問題点を指摘することは可能である。Clark が提示した仮説モデルが成立するためには、まず以下のような問題が解決されなければならない。すなわち、トナカイやアカシカといった陸棲哺乳動物を対象とする狩猟活動が、特定の季節だけに限定しているのではなく、通年におこなわれていたことが前提条件として成立している必要がある。さきにふれたように、考古学的記録に痕跡をほとんどのこすことのない植物質食料が、北西ヨーロッパの中石器時代の生業形態のなかで大きなウェートをしめていたとする推論は、以前からなされている（Clarke 1976）。植物質食料や水産資源を対象とする生業活動が、ある特定の季節に専従的におこなわれていたとすると、〈相互補完性〉が成立する必然性にも修正の必要性が生じるのである。残念ながら、こうした前提条件に対する検証は、これまで充分におこなわれておらず、今後検討の余地をのこしているのはまちがいないであろう（Rowley-Conwy 1987:75）。生業体系の解明、とりわけ第3節でふれた食性復元は、それに対する有効な解決策のひとつになりうると考えられよう。

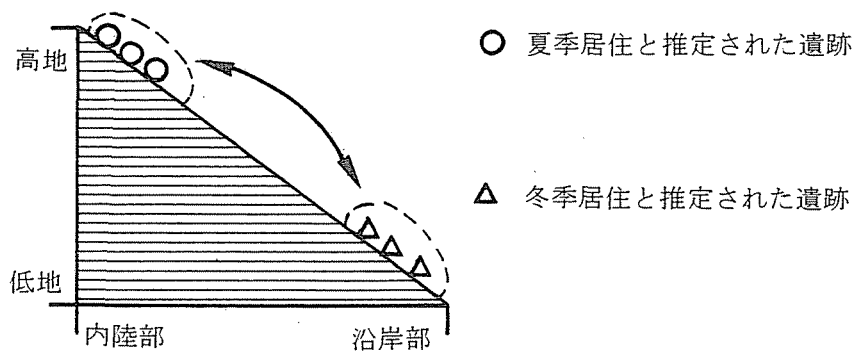
また、Clark が仮説モデルを提示するにあたっては、当時の資料的な制約もあつてか、スター・カーからえられたデータ分析におもに依拠して議論を展開している。しかし、低地とされる〈地域〉に分布する遺跡、高地とされる〈地域〉に分布する遺跡の両者において、仮説モデルと整合的な傾向性がみられるのか否かの検証が必要なことはいうまでもなからう。

b. 石器組成・遺跡規模の検討にもとづく仮説モデル

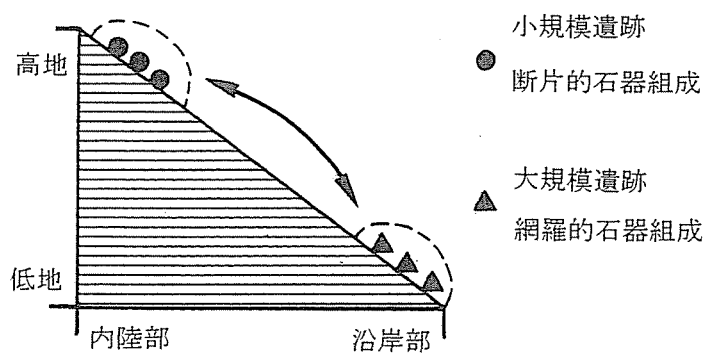
次に、動物遺存体以外の石器組成や遺跡規模を検討対象とした諸研究について考えてみることにしたい。ここでの議論は、第一に、石器組成や遺跡規模に関する遺跡間での〈相互補完性〉が成立するのか否か、第二に、〈地域〉の措定とそれにもとづいた移動・居住形態の復元について、焦点をあてていくことにする。

Mellars（1976a）がブリテン島における中石器時代の移動・居住形態を解釈するにいたった論理展開をみると、遺跡間での大規模—小規模遺跡の組合わせ、もしくは石器組成の変異が同一集団の活動差を反映しているとの前提的な了解にたつて、それらの組合わさを介して遺跡間接続を復元しようとしていることがわかる。こうした対象をあつかうときには、発掘調査によってえられたデータが遺跡規模や石器組成の実態をどれほど反映しているのか、というデータ処理の場面での問題が無視できないのはいうまでもない⁷⁾。しかしながら、より本質的な問題と想定されるのは、石器組成や遺跡規模の変異から〈集団〉の活動差を読みとる際の方法論的妥当性であろう。

Mellars（*ibid.*: 386）が石器組成の変異として摘出しているのは、①細石器が組成中で卓越する石器群、②スクレイパーが組成中で卓越する石器群、③細石器とスクレイパーの両者がほぼ同じ比率の石器群、の三類型である。それぞれの類型は、〈集団〉が営んでいた行動連鎖のな



a 動物遺存体の検討にもとづく仮説モデル (Clark や Rowley-Conwy など)



b 遺跡規模や石器組成の検討にもとづく仮説モデル
(Mellars や Bang-Andersen など)

図 1-4 北西ヨーロッパの移動・居住形態仮説モデル

かの部分的な痕跡を表示しており、部分相互をつなぎ合わせていくことによって、全体的な移動・居住形態の復元が可能になると考えられている。なお、部分相互のつなぎ合わせにあたっては、〈本来的な石器組成〉なるものが仮定され、それが準拠枠となっていることは否定できない。つまり、細石器やスクレイパーは、相互に性格がまったく異なる石器器種であるため、そのどちらかが偏って検出されるのは、遺跡での活動の変異を示唆しているのもであって、両者が組合わさることで〈本来的な石器組成〉は構成されるのであろう、との仮定である。

しかしながら、ここで注意すべきなのは、こうした仮定が成り立ちうる諸条件について議論が充分につくされているわけではない、という点である。前述したように、動物遺存体の分析による遺跡の利用季節の推定に依拠した仮説モデルの場合、〈生物学的一般性〉という枠組みを適用することによって、考古学的記録のなかから〈相互補完性〉を示す傾向性を摘出することが可能であった。それに対し、石器組成や遺跡規模の検討による場合、どのような石器組成の類型どうしが、あるいは、どのような遺跡規模の類型どうしが接続するのかに関して、有効な指標をあたえるような準拠枠は存在しないのである。

したがって、石器組成や遺跡規模の検討から移動・居住形態の復元を試みる際には、遺跡間接続の蓋然性をできるだけ高めようと努めることが肝要である。そのために、対象にできるかぎりの時間的限定をくわえ、複数の遺跡において遺物の共伴関係を慎重に検討し、くわえて、石器製作技術、とりわけ剥片剥離技術の異同の確認がおこなわれるべきであろう。ただし、Binford (1979) が提起した「技術的組織 (organization of technology)」概念が示唆するように、〈集団〉が直面するさまざまな状況に応じて、遺跡内・間で石器製作技術に変異が生じる可能性は、充分に想定しておかねばならない。対象とする資料が帰属していた地域的状況（石材環境をふくめた自然環境および社会的諸環境）の復元や、石器製作技術の比較をおこなった際に利用した属性の性格の解明（おもに石器石材、剥離工程、剥離方法、製作・使用・廃棄状況のそれぞれに規定をうけている属性の摘出）が、ここで必要となってくるのである。石器製作技術の比較研究に関するこれらの検討課題の見通しについては、ここで詳述することができないため、別機会において論ずる機会をもうけたい。

次に、南スカンディナビアの中石器時代を対象とした移動・居住形態研究について考察していく。

南スカンディナビアにおける移動・居住形態研究の特徴といえる点は、Mikkelsen (1978) あるいは Bang-Andersen (1996) の議論にみることができるよう、何らかの地理的景観によって画される〈地域〉を検討対象として先見的に措定し、そこから検討を出発させていることにある。この場合、沿岸部や内陸部、低地や高地などがそうした〈地域〉に該当することになる。ブリテン島の中石器時代に関する Clark の仮説モデルにも、こうした〈地域〉の措定という考え方をうかがうことはできるが、南スカンディナビアにおける諸研究のほうが、それをより明示的に議論の出発点にしているといえるだろう。

こうした〈地域〉の措定にもとづいて、南ノルウェーにおける内陸部の遺跡を沿岸部の遺跡と対比させると、①いずれも小規模（遺物のひろがりおよび遺物密度）で、②石器組成に偏りがみられる、という傾向が考古学的記録に認められることが指摘された。くわえて、古環境に関する分析（植生や動物相の検討にもとづいて予測される資源量とその季節的変動）によ

って、内陸部のなかだけでの通年的な居住活動を維持するのは困難であったことも、あわせて推定された。以上の結果をふまえて、沿岸部と内陸部とのあいだで季節的な標高移動がおこなわれ、とくに内陸部は夏季を中心にした期間にのみ利用されていたのであろう、との仮説モデルが提示されたのである。

南ノルウェーの中石器時代研究において、沿岸部と内陸部とのあいだに認められる対照的な考古学的記録の傾向性が、フォスナ文化期からネストベット文化期にいたるまで、すなわち、中石器時代全般を通じて存在していたと指摘されている点は、注目すべきことである。これは、内陸部で観察された考古学的記録の傾向性が、決して一時的な状況を示しているのではなく、長期にわたって存在し続けたパターンの反映である可能性が高いことを示唆していると考えられよう。Mikkelsen らの仮説モデルが依拠している考古学的記録の傾向性は、沿岸部のなかだけで通年的な居住をおこなっていた人間集団が存在する可能性を、かならずしも排除しているわけではない。しかしながら、考古学的記録の傾向性から想定される内陸部の利用状況が、中石器時代を通じて一貫して認められるとするならば、Bang-Andersen (1996:429-440) が「沿岸部－内陸部の相互関係 (coast/inland interaction)」と呼ぶ移動・居住形態のあり方は、南ノルウェーの中石器時代における行動連鎖のパターンを考えるうえで、きわめて重要な意義をもちうることはまちがいのなかろう。

なお、Indrelid (1975) や Mikkelsen (1978) らは、南ノルウェーでの石器石材の利用状況について検討をおこない、沿岸部でのみ採取可能なフリントが、内陸部の遺跡で石器石材の組成の中心となっていることをあきらかにしている。この事例に関しては、交換などによる間接的入手を想定しがたいだけに、内陸部のなかだけで活動が完結していたと考えることは難しいことを示唆していよう。先述したように、こうしたあり方は、季節的な標高移動の存在を支持する傍証のひとつとなりうるものであり、他地域でも積極的に吟味されるべき対象といえる。

c. 小結

北西ヨーロッパの中石器時代を対象とした移動・居住形態研究の多くが、ある地理的範囲内の考古学的記録のなかから、〈集団〉の行動連鎖のパターンを反映するような傾向性の抽出を試みていること、それにもとづいて近似値的な仮説モデルが提示されていること、がここまでの議論によってあきらかにされた。具体的には、沿岸部と内陸部という異なる地理的景観のあいだで、動物遺存体や石器組成、遺跡規模などに認められる〈相互補完性〉に着目することによって、そうした傾向性の抽出がなされている場合が多く認められたのである。結果的には、そうした〈相互補完性〉の把握によって、遺跡間接続の蓋然性を保証しようとしていたことがわかる。

このような検討がおこなわれている際に、〈相互補完性〉が成立している単位として、何らかの地理的景観によって画される〈地域〉の指定がおこなわれていることは見逃すべきではなかろう。すなわち、個々の〈遺跡〉が基本的な説明の単位となっているのではなく、指定された〈地域〉が説明の単位となって移動・居住形態が復元されているのである。換言すれば、それらの仮説モデルでは、〈地域〉と〈地域〉とのあいだでの行動上の関係が復元されていると理解すべきなのである。

このような復元は、個別の〈小集団〉によってのこされた移動の軌跡が、遺跡間接続によっ

てあきらかにされているというよりはむしろ、ある地理的範囲内で〈小集団〉の違いをこえて展開していた共通の行動連鎖のパターンこそが、そこで把握されていると考えるべきなのであろう。必然的に、仮説される〈小集団〉のスケールからみれば、それらの研究では、近似値的な移動・居住形態の仮説モデルが復元されているにすぎないことになる。行動復元の解像度（Gamble 1986:22-24）という点では、一定の粗さがのこされていることは否定しがたいのである（Rowley-Conwy 1987:77）。

その一方で、北西ヨーロッパの中石器時代を対象とする移動・居住形態研究が、動物遺存体の分析結果や古環境分析から推定される資源状況を議論の展開に組み込むことによって、活動の季節性とその空間的配置を考慮にいたした仮説モデルが提示されていること、つまり、遺跡間の差異を機能分有の観点から積極的に把握しようとしていることがあきらかとなった。季節的分化を中心にして行動連鎖のパターンが組織だてられ、なおかつそれが、考古学的記録の空間的なパターンに明瞭にあらわれていることをあきらかにした意義は大きい。考古学的記録の傾向性の読みとりにあたって、まず何を重視すべきかという点で、北西ヨーロッパの諸研究がいくつかの示唆的な分析視座を提供しているのはまちがいないのである。

5. 日本の移動・居住形態研究

（1）後期旧石器時代の移動・居住形態研究

ここからは、日本の後期旧石器時代における移動・居住形態研究を検討していく。日本の研究もまた北西ヨーロッパの場合と同様に、どのような検討対象から立論をおこなっているのかに応じて、研究動向を整理することが可能である。日本ではおもに、①石器製作工程の分析から遺跡間の関係を議論しているもの、②石器組成の変異から遺跡間の関係を読みとろうとしているもの、という二つの方向性が認められる。以下では、それぞれの具体的な内容について検討していきたい。

a. 石器製作工程からの検討

日本で移動・居住形態の研究が本格化しはじめたのは 1960 ～ 1970 年代前後のことであるが、周知のように、埼玉県砂川遺跡における調査・研究がその契機のひとつとなっている。砂川遺跡の調査・研究の過程で示された接合資料や同一個体資料を用いる検討は、遺跡内の遺物集中区（ブロック）間の同時性や関係性をあきらかにするために開発されたものであった（戸沢他 1974）。それによって、遺跡内から遺跡間の問題に新たな視点が切り開かれたことは特記されるべきであろう。すなわち、石器製作工程のなかにそれぞれの「同一個体資料」を位置づけることによって、遺跡から搬入された個体・搬出された個体を識別し、それを他遺跡から砂川遺跡へ、砂川遺跡から他遺跡への移動活動の証左とする安蒜政雄の論議（1977）は、後期旧石器時代における移動活動の存在を立証した点で、大きな意味をもつものであった⁸¹⁾。

しかしながら、砂川遺跡における調査・研究の成果からは、以下のような問題点が生じるようになった。まず第一に、砂川型遺跡構造論のモデル（矢島 1977）が定式化されることによって、「砂川モデル」と呼ばれるような遺跡間の関係性が、研究全般のなかで急速に一般化さ

れてしまった点である（野口 1996:108、佐藤 1997:3）。「砂川モデル」とは、同質の石器製作作業が複数の遺跡でなかば無限に連鎖していくような状態を想定するものである。いうまでもなく、こうした復元は、特定の時期的・地域的様相が色濃く反映しているものと考えられ、単純に普遍化・一般化することはできないにちがいない（野口 前掲）。移動・居住形態研究の一般的な方法論を考える場合には、遺跡間の関係性について個別事例からの性急な一般化をおこなうのではなく、ある地理的範囲内の複数遺跡の分析をふまえて、柔軟に考古学的記録の傾向性の摘出をおこなっていくことが重要であろう。

第二は、移動活動の範囲をめぐる問題点についてである。砂川遺跡の調査とその後の研究段階において、集団の移動活動の範囲そのものを画定することは、議論の直接的な目的にはなっていなかった。しかしながら、砂川遺跡の調査成果に依拠しながら、後期旧石器時代の生活や社会に関して言及がなされるとき、河川流域もしくは一台地を何らかのレベルの集団が領有していたのではないかと、という命題が議論の出発点にすべりこむことになる（近藤 1976:62-64、小野 1976:13-14、戸沢 1984:62-66）。後期旧石器時代における社会構成の重層性を描きだすための作業仮説として設定された、〈一河川流域もしくは一台地＝何らかの集団の移動活動の範囲〉という仮定は、しかしながら、図式の簡明さと説明の容易さから、十分な検証作業を経ないまま、なかば自明視されるようにして、議論のなかで頻繁にとりあげられることとなる。

いうまでもなく、遺跡の空間的な集中から把握される〈遺跡群〉が、集団の移動活動の範囲とみなすべきアприオリな根拠はない。遺跡の空間的集中をこえた地理的範囲を、集団は移動の範囲にしていた可能性が十分に想定できるからである。あるいは逆に、一河川流域よりも小規模な範囲を移動していた可能性も十分に想定可能であろう。したがって、移動・居住形態の論議をおこなっていく際には、そうした前提を検証できるような分析が講じられるべきであったのである。そのためには、複数の遺跡が実際に検討対象の俎上にあげられる必要があったが、複数遺跡間の分析が具体化しはじめるのは、1980年代以降になってからのことである。

砂川遺跡における調査・研究成果の公表以後、日本の後期旧石器時代遺跡における発掘調査では、出土遺物の空間的・垂直的分布状態が詳細に記録されるようになった。そして、砂川遺跡の調査・研究でとりあげられた同一個体資料にもとづく「遺跡構造論」研究が、各地で展開されるようになった。これにより、一遺跡内での石器製作作業の内容を、個体単位で把握することが可能な資料が量的に増えた。さらに、自然科学のなかで石器石材の原産地推定方法が確立されたことにより、遺跡から検出された石器石材がどこで採取されたのかについても、特定が可能になってきている。この二つの方面での研究の深化が、遺跡間のつながりを論議するためのデータ面での基盤を用意することとなる。

上記のようなデータを駆使した新たな主張が、1980年代以降あらわれる。その新たな主張とは、石器石材の採取活動が、日常的な生業活動や移動活動のなかに埋め込まれていたとの観点から、石器製作技術の遺跡間での比較によって、積極的に移動活動の軌跡を解釈しようとするものである。具体的には、近畿地方の瀬戸内技法を対象とした山口卓也（1983、1994）の所論をあげることができる。二上山一帯のサヌカイト原産地遺跡とその周辺の遺跡とで、おこなわれている石器製作作業の工程上の内容に差が認められることに着目した山口は、そのような現象を「石器製作の異所展開」と命名し、原産地遺跡と消費地遺跡との相互往復的な移動活動

を推定している。絹川一徳（1993）もまた瀬戸内技法がみられる石器群を対象に、遺跡間の石器製作工程上のつながりを論じている。田村隆（1990）は、後期旧石器時代前半期の石器群を対象にした研究のなかで、北関東を中心とした黒色頁岩・黒色安山岩の原産地近傍・周辺の遺跡では、石刃が大量に剥離されているのに対し、下総台地のような原産地から遠隔の河川下流域では、単独搬入例の石刃が多く検出されているという傾向性を指摘した。こうした傾向性から、原産地近傍・原産地周辺・河川下流域を領域範囲とする集団の周期的な移動活動が復元されたのである。

ここでとりあげた諸研究に共通しているのは、石器製作作業の遺跡間における工程上の差異にもとづいて、石器製作工程に関する遺跡間での相互補完的状況が復元されていることである。つまり、全体の石器製作工程のうち、ある一部分（たとえば二次加工の施された石器）だけが遺跡で検出される場合、それ以外の工程（石器の素材を製作する工程）は、他遺跡で実施されていたと考えなければならない。こうした現象の把握は、遺跡間接続の蓋然性を支持する論拠となりえよう。

石器製作の工程に関する相互補完的状況が、石器石材の原産地近傍・周辺とその遠隔地とのあいだで成立していると指摘されている点は、きわめて重要である。偏在する石器石材の原産地近傍・周辺と、そこから遠隔の地域との相互往復的な移動活動が推定されているということは、すなわち、台地などのようなある特定の地理的景観内にとどまらない、複数の地理的景観にまたがる移動・居住形態が復元されている、ということの意味していよう。くわえて、石器製作作業の遺跡間における工程上の差異をあきらかにしているということは、「砂川モデル」で含意されているような、同質の石器製作作業が遺跡間でなかば無限に連鎖していく状況とは、あきらかに異なるあり方が想定されているのである。

同じように遺跡間での石器製作工程のつながりに着眼した分析でも、南関東の後期旧石器時代後半期を対象とした場合には、検討対象があらかじめ台地単位で措置されているため、〈集団〉が移動活動を実際におこなっていた範囲も台地内部に収斂していたように見受けられる（野口 1995、島田 1998 など）。南関東のとりわけ武蔵野・相模野両台地では、IV下・V上層段階とされる時期を境に遺跡数が増加し、あわせて台地内の河川沿いに遺跡群が形成されるようになる（安蒜 1985）。当該期のそうした遺跡分布の傾向、あるいは在地の石器石材が利用される傾向などは、台地もしくはある特定の河川流域が、移動活動の範囲になっていたことを強く示唆するものと解釈されてきた（栗島 1986:80-83、安蒜 1990:18-21、須藤 1991:22 など）。上記の移動・居住形態の解釈も、こうした傾向に沿ったかたちで提示されていると考えられよう。

b. 石器組成間変異からの検討

次に、遺跡間における石器組成の変異にもとづいた移動・居住形態研究について検討していきたい。

北海道東部の常呂川流域で継続的な後期旧石器時代遺跡の調査をすすめていた加藤晋平らは、「常呂川パターン」仮説を提唱した。この「常呂川パターン」仮説とは、いわゆる石器組成間変異（inter-assembly variability）が存在するとの視点にたって、常呂川流域に分布する遺跡のうち、直接的生産具（尖頭器・細石刃など）が多出する遺跡、間接的生産具（搔器・削器など）

が多出する遺跡、石刃生産がおこなわれている遺跡とが、同一集団によつてのこされたと想定するものであった（加藤・桑原 1969、加藤 1970）。

同一集団の地点に応じた活動差に着目するこの仮説は、石器群の差異を単純に時間差として編年的に解釈する従前の研究に対して、機能論的立場から批判的警鐘をなげかけたものといえる。その意味では、移動・居住形態研究の領域だけでなく、編年研究においても大きな意義をもちうるものであった。また、同質の石器製作作業が複数の遺跡でなかば無限に連鎖していくような状況を想定する「砂川モデル」とは異なり、「常呂パターン」仮説においては、遺跡間の差異を機能分有の観点から解釈することで、異なった活動がおこなわれていた遺跡の組合わさをあきらかにすることが可能となっている。「砂川モデル」とはあきらかに異なる遺跡間の関係性が復元されているといえよう。

しかしながら、遺跡間接続することになる遺跡の摘出の局面では、石器（搔器）の微細な属性の共通性が「同一のコミュニケーション下の人間集団」（加藤他 1969:232）のひろがりを示す、という点から議論が組み立てられていることは注意しておきたい。すくなくとも、石器の微細な属性の共有は、何らかのレベルで実在的な「集団」を反映している、との命題を前提に組み込むことによって、この解釈が提示されていることはまちがいないだろう。

こうした解釈の前提に対しては、なぜ搔器だけが単独で「人間集団」弁別の基準にならねばならないのか、という批判がすでにだされている（大井 1973:19-20）。搔器のもっている属性の共通性が、「人間集団」弁別の基準になりうるかどうかの蓋然性はともかく、「常呂パターン」仮説が、はたしてどのレベルの「集団」を摘出しようとしているのか、不明確なことは指摘しておかねばなるまい。実在的な〈小集団〉のレベルもしくはそれより上位の単位が想定されているのか、あるいは、本稿で論じてきたような、ある地理的範囲内で共通した行動連鎖のパターンをのこしていた〈集団〉が想定されているのか、議論の余地はいまだのこされているのである。

「常呂パターン」仮説で提起されている諸問題のうち、石器のもっている属性と「集団」認定とのかかわりという視座は、移動・居住形態とはまた別の新たな問題系を問うことを意味している。ここで十分に紙数を割いてその問題について論議するだけの余裕はないため、早急な結論をくだすことは避け、後日に理論面での可能性を検討してみることにした。

c. 小結

すでに指摘（野口 1996、佐藤 1997）されているように、日本の後期旧石器時代における移動・居住形態研究の確立にとって、砂川遺跡の調査・研究がはたした役割が大きいのはまちがいないといえよう。後期旧石器時代では、頻度や距離は別として移動活動が恒常的におこなわれていたこと、遺跡で確認できる活動の痕跡はあくまでも断片的なものであること、が実際の資料によつて確認された意義は大きい。次なる問題として認識されたのは、移動・居住形態の復元という目的からいって、いかにして点（遺跡）から面へ分析の視点を拡張させていくことができるのか、ということにあった。この課題に答えていくために、日本の後期旧石器時代の移動・居住形態研究においては、おもに二つの方向からのアプローチがあったことを、ここまでの議論では示してきた。以下では、それぞれのアプローチの性質と問題点を整理しておく。

遺跡間での石器製作工程のつながりを把握しようとする視座は、遺跡間接続を把握するため

のきわめて有効な手段といえるだろう。なぜならば、石器製作工程という物理的に不可逆的な進行を示さざるをえない現象に着目することによって、遺跡間接続の必然性をあきらかにしようとしているからである。北西ヨーロッパの移動・居住形態研究を検討してきた脈絡からいえば、物理的な現象の一般性の高さに依拠することで提示された仮説モデルと評価することができる。このような原理の適用によって仮説モデルが導出されているため、未検証の先見的理解をもちこまずとも、議論を出発させることが可能となっている。

石器製作工程の検討にもとづいた仮説モデルのうち、石器石材の原産地近傍・周辺とそこから遠隔地とのあいだでの相互往復的移動が想定される場合、石器石材の原産地からの距離を基準にして設定された〈地域〉が、そこでの分析単位とみなされている。〈地域〉相互の関係を介して行動連鎖のパターンが復元されるという点では、北西ヨーロッパで提示されている仮説モデルと共通点が多いといえよう。そのため、北西ヨーロッパの仮説モデルを検討した際に指摘したように、〈小集団〉のレベルからみれば、近似値的な仮説モデルが復元されているということになるのであろう。

ただし、石器製作工程のつながりに関する指摘をおこなっていく際には、以下のような問題点が整理されねばならない。その第一は、検討対象とする遺跡間において、利用されている石器石材や石器製作技術にどの程度の共通性がみられるのかどうか、を十分に吟味しておく必要があることである。石器製作工程のつながりを想定する以上、検討対象とする遺跡間において、石器石材や石器製作技術に何らかの共通性が認められねばならない。ここで詳細な石器群の比較研究が必要となる。

第二に、検討対象をどのように指定するのかという問題である。前に述べたように、遺跡の空間的なまとまりによって画定される遺跡群を〈集団〉の移動範囲とする前提から出発するかぎり、石器製作工程のつながりを指摘しえたとしても、それで〈集団〉の移動・居住形態の全体像が復元できたというわけにはいかない。入手・利用過程が充分には判明していない石器石材の組成の傾向から移動範囲を画定してしまうのも同様に問題がある。

第三に、移動・居住形態の仮説モデルにまで仕上げようとするならば、石器の検討だけにとどまらないで、北西ヨーロッパの諸研究が示しているように、遺跡分布・遺跡規模・遺跡立地・古環境的分析から復元される資源状況などを包括的に説明する枠組みをつくる必要がある。仮説モデルの有効性の一端が、説明する事象の広範さによって決定されるとするならば、石器の分析だけに偏りがちな日本の研究状況では、妥当かつ有効な仮説モデルは提示しがたいにちがいない。各要素を仮説モデルのなかにどのように統合すべきかという点に、これまで以上の関心がはらわれるべきであろう⁹⁾。

筆者は第4節において、石器組成の変異を把握するだけでは、遺跡間接続することになる対象の妥当な措置はできないことを、ブリテン島の中石器時代を対象とした Mellars (1976a) らの研究をとりあげるなかで指摘した。加藤晋平 (1970) が提示する「常呂パターン」仮説では、対象の措置を石器・搔器の微細な属性の共有からあきらかにしようとしているが、それが「集団」認定とどのような関係をもつのかについて、細部での議論に検討の余地をのこしているため、議論の全体の可否を現時点で判断することはできない¹⁰⁾。

ただし、遺跡間の機能分有をとらえていくうえでは、「常呂パターン」仮説が示しているよ

うに、各遺跡における活動差の内容を何らかのかたちで把握することが必要である。石器組成の変異がその有効な指標のひとつとなりえることはたしかであるが、しかしながら、〈石器組成＝その場での活動内容〉とは直接的にはならないことに留意しておかねばならない。石器組成からその場での活動内容を復元するためには、石器組成を構成する各器種の使用頻度、消耗性、遺失性、再生可能性、移動・移住時の運搬性の検討、あるいは、石器組成が形成される過程での累積性の吟味がおこなわれるべきである（白石 1987、小杉・鶴田 1989）。縄文時代の石器研究において着手されているそれらの分析作業は、後期旧石器時代の石器組成に対しても実施される必要性が大いにあるといえよう。

（２）縄文時代初頭の移動・居住形態研究

以下では、縄文時代を対象とした移動・居住形態研究をめぐる問題点について概観してみたい。とりわけ、墓や貯蔵庫などを取り込んだ集落が出現する縄文時代前期（林 1997:46-47）以前の段階についてとりあげることにする。縄文時代研究における集落論もしくは領域論と呼ばれる分野は、本稿でここまで検討してきた移動・居住形態研究と大きく重なる対象を議論している。ただし、それらの多くは、縄文時代前期以降を対象にしているものが多く、そのためここでの議論の対象からは除外することにしたい。ここでとりあげたいのは、とくに〈定住論〉と呼ばれる潮流である。

縄文時代草創期・早期の年代観に関しては、近年、加速器質量分析法（AMS）を適用した放射性炭素年代測定の結果、九州地方の草創期の開始は 15,000yrs BP 以前に、早期の開始も 12,000yrs BP 以前にさかのぼることがあきらかにされている（北川 1994）。東日本に関しては、データの集積がまだみられないため、詳細は不明である。

a. 〈定住論〉からのアプローチ

縄文時代草創期や早期の居住活動に関するこれまでの研究は、南九州や南関東の資料をあつかっている場合が多い。近年の検出資料の増加と比較的整備された編年枠が、そうした議論の成立を可能にしているのであろう。それらの研究は、多くが〈定住論〉というかたちで、定住にいたる過程およびその要因を究明することに目的が設定されているのが特徴である。本稿で検討してきたような、ある地理的範囲内の考古学的記録の検討によって、〈集団〉の行動連鎖のパターンをあきらかにしようとする研究のほうが、むしろ少ないといえる。

南九州における定住化の確立が、縄文時代早期前半の貝殻文期に位置づけられるであろうことについては、多くの意見が一致をみている（米倉 1984、雨宮 1993）。さらに近年、竪穴住居址や土器・石器が多量に検出される事例が増加してきたため、草創期新段階においても定住化の高まりが想定されるようになってきた（雨宮 1993:1013）。一方の南関東では、草創期末葉の撚糸文期から竪穴住居址が多くみられるため、ここに定住化の画期が設定されている（原田 1993:85）。しかし、撚糸文期の集落にしばしばみられる竪穴住居址の重複例から、集落の反復的な利用も想定されており（小杉 1998:321、谷口 1998:11）、定住化の確立がより後代にまで引き下げられる可能性もある。竪穴住居址の床面積や堀形のプランなどが総合的に検討された結果によれば、南九州を除いた地域での定住的な集落の成立の画期は、早期中葉にもとめられている（林 1998）。

こうした〈定住論〉では、分析対象とする遺跡が所与のものとして設定された定住にどれだけ近づいているのかどうか、に論議の焦点があてられることになる。必然的に、〈定住—非定住〉という対立的な図式のもとで、そのどちらかに決するための判断基準を確定することに議論が集約されることになる（米倉 1984、雨宮 1993、原田 1993 など）。このような分析視点は、たしかに〈定住〉が成立するメカニズム、およびそれを考古学的記録からどのように読みとるべきか、という点について一定の共通理解をもたらしていることはまちがいない。しかしながら、このような視点だけでは、定住化のプロセス自体を十分に復元することは難しいであろう。

本稿でのここまでの検討結果を鑑みると、今後の研究の方向性としては、以下のような問題の検討が必要なことが理解される。まず第一に、〈集団〉の行動連鎖のパターンを理解していくうえでは、これまでのようにかぎられた遺跡の検討だけで全体的な状況を推測していくのではなく、複数の遺跡間の関係性について十分な検討が必要であろう。遺跡の類型化などがまず着手されるべき作業といえる。第二に、上記のような検討にもとづいて、移動活動の具体的な内容、とりわけその頻度や距離、季節的パターンの有無などの解明がおこなわれるべきである。定住が達成された段階にしろ、定住が達成されていない段階にしろ、何らかの移動活動がある地理的範囲内でおこなわれていたことはまちがいない。その特性をあきらかにすることは、生業対象とのかかわりや活動空間を考えていくうえでも、定住化のプロセスの復元にとっては、きわめて重要な課題となるにちがいないと思われる。

次に、以上のような課題の解明の端緒となりえる分析作業のいくつかについて、近年の研究動向のなかから検討してみることにしたい。

b. 移動・居住形態復元の可能性

桜井準也（1995:5-11）は、南関東の隆起線文期を対象に遺跡や遺物集中部の類型化を、出土遺物の分布面積や密度、それに遺構の検出状況・石器組成・土器出土の有無・遺物の分布構造などを考慮にいれることでおこなっている。谷口康浩（1998）もまた、南関東地方の撚糸文期の遺跡を、集落の立地・堅穴住居構造の定型性・住居配置の計画性・堅穴住居の継続性・集落の反復性などを指標にして類型化している（図 1-5）。両者の試みは、遺物集中部間もしくは遺跡間でのいくつかの要素の差異を手がかりに類型化をおこなうことで、相互の関係性についての具体的な解釈を可能にした点で、きわめて注目に値するものといえよう。

そうした遺物集中部もしくは遺跡の類型化作業が、集団の移動・居住形態復元の第一歩となることはまちがいない。ただし、桜井準也の議論が代表するように、移動活動の範囲をあらかじめ台地内に収斂させている点については、検討の余地がありそうである。たとえば小杉康（1998:320-322）は、隆起線文期や撚糸文期において、低地である海浜と台地上との周回的な標高移動の可能性を指摘しており、台地上で移動活動が完結していたのかどうかについて疑問を呈している。谷口康浩（前掲:13-14）もまた、撚糸文期の武蔵野台地と下末吉台地・多摩丘陵とのあいだで移動・居住形態が異なっていた可能性を模索しており、とくに後者においては、台地から丘陵にまたがる移動活動の存在を推定している。これらとは別に、山間部における洞穴・岩陰遺跡の利用形態を検討した栗島義明（1998:120-122）は、縄文時代草創期・早期の段階において、山間部への移動にかかわる居住地もしくはキャンプ地として、洞穴・岩陰が利用

されていたことを推測している。栗島の指摘からは、台地上の開地遺跡と山間部の洞穴・岩陰遺跡との関係を立証するために、今後何らかの分析作業が必要であることがあきらかにされたといえよう。

これらの見解は、台地上の遺跡だけを検討の対象として最初に措定し、それにもとづいて移動・居住形態の復元をおこなうことの問題点をあかすみにだしているものと考えられる。もちろん、海浜部と台地上とのつながり、または台地上と山間部とのつながりに関して、遺跡間接続の見地からみればかぎり十分な立証がこれまでなされてきたとはいいがたく、そのため、上記の諸見解もまだ可能性の指摘にとどまっているというべきである。しかし今後は、海浜部と台地上とのつながり、および台地上と山間部とのつながりにくわえて、その両者が一連のものとなっていた可能性、すなわち、海浜部から山間部までが移動範囲となっていたことをも積極的に考慮に入れて、相互の関連性を検証していく作業が必要であろう。

移動・居住形態の検討をすすめる手順のひとつとしては、このように想定可能ないくつかの状況を考慮に入れて、考古学的記録の傾向性の吟味をおこなっていくことが有効である。当該期の検討に関するかぎり、これまで看過されてきたといっても過言ではない、貝塚や洞穴・岩陰からえられる動物遺存体の分析が、重要な知見をもたらすのではないかと予測される。動物遺存体の分析にもとづく各遺跡の利用季節の推定が可能になったならば、北西ヨーロッパの諸研究をとりあげるなかで紹介したように、季節性を軸とした遺跡間のつながりを立証する可能性に途がひらかれよう。もちろん、台地上の諸遺跡で動物遺存体が検出される可能性は今後も皆無に等しいため、すくなくとも、海浜部もしくは山間部が特定の季節に利用されていたのか否かの傾向性を摘出していくことが、当面は重要といえよう。

ただし、当該期の貝塚に関して注意を要するのは、その多くが縄文海進期の浸食作用によって消滅してしまった、もしくは沖積作用の結果形成された厚い地層下に埋没してしまった可能性があることである。関東全域をみても、縄文時代早期末葉の条痕文期と比較すると、草創期末葉の燃糸文期の貝塚数は極端に少ない。ただし、三浦半島周辺でまとまって当該期の貝塚が発見されているように（Toizumi and Nishimoto 1997）、海底地形や地殻の隆起によって、当該期から現在にいたるまでの海岸線がそれほど変化していない地域では、当該期の貝塚が良好に遺存している可能性がある。遺跡の分布をみていく際には、こうした問題点について十分な考慮をはらっておく必要がある（第IV章参照）。

6. まとめ

本章では、最初に移動・居住形態研究の基本的枠組みについて整理し、そのうち北西ヨーロッパと日本におけるこれまでの移動・居住形態研究の問題点を検討してきた。第2節で提示したような、ある地理的範囲内の考古学的記録に認められる傾向性の摘出から、〈集団〉の行動連鎖のパターンをあきらかにしていくという分析の枠組みは、これまでの移動・居住形態研究を整理していくうえで、また今後の研究の展望を考えていくうえでも、有効であることが確認されたといえる。移動・居住形態研究の領域においても、議論の枠組みを方向づける適切な前

提を設定し、そこから検討作業のプランを導出していくことは、妥当かつ効率的な研究戦略とみなされるべきであろう。

北西ヨーロッパの移動・居住形態研究を吟味するなかで、日本の当該研究においては見過ごされがちであった、一遺跡の分析・評価にとどまらない、広域に散在する考古学的記録のなかに認められる傾向性に着目すること、活動の季節差とその空間的配置の把握によって、遺跡間における機能分有の実態を復元すること、の重要性を確認してきた。それらの仮説モデルの提示にあたって重視されている〈相互補完性〉の摘出は、今後も遺跡間接続の問題を考えていくうえで、有効な分析視座のひとつとなりえるであろう。

ただし、これまでの北西ヨーロッパの諸研究を通観すればあきらかなように、沿岸部と内陸部とのあいだでの季節的な標高移動を復元している仮説モデルがきわめて多いため、結果的に、そうした状況が一般化されがちである傾向は否定できない。移動・居住形態の復元にあたっては、時期や地域に応じた自然環境・社会的状況の差異を考慮にいれつつ、考古学的記録に観察される傾向性を整合的に説明するような仮説モデルを柔軟に組むことが肝要である。当然ながら、季節的な標高移動以外の行動連鎖のパターンの具体的なすがたについて、積極的に探求されねばならないのである。

かりに仮説モデルの構築にあたって、どのような行動連鎖のパターンを念頭においているのかという点が、考古学的記録の傾向性の読みとりとに重大な影響をあたえる可能性を認めるならば、所与の環境下での〈狩猟採集集団〉が示す行動連鎖のパターンのバリエーションについて、また、それが考古学的記録にどのような傾向性として残存するのかについて、議論を要する多くの問題点がのこされていることはたしかである。こうした問題の体系的解明には、〈エスノアーケオロジー〉からのアプローチが有用といえよう（阿子島 1997:107）。

本章では、ある地理的範囲内における考古学的記録の傾向性の摘出と、そこからの仮説モデル提示という手続きに関して、積極的な立場から議論をすすめてきたことは事実である。場合によっては、現実の考古学的記録がきわめて複雑な様態を呈すること、そのために傾向性の摘出も容易でないことは、十分に視野にいれておかねばならない。しかしながら、傾向性の摘出が困難なことが確認されたならば、逆に、なぜそのような現象が生じたのかを問うことによって、あらたな分析の展望が切り開かれるのではなかろうか。第5節の検討であきらかになったように、日本の既存の移動・居住形態研究においては、後期旧石器時代、縄文時代初頭を問わず、複数遺跡間の関係性に関する議論が実践されている時期・地域は、まだきわめて限定されている状況にある。今後、さまざまな時期・地域を対象とした事例研究の積み重ねが必要なのであるが、その際には、日本列島の考古学的記録の特性に適合した仮説モデルを構築するために、北西ヨーロッパとは異なる上述の視座からの検討プランをあわせてもっておくことが、ときには必要といえよう。

以上の議論によって、移動・居住形態に関する研究の現状と問題点があきらかにされたと考ええる。次章以下では、ここで指摘した諸問題を考慮にいれながら、北海道の石刃鏃石器群を対象とした具体的な検討をすすめていくことにしたい。

北海道の石刃鏃石器群をとりあげたおもな理由としては、以下のような点があげられる。

- ①北海道における当該石器群の存続期間は、共伴する土器型式が浦幌式（女満別式や東釧路Ⅱ・Ⅲ式は、いずれも浦幌式に伴出するものである）だけにかぎられるように、きわめて短期間であったと考えられる（沢 1968 など）。時間的な限定がきわめて容易におこなえるという利点がある。
- ②大陸・サハリンからの集団移住説が主張（木村 1976、梶原 1976、吉崎 1986 など）されるように、石刃鏃石器群は、北海道の在地の縄文時代の系譜からは大きく逸脱しているものである。石器製作技術の基幹的要素をなしている石刃剥離技術に代表されるように、石器群には独自の特徴が多々認められるため、北海道在地の系譜をひく他の縄文時代早期の資料からは容易に区別・摘出することが可能である。
- ③第二次世界大戦前後から多くの研究者の関心をあつめてきたためか、発掘調査もしくは表面採集によって、一定の分布のパターンをもちつつも、北海道東部のほぼ全域にわたって極端な偏りがなく遺跡は発見されている。そのため、遺跡間変異をおさえた議論が可能となっているのである。

このような理由から、移動・居住形態の復元的研究をおこなうにあたっては、北海道の石刃鏃石器群が格好の題材となりえることが理解できよう。

次章では、石刃鏃石器群をのこした〈集団〉の移動・居住形態の復元にとって必要な石器製作技術の復元をおこなうことにする。

Ⅱ 北海道における石刃鏃石器群の石器製作技術

1. 目的

本章の目的は、羅臼町オタフク岩遺跡第Ⅱ地点（涌坂・豊原 1991）出土資料を主要な検討材料にして、石刃鏃石器群における石刃剥離技術の具体的なあり方を、その剥離工程・方法¹⁾や利用石材に着目しながら復元することにある。同遺跡からは、石刃鏃石器群に属する良好な資料が検出されているため、ここでとりあげることにした。

石刃鏃石器群の最大の特色は、多くの石器の素材が石刃剥離技術によって供給されていることにある。したがって、遺跡間比較をおこなううえでは、どの遺跡においても量的に安定して観察・検討ができる石刃剥離技術を分析対象にすることがのぞましい²⁾。このような観点から、本稿では石刃剥離技術に焦点をしばり検討をくわえていくことにする。そして最後に、今後の研究の方向性について展望を示してみたい。

以下では、研究の現状を点検し問題点の整理をおこなう。

北海道の石刃鏃石器群における剥片石器の製作技術、とりわけその石刃剥離技術に関しては、〈真正な〉・〈美しい〉・〈完成された〉という形容が付されて説明され³⁾、石刃鏃石器群が時間的に位置する縄文時代早期中葉⁴⁾の北海道東部のなかでの特異性が語られる場合が多い（吉崎 1986:301-303 など）。こうした、いわば〈イメージ〉は定着している一方で、実際の資料の技術的屬性に吟味をくわえ製作技術の全体像を復元しようとした研究はきわめて少ない。実際の資料に対して基礎的検討をこころみた研究例としては、石刃核の原形から石刃剥離にいたるまでの工程の検討をおこなっている東山遺跡の報告書（斉藤他 1966:29-36）、剥離方法について言及している加藤晋平の論考（1972:11）、石刃核・石刃・調整剥片などについて要を得た記載をおこなっている木村英明の論考（1976:6-7）、などがわずかにあげられるのみである。これらの研究以降は、新資料の蓄積がわずかであることも一因となって、石刃鏃石器群の石器製作技術に関する議論は低調なままの状態がつづいている。

結果的に、第一に、石材がどのように採取され石器製作作業にくみこまれていったのか、第二に、石刃核の原形から石刃が剥離されるにいたる流れがどのようなであったのか、第三に、どのような剥離方法により石刃が剥離されたのか、という三点の問題に関して、これまで十分な把握はなされてこなかったといえる。技術的屬性の吟味にもとづいた石刃剥離技術の全体像の把握が充分にはなされていないため、遺跡間・地域間（石刃鏃石器群が分布する北海道・サハ

リン・アムール川流域などのあいだ)での比較も石刃剥離技術の存在を指摘するといったレベルにとどまっており、石器群を構成する技術的属性のレベルにまで分解しての比較はなされていないのである。

本章では以上のような問題を考慮にいれ、石刃鏃石器群における石刃剥離技術の実態を把握するための基礎的な検討作業をおこなう。本章でおこなう検討は、それぞれの遺跡での石器製作作業の位置づけを評価するに際しての基準をつくりだすものであり、また遺跡間の比較研究へむけての基礎的作業として位置づけられるものである。

2. 検討対象

北海道の石刃鏃石器群に関しては、これまで十分な接合資料がえられてはおらず、そのため接合資料にもとづく石器製作技術の検討をおこなうことができない現状にある。接合資料による石刃剥離技術の分析は別途おこなう予定であり、ここでは石刃核や石刃、関連する調整剥片の属性分析に焦点を絞り、それを通じて石刃剥離技術の吟味をおこないたい。計測を要した属性については図 2-1 にその位置を示してある。

検討対象の遺跡としては、石核や石刃、調整剥片等が多量に検出され、定量的な分析にもたえられる遺跡を選定しなければならない。ここでは、冒頭で述べたようにオタフク岩遺跡第Ⅱ地点をおもな検討対象の遺跡とする。ただし、石刃核の原形や石刃核に関しては、オタフク岩遺跡第Ⅱ地点だけの資料では十分な観察ができないため、湧別市川遺跡(木村 1973)、豊里遺跡(米村 1992)、東山遺跡(斉藤他 1966)、東神楽 14 号遺跡(岩谷・斉藤 1959)から発見された資料をも適時、検討対象として利用する。

オタフク岩遺跡第Ⅱ地点は、1990 年に羅臼町教育委員会によって 800 m²が調査された、根室水道に面する知床半島の海岸段丘上、標高 40 m の地点に立地する遺跡である(図 2-2)。現海岸線からは 100 m ほどの距離の崖上に位置しており、海との関係を想像することは容易である。竪穴住居址が 5 基検出されており、集団による一定の居住活動が営まれていたことは間違いない。オタフク岩から検出された石器群の石器組成は、石器 1340 点(12.42%)、石核 34 点(0.31%)、石刃 839 点(7.77%)、剥片・碎片 8580 点(79.5%)であり、石刃や石刃核、剥片・碎片が多量に出土していることからみて、遺跡内で石刃剥離から石器製作作業までがおこなわれていたとみて大過なからう。

3. 石刃剥離技術の検討

ここでは石刃剥離技術を、原石から石刃核の製作、石刃剥離、石器製作そして石器の変形にいたるまでに運用される技術と規定する。本章では、そのなかでも利用石材、石刃剥離にいたる工程上の特徴、石刃剥離方法(打撃・加圧法)、石器の素材、以上の四点の検討をおこなう。

(1) 利用石器石材の検討

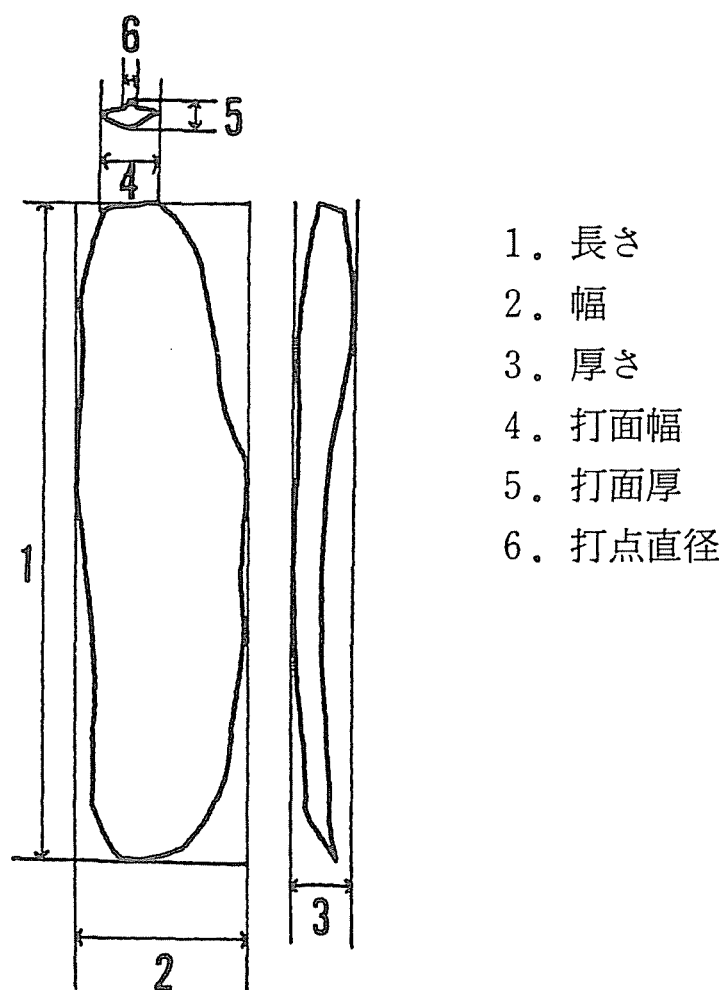


図 2-1 属性

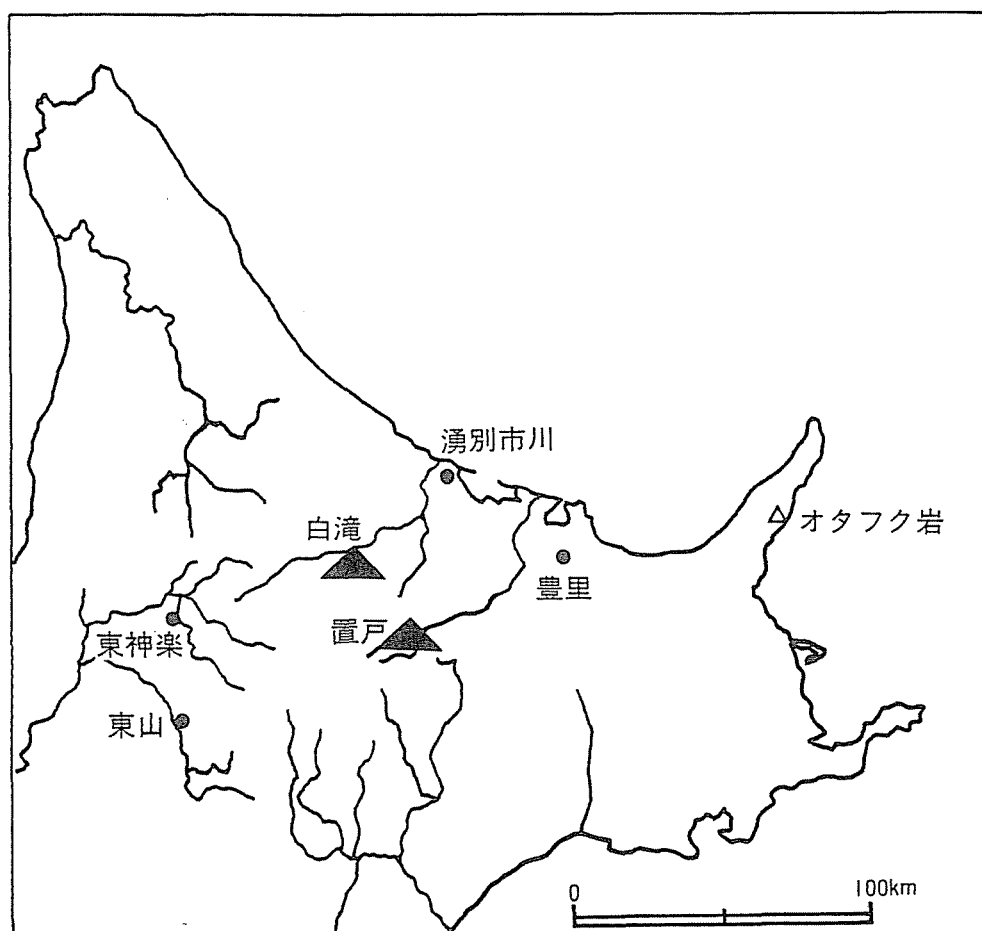


図 2-2 とりあげた遺跡の分布 (▲は黒曜石原産地)

オタフク岩遺跡第Ⅱ地点出土の剥片石器に用いられている石材の大部分は黒曜石であり、ほかには頁岩やメノウがわずかに認められるのみである。黒曜石は夾雑物が混じらない良質のものが用いられており、なかには赤い縞がはいる特徴的な母岩もみられる。石刃核や石刃にみられる自然面はいずれも平坦であり、円磨がすすんだ転礫面ではない。したがって、石刃核に用いられている原石は、河川中下流域ではなく岩脈の露頭ないしその近辺で採取された角礫と考えられる。15cm をこすサイズの石刃核や石刃がみられることから、人頭大のサイズ of 原石が選択されていたと推定されよう。

オタフク岩遺跡第Ⅱ地点にどのような状態で石材がもちこまれていたのかを把握するため、完形剥片の背面における自然面がどれほどの比率であるのか、という「外皮率」をもとめてみる。2,353 点の完形剥片のうち、背面に自然面がみられないものが 2,038 点 (86.61 %)、背面における自然面の比率が 1 ~ 20 % が 125 点 (5.31 %)、21 ~ 40 % が 67 点 (2.85 %)、41 ~ 60 % が 41 点 (1.71 %)、61 ~ 80 % が 56 点 (2.38 %)、81 ~ 100 % が 26 点 (1.1 %) である。

当然ながら、外皮率は石器製作技術や遺跡への廃棄の性質に応じて変化するものであり、絶対的な基準の設定にもとづいて評価をおこなうことはできない。しかしながら、背面に自然面がまったくない資料が約 86 % で絶対数が 2000 点をこすこと、自然面がみられないものと外皮率 20 % 以下のものを合わせると 90 % をこすこと、外皮率 80 % をこす資料が 1 % 前後で絶対数が 26 点であること、以上のような分類結果をみるかぎりでは、遺跡に原石そのものがもちこまれて剥離が開始されたとは考えがたい。むしろ、ある程度剥離が施された石核の状態が遺跡内にもちこまれたとみる方が妥当であろう。

以上のような外皮率の検討によって、遺跡内には原石そのものではなく、ある程度剥離がくわえられた状態のものがもちこまれていたことが判明した。次に、それが具体的にどのような状態であったのかを考えてみるため、石刃剥離工程の検討をおこない、石刃核の原形について考えていきたい。

(2) 石刃剥離工程の検討

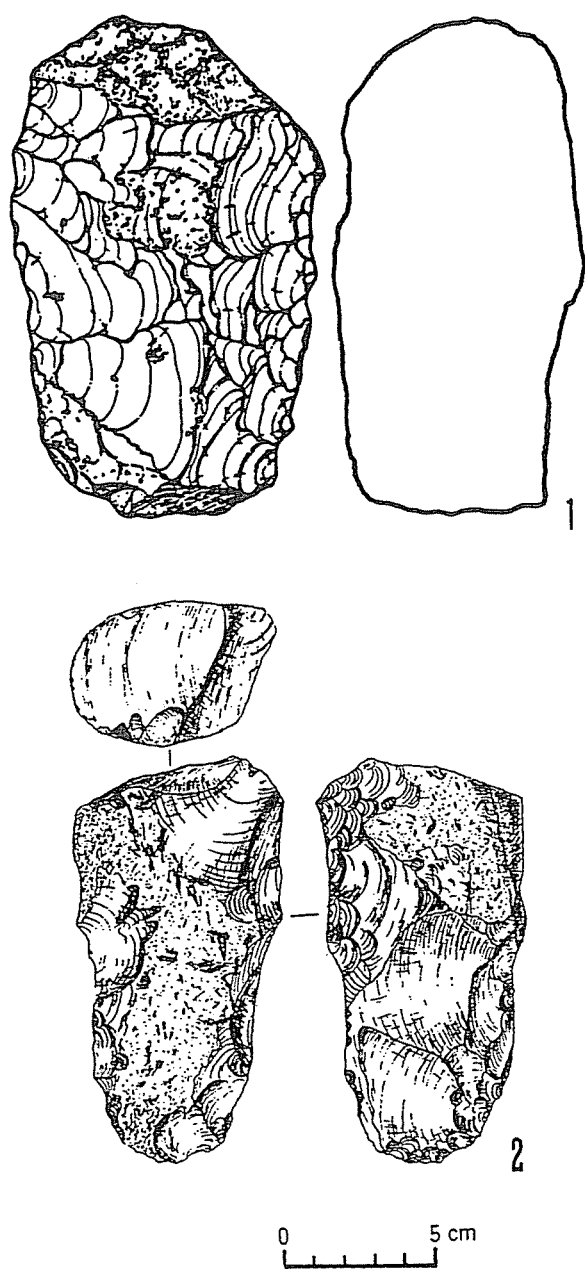
a. 石刃核とその原形

石刃核の原形 石刃核から目的剥片—石刃—が剥離される以前の段階の資料を石刃核の原形と呼ぶ。

北海道の石刃礫石器群研究において、石刃核の原形に関する発言はきわめて少ない。わずかに東神楽 14 号遺跡 (岩谷・斉藤 1959) や東山遺跡 (斉藤他 1966) で発見された二例の両面調整石器が、石刃核の原形に相当するのではないかと指摘されたことがあるのみである (斉藤他

同前:31-32、木村 1976:7)。両例ともに表採資料であるが、両遺跡ともに石刃礫石器群がかなり単純にまとまって発見されていること、また以下に述べるように、石刃礫石器群の石刃核の原形である条件を十分に備えているものと判断されるため、ここでは検討対象にとりあげた。

両例は、両面に横位からの調整が施され、横断面形が厚手のレンズ状を呈する楕円状のものである。二例ともに全長は 13cm をこし、厚さは 7 cm 以上ある。作業面に相当する部分には調整がすでに施されているが、打面相当の部分には調整がまだ施されていない。東神楽の資料 (図 2-3 の 1) では両面に調整がおよび自然面は部分的にしかみられないのに対して、東山の



1：東神楽（木村1976）、2：東山

図 2-3 石刃核の原形

事例（同上 2）では両面ともに自然面がみられ、とくに左側面は半分以上が自然面によっておおわれている。

こうした石刃核の原形ではないかと指摘される両面調整石器から石刃の剥離を開始しようとすると、稜形成調整痕付石刃、いわゆる稜付石刃が最初に剥離されることになる。後述するように石刃礫石器群には多量の稜付石刃が伴出しており、稜付石刃の存在は、指摘されている両面調整石器が石刃核の原形に相当することを強く示唆しているように考えられている。

しかし、以上のような両面調整石器は、東神楽 14 号遺跡と東山遺跡の両遺跡以外では検出されておらず、石刃核の原形としてどこまで一般化できるのか不明である。しかし、こうした両面調整石器のほかに石刃核の原形と考えられるような資料は、オタフク岩遺跡第Ⅱ地点をふくめてこれまで確認されてはおらず、そのため現状では石刃核の原形の実態に関して十分な検討と言及をおこなうことができない。石刃核の原形の実態について理解を深めようとするならば、原形そのものを直接摘出するのではなく、石刃核や石刃といった他の資料を吟味することによって、再度考察をおこなう必要がある。

石刃核 石刃礫石器群の石刃核は、図 2-4 に示したように、打面にはこまかい調整が施され、石刃剥離が相当に進行した結果、石刃の剥離面が作業面の全周をめぐるような円錐形を呈するものが多い。ただし、上方から打面部をみると円というよりむしろ楕円形に近く、作業面はやや角ばった部分を境にして面を構成している。打面と作業面は相互に明確に分離しているため、打面以外の部分はすべて石刃剥離作業面となるものが多いことになる。そのため、原形時の面や石核調整がおこなわれた痕跡がそのままのこされているものは極端に少ない。以下では、打面や打面下の作業面に相当する部分に、打面調整や石刃剥離作業面以外のものが観察される事例について検討してみよう。

石核調整に関連すると思われる痕跡がそのままのこされている事例を最初にあげてみる。作業面に相当する部分に連続的な横位調整が施され、直線的な稜線が作られているもの（図 2-4 の 1）がある。これは、石刃剥離が進行する過程での稜の再形成に関係するものと考えられる。また、石刃剥離作業面のすべての陰打瘤が加撃によって切られている事例もあり（同上 2）、これは打面の再生に関係する資料とみられる。これらの資料から、石刃礫石器群の石刃剥離技術においては、石核調整として打面再生や稜の再形成が介在していたことがわかる。これらの石核調整技術の詳細については後述しよう。

原形段階での剥離面、すなわち原石の分割面などが石刃核の一部にのこされているものは皆無である。一方で、石刃核の一部に自然面が観察できる資料は、オタフク岩遺跡第Ⅱ地点や湧別市川遺跡、豊里遺跡でわずかながら検出されている。自然面がみられる事例には、以下のようないくつかのあり方が認められる。

- a：石刃核の表裏の二面に自然面があり小口部分で石刃が剥離されているもの（同上 3）。
- b：石刃剥離作業面以外の一面に自然面がのこっているもの（同上 4）。
- c：底面に自然面がのこっているもの（同上 5）。

石刃核の一部には、自然面に石刃剥離がおよびつつもその途中で廃棄されているもの（同上 6）があるため、a や b のような事例は、石刃剥離が進行する途中で何らかの要因により廃棄されたものと理解してよい。

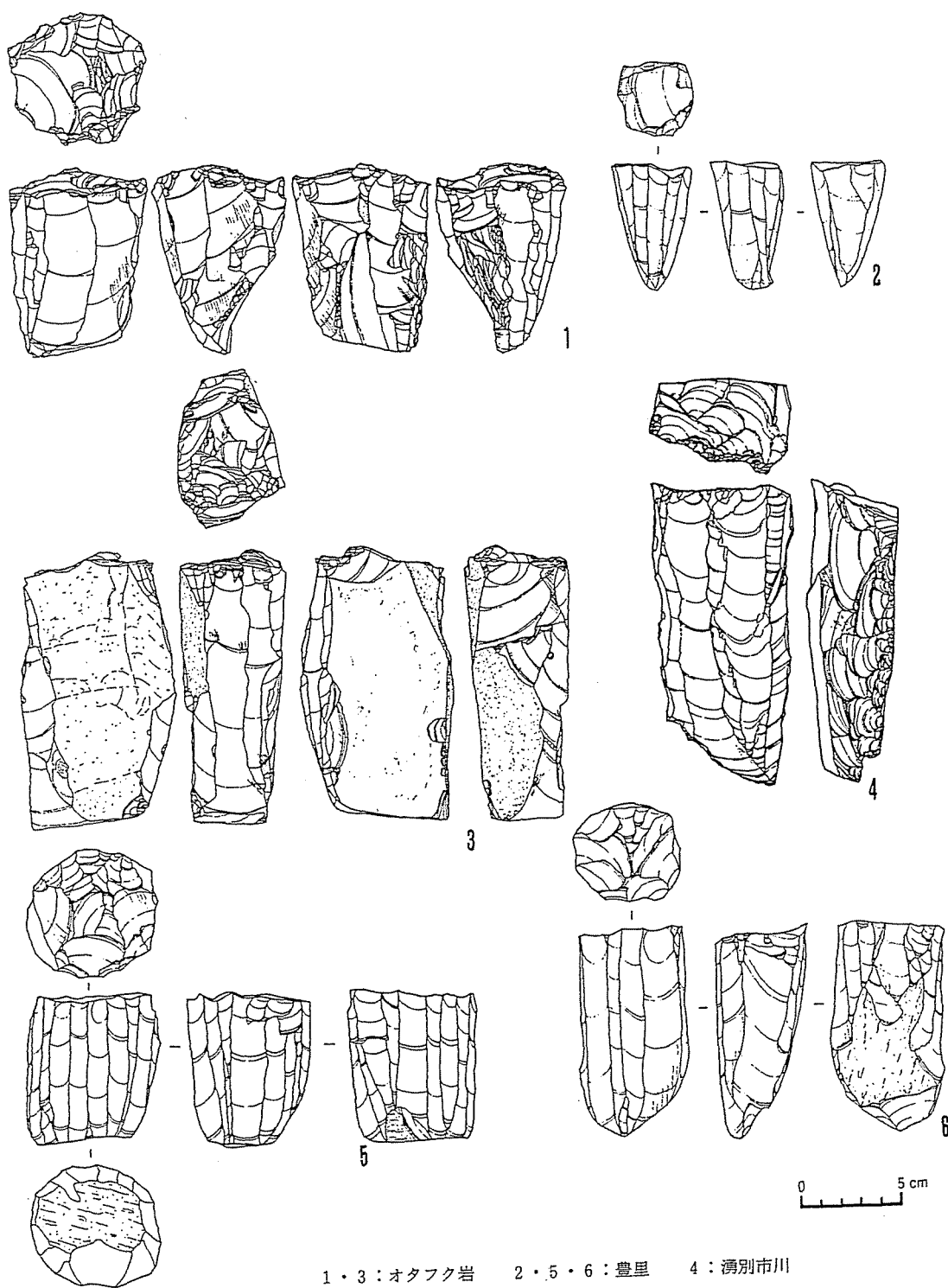


図 2-4 石刃核

いずれにしても、石刃核に観察されるこうした自然面のあり方は、さきに示したような両面に調整がおよぶものだけが石刃核の原形ではないことを示唆している。a としての資料の場合は、後述するように縦走する稜形成が石刃剥離の開始にあたり必要な手順であったと考えるならば、稜形成のための横位調整が稜周辺に限定され内部深くまではおよんでいないものも、石刃核の原形にはふくまれていた可能性が生じるであろう。

b. 石核調整技術

石核調整技術として、ここでは稜形成・再形成、打面調整・再生の検討をおこなう。

稜形成・再形成 稜付石刃（稜形成調整痕付石刃）とは、連続的に横位の調整を施すことによって、石刃核の作業面に予定されている部分に石刃剥離に適するような縦走する稜線を作出するために剥離されるものであり、剥離される石刃の規格性を決定づけるひとつの重要な条件と考えられている（Bordes and Crabtree 1969:4）。石刃鑛石器群における稜付石刃も同様の意味をもっていたものと想定されており、石刃核の原形が製作されたのち最初に剥離される石刃と位置づけられている（斉藤他 1966:32）。石刃核から最初に剥離されたものであるならば、稜付石刃の資料の実際を観察することは、石刃核の原形の理解にもつながりうるものと予測される。ここでは、オタフク岩遺跡第Ⅱ地点から出土した稜付石刃の吟味からはじめることにしよう。

オタフク岩遺跡第Ⅱ地点では計 71 点の稜付石刃が出土している。図 2-5 を概観するとあきらかなように、稜付石刃の横位調整に関しては変異に富む状態が観察できる。稜形成を中心とした石核調整技術についてややくわしく記述している東山遺跡の報告書においても、稜付石刃に関しては、背面が「調整痕」だけのものと「石刃の剥離痕と調整痕」がみられるものという二種類を区別しているにすぎない（斉藤他 同前:32）。これでは変異に富む資料の状態を十分に説明することはできない。

最初に、一次稜付石刃 (Primary Ridge Blade) と二次稜付石刃 (Secondary Ridge Blade) とに稜付石刃を大きく区分する (Owen 1988:11)。一次稜付石刃は、背面にみられる横位の調整痕に陰打瘤がのこされているもの（同上 1～8）であり、横位調整につづいて剥離された石刃と考えられる。二次稜付石刃は、横位調整痕の陰打瘤が石刃剥離面などによって切られているもの（同上 9～11）であり、一次稜付石刃につづいて剥離された石刃と考えられる。したがって、二次稜付石刃は石刃核の原形の状態を直接伝えるものではないが、逆に一次稜付石刃の吟味からは、原形の状態をうかがうことが可能と思われる。ここでは、おもに一次稜付石刃にしぼって吟味をくわえてみよう。

以下では、まず稜付石刃の全体を分類する。Ⅰ類を一次稜付石刃とし、Ⅱ類を二次稜付石刃とし、さらに以下のように細分する。

Ⅰ A 類：一次稜付石刃で、稜形成のための横位調整が頭部から末端部まで全体的におよぶものであり、左右両側縁の双方向へむけて横位調整がなされているもの。背面の一部に自然面が認められるものをⅠ A 1 類（同上 1・2）、認められないものをⅠ A 2 類（同上 3）とする。

Ⅰ B 類：一次稜付石刃で、稜形成のための横位調整が頭部から末端部まで全体的におよぶものであり、左右のどちらか片側縁の単方向へむけて横位調整がなされているもの。横位調整がみられない片側縁が自然面であるものをⅠ B 1 類（同上 4）、石刃剥離面であるものをⅠ B 2 類（同上 5）、剥離方向に規則性が認められない剥離痕であるものをⅠ B 3 類とする。

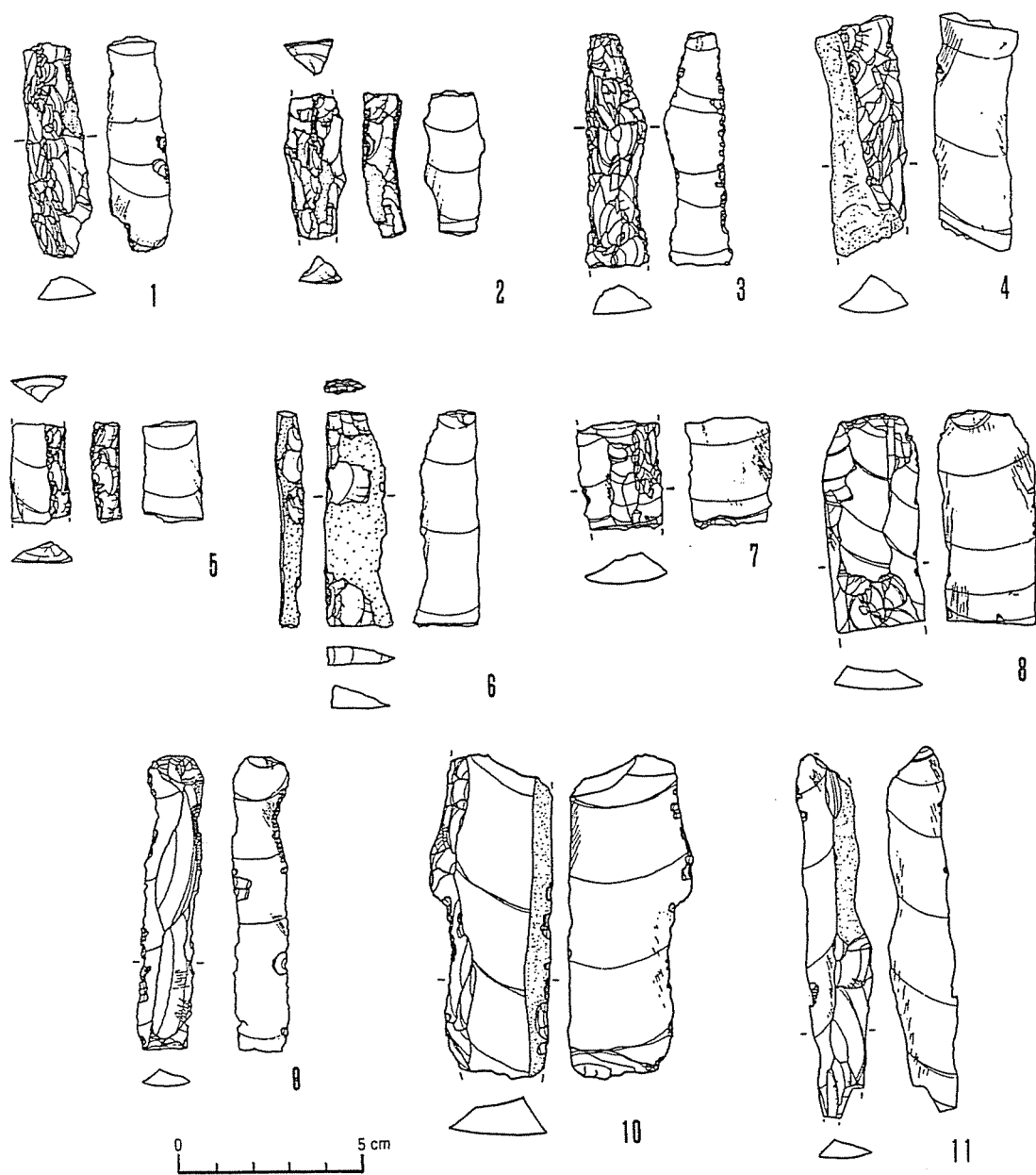


図 2-5 オタフク岩遺跡第Ⅱ地点の稜付石刃

I C 類：一次稜付石刃で、稜形成のための横位調整が背面の一部に部分的にとどまるものであり、左右両側縁の双方向へむけて横位調整がなされているもの。横位調整以外の部分は自然面であるものを I C 1 類（同上 6）、石刃剥離面であるものを I C 2 類（同上 7）、剥離方向に規則性が認められない剥離面であるものを I C 3 類とする。

I D 類：一次稜付石刃で、稜形成のための横位調整が背面の一部に部分的にとどまるものであり、左右のどちらか片側縁の単方向へむけて横位調整がなされているもの（同上 8）。いずれも横位調整以外の部分は石刃剥離面である。

II A 類：二次稜付石刃で、稜形成のための横位調整が頭部から尾部まで全体的におよぶもの（同上 9・10）。いずれも横位調整は石刃剥離面によって切られている。

II B 類：二次稜付石刃で、稜形成のための横位調整が背面の一部に部分的にとどまるもの（同上 11）。いずれも横位調整は石刃剥離面によって切られている。

以上は、稜形成のための調整の状態を基準に稜付石刃を分類したものである。分類の基準のひとつとして、横位調整が頭部から末端部まで全体的に施されているか、背面の一部にとどまる部分的なものかをあげたが、この基準は当然ながら完形品にしか適用できない。しかし、資料の大半が欠損品であるため、厳密な適用は分類そのものを成り立たせなくなってしまう。上記の分類はあくまで傾向の把握のレベルにとどまるものであり、量的な解釈はその制約を十分に考慮にいたしたものでなければならない。各類ごとの点数は表 2-1 に示した。

一次稜付石刃は、石刃核における最初の稜形成を意図して剥離されたものと、石刃剥離が進行する過程で稜の再形成を意図して剥離されたものとに区分することができる。さきに示した分類のうち、I A 1 類、I C 1 類は、自然面がみられることからみて最初の稜形成にともなって剥離されたものとみて間違いない。これらの稜付石刃によって、石刃核の原形には、両面に連続的な横位調整がなされているもの（I A 1 類）、原石の稜線に散発的な横位調整が施されているもの（I C 1 類）とが存在していたことがわかる。I C 1 類は、さきに示した東山から発見された両面調整石器のような、まだ大きな自然面がのこされている石刃核原形から最初に剥離された稜付石刃と想定されるため、I A 1 類と同様の過程をふんでいるものと考えてよい。I B 2 類、I B 3 類、I C 2 類、I C 3 類、I D 類は、先行する剥離面がみられることから、稜の再形成にともなって剥離された可能性が高い。I A 2 類と I B 1 類は、ともに最初の稜形成に関連するものである可能性は高いが、稜の再形成にかかわるものである余地もあり、判断は保留し接合資料による検証に期待したい。

打面調整・再生 オタフク岩遺跡第 II 地点から検出された石刃核では、石刃剥離作業面の陰打瘤が打面再生によると思われる剥離の結果によってすべて切られているものを除くと、大半のものには打面に調整が施されている。また、オタフク岩遺跡第 II 地点出土の石刃の打面を観察してみても、打面が観察できた石刃 212 点のうち、複数の剥離面からなる打面が 205 点（96.7 %）、一枚の剥離面からなる打面が 6 点（2.83 %）、自然面のものが 1 点（0.47 %）であり、複剥離打面が 96 % をこえることからみても、ほぼ例外なく石刃剥離にあたっては打面調整がなされていたものと考えられる。

オタフク岩遺跡第 II 地点では打面再生剥片が 4 点出土している。したがって、オタフク岩遺跡第 II 地点の石刃剥離技術では、打面を再生する作業が工程に組み込まれていたことはまちが

表 2-1 稜付石刃の分類

	I A 1類	I A 2類	I B 1類	I B 2類	I B 3類	I C 1類	I C 2類	I C 3類	I D類	II A類	II B類
数	14	1	5	11	10	2	1	2	2	21	2
%	19.72	1.41	7.04	15.49	14.08	2.82	1.41	2.82	2.82	29.58	2.82

表 2-2 石刃の背面構成

	I a	I b	I c	I d	I e	I f	I g	II a	II b	II c	II d	II e	II f	II g
数	1	107	21	0	19	2	0	521	74	14	6	13	0	0
%	0.13	13.75	2.69	0	2.44	0.25	0	66.96	9.51	1.79	0.77	1.67	0	0

表 2-3 打点直径 (単位 mm)

	0	< 1	< 2	< 3	< 4	< 5	< 6
数	238	0	1	2	4	2	1
%	95.9	0	0.4	0.8	1.6	0.8	0.4

いない。打面再生剥片の厚さは、湧別市川出土の事例（図 2-6 の 1）に端的にあらわれているように、打面部では薄く、尾部では厚い傾向が認められる。そのため、石刃核での再生剥片の加撃部付近では打面と作業面のなす角度が鋭角になり、末端部ではその角度が鈍角になる。こうした傾向から、打面再生剥片は打面と作業面となす角度を補正するために剥離されたものと推定される。

以上に検討してきた調整技術のほかに、石刃核の底部が石刃の末端部に付着して剥離されるウートラパッセに着目し、それが底部調整の役割をはたしていたのではないかという見解もある（木村 1973:28）。ウートラパッセは、石刃核の底部が尖っている場合に生じやすいものであるが、石核の縁部から押圧具を離しすぎた（より石核内部に打点を固定した）場合に生ずるのではないかという指摘もある（Crabtree 1968:466）。あるいは、打面と作業面のなす角度を補正する意図的な作業の結果剥離されたものとの考えもある（柳田・藤原 1981:33）。石刃鏃石器群の石刃剥離技術では、ウートラパッセが剥離されることによって、結果的に打面再生と同様に石刃核の高さが減少することはあきらかである。ただし、ウートラパッセがいかなる要因によって剥離されたのかは、類例の増加を待つてさらに検討し直す必要がある。

c. 石刃剥離の進行状況

ここでは打面転移の状況について検討してみよう。

オタフク岩で検出された 24 点の石刃核のうち、3 点は上下両方向から石刃が剥離されている両設打面であり、のこり 21 点が同一方向から石刃が剥離されている単設打面であった。90 度の打面転移は石刃核では認められない。一ヶ所に打面を設定してそこから連続的に石刃を剥離するのが、基本的な剥離の進行状況とみられる。こうした剥離の進行状況は、打面と作業面が相互に分離しているという面構成と円錐形という形状とに無関係ではなからう。

この観察の裏づけを得るため、想定しえる石刃の背面構成について以下に分類をおこなった。分類では、背面に自然面のみられるものをⅠ類、自然面のみられないものをⅡ類と大別し、そのなかをさらに細別している。観察は背面構成が十分に検討ができると判断した全長 4 cm 以上の石刃 778 点を対象におこなった。厳密には完形品にしぼって観察をおこなうべきであるが、ほとんどの石刃が折れた状態で検出されているため、全体的な傾向を把握する目的で以下のよう

に分類をおこなった。

Ⅰ a 類：背面すべてが自然面であるもの。

Ⅰ b 類：背面の一部に自然面があり、腹面と同一の加撃方向を示す剥離痕があるもの。

Ⅰ c 類：背面の一部に自然面があり、腹面に対して横位方向を示す剥離痕があるもの。

Ⅰ d 類：背面の一部に自然面があり、腹面の加撃方向とは逆方向を示す剥離痕があるもの。

Ⅰ e 類：背面の一部に自然面があり、腹面と同一および横位方向を示す剥離痕があるもの。

Ⅰ f 類：背面の一部に自然面があり、腹面と同一および逆方向を示す剥離痕があるもの。

Ⅰ g 類：背面の一部に自然面があり、腹面と同一および横位・逆方向の剥離痕があるもの。

Ⅱ a 類：すべての剥離痕が腹面と同一方向の加撃方向であるもの。

Ⅱ b 類：腹面と同一および横位の加撃方向を示す剥離痕をもつもの。

Ⅱ c 類：腹面と同一および逆方向の加撃方向を示す剥離痕をもつもの。

Ⅱ d 類：腹面と同一および横位・逆方向の加撃方向を示す剥離痕をもつもの。

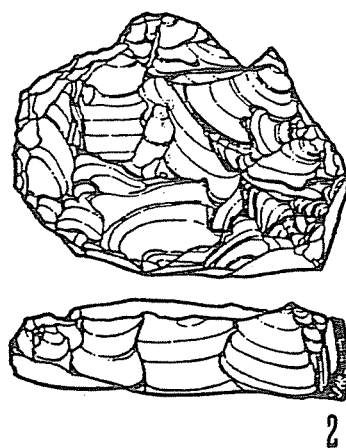
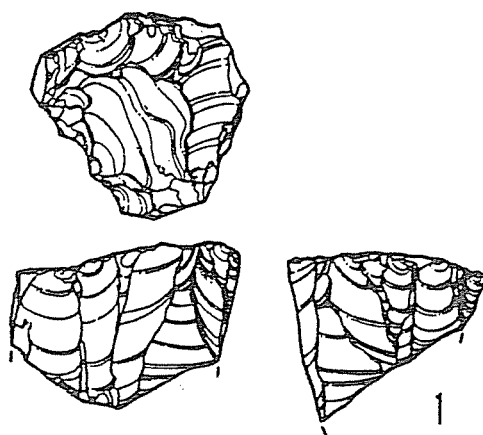


図 2-6 湧別市川遺跡の打面再生剥片

Ⅱ e 類：すべての剥離痕が腹面の加撃方向に対して横位方向を示すもの。

Ⅱ f 類：すべての剥離痕が腹面の加撃方向に対して逆方向を示すもの。

Ⅱ g 類：腹面の加撃方向に対して横位・逆方向を示す剥離痕をもつもの。

各類の点数と比率（表 2-2）をみてあきらかなように、Ⅱ a 類、ついでⅠ b 類が圧倒的に多いことがわかる。腹面と同一方向からの加撃痕だけを背面にとどめている両類だけで全体の約 8 割に達している。Ⅰ c・Ⅰ e・Ⅱ b・Ⅱ e 類は稜付石刃にふくめられものがほとんどであり、打面転移の状況を示しているものではない。したがって、背面構成をみるかぎり、ほとんどの石刃は打面転移がおこなわれないうまま、同一方向からの加撃によって剥離されていたと考えられる。完形の石刃を対象に分析をおこなったのではないが、打面転移の痕跡を背面にとどめている石刃がほとんど皆無に近いということは、実際の全体的な傾向も同様であったと考えられよう。

（3）石刃剥離方法の検討

ここでは打面のサイズ、打瘤の状態、打点の直径についてのデータを吟味することによって、石刃剥離方法（打撃・加圧法）を検討してみたい。

打面のサイズ オタフク岩遺跡第Ⅱ地点から検出された計測可能であった 250 点の石刃の打面のサイズを計測した結果、打面幅は最小 3.5mm、最大 22.82mm、平均値 10.42mm であり、打面厚は最小 0.59mm、最大 8.37mm、平均値 3.58mm であった。それぞれのヒストグラムについては図 2-7 に示した。打面厚のサイズは 3 mm 前後に集中する正規分布を示しており、資料間でのばらつきが小さい。

打瘤の状態 打瘤の状態に関しては、コットレルとカミングによる剥離の発生形式に関する見解（Cotterell and Kamminga 1987:685-691、1990:130-135）を参考にして分類した（図 2-8）。

Ⅰ 類：打瘤が明瞭にみられるもの（Salient）。

Ⅱ 類：打瘤が顕著にはみられず、打瘤上部の打面と腹面とが接する部分が腹面側へ内傾しているもの（Diffuse）。

Ⅲ 類：内傾・打瘤ともに明瞭にみられず平坦なもの（Flat）。

以上のような分類⁵¹⁾の結果を示すと、オタフク岩遺跡第Ⅱ地点出土の石刃では、Ⅰ 類が 174 点（82.64 %）、Ⅱ 類が 25 点（11.85 %）、Ⅲ 類が 12 点（5.69 %）であった。明瞭な打瘤をもつⅠ 類が多いという傾向を示す。

打点の直径 東北地方の後期旧石器時代石器群の比較研究をすすめている会田容弘は、剥離方法を直接に反映する属性として打点の直径を重視している（会田 1992:245）。しかし、これまで厳密な条件設定下で実験的に打点の直径と間接打撃・押圧剥離をふくめた剥離方法との対応関係をあきらかにするデータが示されているわけではなく、経験的な判断に依存している部分が多い。したがって、現状ではあくまでもデータの把握にとどめ、その判断は将来に委ねることにしたい。オタフク岩遺跡第Ⅱ地点出土の石刃には明確な打点がほとんど観察されず、表 2-3 に示したように打点の直径 0 mm と判定された資料が 90 %をこしている。

先述したように、打面のサイズ、とりわけ打面厚のサイズは 3 mm 前後と比較的小さく、資料相互のばらつきも小さい。打面のサイズは、石器を構成する属性のうちでも人為的に制御可

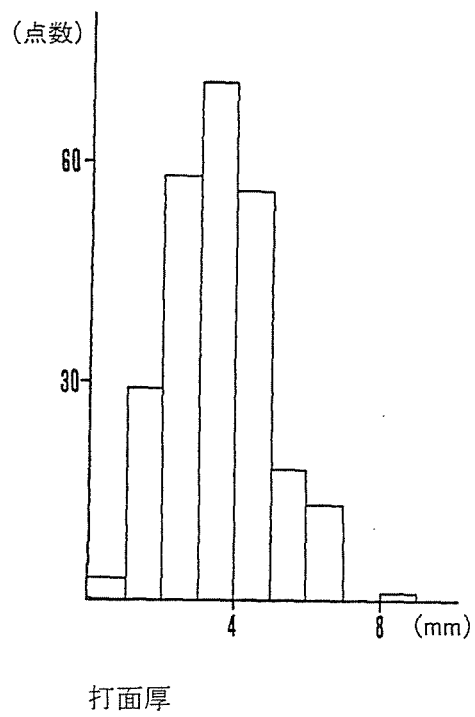
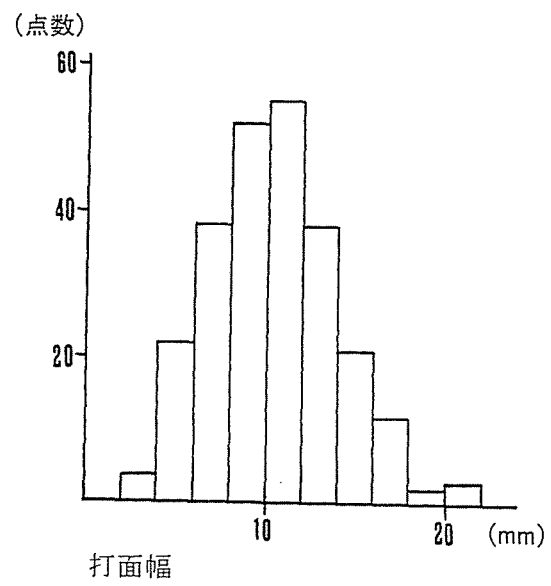
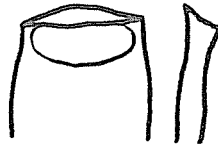


図 2-7 打面のサイズ



(Salient)

I 類



(Diffuse)

II 類



(Flat)

III 類

図 2-8 打瘤の状態

能なものと考えられる。オタフク岩遺跡第Ⅱ地点から出土した石刃の打面厚のサイズのあり方は、打面のサイズを制御しやすいような方法によって石刃が剥離されていたことを示している。複剥離打面が圧倒的に多いという、打面の種類に関してさきに示したデータは、そうした剥離方法の性質と深く関係しているものと想定される。

（４）石刃と石刃素材の石器

ここでは、以上に検討してきた剥離工程・方法をへて剥離された石刃と、その石刃を素材にした石器について概観してみよう。

石刃鏃石器群の石刃は、一般的に両側縁が並行し背面の稜線は直線的であり、大きな反りがみられず、また厚さは打面部から末端部にいたるまでほぼ均等であるものが多い。つぎにサイズについてみておこう。石刃はほとんどが折れた状態で検出されているため、長さについては有意なデータが得られないが、幅・厚さについては計測可能である。図 2-9 は、検討可能であった 727 点の石刃を対象に幅・厚さを計測したものである。幅をみると、10mm から 24mm 前後までのあいだに値が集中している。分散は相対的にやや大きく、18mm 前後にややくぼみがあるが二峰を示しているとはいえない。厚さは 3 mm から 7 mm 前後までのあいだに値が集中している。幅と同様に分散が二峰を示すことはない。

石刃鏃石器群で検出される剥片石器のうち、石刃鏃・彫器・削器・搔器・石匙や一部の石鏃・揉錐器らは石刃を素材としている。尖頭器・石筥や一部の石鏃・揉錐器は、石刃以外の不定形剥片を素材としている。石刃素材の石器には、その器種に応じて異なるサイズの石刃が素材にされる傾向が指摘されている（木村 1976:15、藤本 1992:149-153）。具体的には、幅狭の石刃は石刃鏃の素材にされ、幅広の石刃は彫器・搔器・削器の素材になっている。

オタフク岩遺跡第Ⅱ地点出土の資料でも同様の傾向が認められる。ちなみに石刃鏃と彫器のそれぞれの幅の平均値をみると、石刃鏃は 1.37mm (n=123)、彫器は 1.9mm (n=86) であり、あきらかに差が認められた。なお、槌状剥離が一方の側縁から他側縁へぬけてしまっている彫器は計測しなかったため、両者の幅の計測値はほぼ素材となった石刃の幅のサイズを反映しているものと考えて差し支えない。その計測値を t -検定によって検討してみると、有意差 5% (t 値 = - 8.3001) で両者の幅には有意差があることが検定された。

以上のように、石刃鏃石器群の石器には石刃素材のものと非石刃素材のものが認められ、さらに石刃素材のものでも石器の器種に応じて異なるサイズの石刃が素材に選択されていることがわかった⁶⁾。

4. 考察

（１）オタフク岩遺跡第Ⅱ地点における石刃剥離技術の特徴

ここまで石刃剥離技術を構成する技術的諸属性の分析をおこなってきたが、以下では、その分析をもとにしてオタフク岩遺跡第Ⅱ地点における石刃剥離技術の輪郭について概括してみよう。

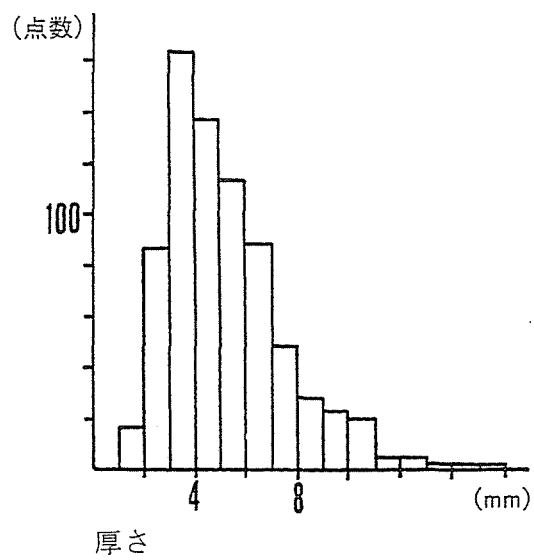
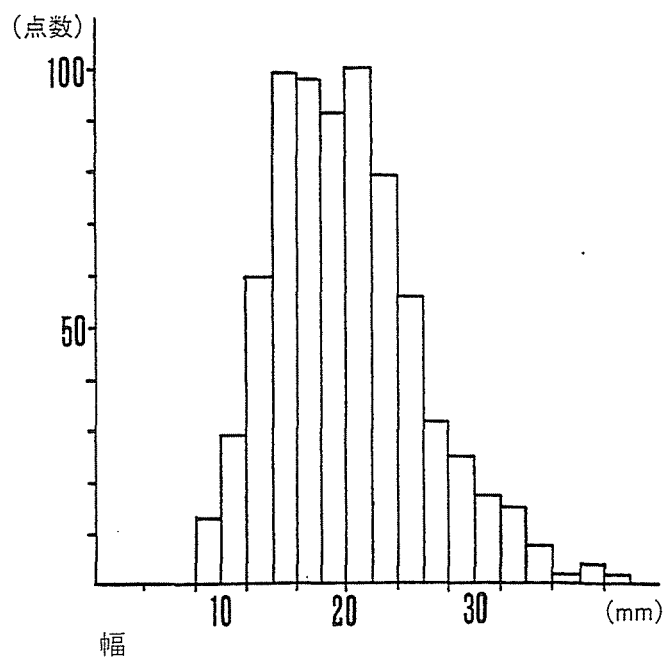


図 2-9 石刃のサイズ

石刃核の原材としては、人頭大サイズの角礫の黒曜石がおもに選択されている。オタフク岩では石刃核の原形が直接検出されてはいないが、双方向に横位調整がなされている稜付石刃や東神楽 14 号遺跡・東山遺跡の事例を参考にとすると、厚手の両面調整石器が石刃核の原形になっていたのではないかと想定される。ただし、原形にされた両面調整石器のなかには、散発的な横位調整が稜近辺のみに限定して施されている場合もあるようである。こうした石刃核を作出していくにあたっての手法の差異は、原石の段階でのサイズや形状の差に応じたものと推察されるが、この予測を具体的に検証するためには接合資料による分析が必要であり、ここでは可能性の指摘にとどめ、検証作業は後日に期することにしたい。

以上の石刃核の原形に関する検討をみてあきらかなように、横位の連続的な調整によって作出される作業面の稜線は、石刃剥離の開始のうできわめて重要な要素であったことがわかる。東神楽 14 号遺跡の石刃核の原形に相当するとされている両面調整石器（図 2-3 の 1）は、打面調整がなされずに側縁部分の稜形成が終了した段階で廃棄されており、石刃核作出の手順としても、稜形成のための横位調整は打面調整より先行していた可能性が高い。石刃核の原形は、第一に稜線をどのように作出するのかに焦点をあわせて製作されたものとみられる。

打面調整が施されたのち稜付石刃が剥離され、つづいて石刃が連続的に剥離されている。石刃の打面の種類はほとんどが複剥離面打面であり、石刃剥離に先行してかならず打面調整が施されていたとみられる。石刃核は単設打面のものが多く、また石刃の背面をみても腹面と同一方向の加撃痕をのこしているものが大半をしめているため、打面転移は基本的にはおこなわれず、打面は一端に固定されたままの状態ですり剥離は進行していったようである。

石刃剥離が進行する過程で打面や作業面の状況を補正する調整技術として、稜の再形成や打面調整・再生がおこなわれている。作業面の状況を補正するための調整技術として、稜の再形成を意図したとみられる連続的な横位調整が石刃核の作業面においてなされている。稜の再形成のための横位調整は、石刃剥離作業面などを打面として剥離がくわえられるが、これは蝶番状剥離（hinge-fracture）などによって悪化した作業面の状況を補正し、あらたに直線的な稜を作出しようとしたものと想定される。稜付石刃をみるかぎりでは、横位調整が作業面の頭部から末端部までなされているものと、作業面の一部になされているものとの二種類がみられる。このような差は、補正しようとした石刃剥離作業面の状態に応じたものと推定される。また、打面再生剥片が検出されていることからみて、打面再生技術を保持していたことは間違いない。先述したように、打面再生剥片は、こまかな打面調整では実現できない打面と作業面との角度の補正を目的として剥離されたものと考えられる。

打面厚のサイズが 3 mm 前後に集中しづらつきが小さいことからみて、打面のサイズを制御できるような方法により石刃は剥離されていたとみられる。明確な打点ほとんどみられないこと、直線的な稜線が観察されること、顕著な打瘤をもつものが大半をしめること、などの諸属性の傾向は剥離方法の性質を示唆している可能性がある。しかし、現時点では剥離方法の認定に関して、実験的研究の実施により各種技術的属性と剥離方法との対応関係を把握しなければならない段階にあり⁷⁾、特定の方法を断定することはできない。実験的な研究の推進によって、石刃礫石器群における石刃剥離方法についても再検証することが必要である。

以上にみてきた石刃剥離工程・方法により、両側縁がほぼ並行し、背面の稜線は直線的な定

形的石刃が連続的に剥離されることになる。その最大幅のサイズは、10mm から 24mm 前後までの範囲に集中がおさまっており、そのなかで幅狭の石刃は石刃鏃の、幅広の石刃は彫器・削器・搔器らの素材になっている。石刃は適度に分割されることにより石器の素材になっている。

オタフク岩遺跡第Ⅱ地点出土の石刃鏃石器群の石刃剥離工程においては、各種の石核調整と補正技術が駆使されることにより、定形的な石刃が連続的に剥離されていることがわかった。これら各種の石核調整と補正技術は、いずれの状況をも問わず行使されているようであり、それが「定式化しているかに見える製品の量産」（木村 1976:15）を保証する大きな要因となっていたと考えられる。石刃鏃石器群でみられた定形的石刃の量産は、このような各種の石核調整と補正技術が駆使された剥離工程と制御可能な剥離方法により実現されたものと推定されるが、技術の成り立ちを考えるうえでは原材の問題も考慮にいれておかねばなるまい。すなわち、良質で大形の角礫の黒曜石を原材として確保できたため、原材のサイズや性質の制約をある程度うけることなく石刃剥離がおこなえたこと、この点も見逃してはならないであろう。

（２）オタフク岩遺跡第Ⅱ地点における石器石材の利用状況

ここでは、オタフク岩遺跡第Ⅱ地点に石器原材がもちこまれた状況を検討してみることしたい。

本章では、「外皮率」として、出土した完形剥片の背面に自然面がどの程度のこっているのかをもとめてみた。その結果、オタフク岩遺跡第Ⅱ地点の遺跡内には、原石そのものではなく、ある程度剥離がくわえられた石核の状態で石器の原材がもちこまれていることが判明した。石刃核の原材に利用されている黒曜石の角礫は、自然科学的な分析データはないものの、肉眼によるかぎり白滝産もしくは置戸産と考えられる。石刃核もしくは石刃にのこされている自然面の状態を観察してみると、ほとんど転礫面が認められないことから、黒曜石原産地の露頭およびその近辺において採取された可能性が高いものと想定される。外皮率からみておそらく、採取地点近辺で原石に最初の剥離をくわえ、自然面を除去する作業がおこなわれていたと予測される。自然面を除去し原石の内部を観察可能にすることによって、夾雑物の状態や節理面の存在を予見することができるようになったはずであり^{*)}、そうした意味で、自然面を除去する作業はより良質の原材を選択するための行動と位置づけられよう。

白滝や置戸の露頭およびその近辺で採取されたと想定される原材は、直線にして 130km 前後の距離があるオタフク岩遺跡第Ⅱ地点にもちこまれている（図 2-2）。オタフク岩からは、本章の冒頭で触れたように石刃核・石刃・各種の石器に多量の剥片・碎片が検出されており、遺跡内において石刃核から石刃剥離、石器製作にいたるまでの作業がおこなわれていたのは確実である。はたして、オタフク岩遺跡第Ⅱ地点から検出された多量の黒曜石製石器は、どのような過程をへてこの遺跡にもたらされたのであろうか。遠隔地からの石器石材の入手過程がここで問題となるのである。

第一に、剥片石器のほとんどが黒曜石によってしめられていること、第二に、白滝や置戸などの黒曜石原産地から、オタフク岩・湧別市川・豊里などオホーツク海沿岸部の諸遺跡までのあいだに、集約的な石器製作作業がおこなわれている遺跡は見当たらないこと（詳しくは次章で検討する）、以上の二点からみて、オタフク岩遺跡第Ⅱ地点出土の黒曜石製の剥片石器が集

団間の交換等により間接的に獲得されたとは考えがたい。オタフク岩遺跡第Ⅱ地点に居住していた集団みずからによる直接的な採取を想定したほうがより妥当といえる。

以上に示した予察には、なお解決を要する問題点がいくつかある。オタフク岩遺跡第Ⅱ地点であきらかにされた石器石材の利用状況および石器製作作業の内容が、はたして他の遺跡においても確認することができるのであろうか。本章では予察を提示したにすぎないが、資料の詳細な吟味にたった具体的な検討作業が必要となろう。また、オタフク岩遺跡第Ⅱ地点とは異なる状況を示す遺跡がかりに存在していたとするならば、その具体的内容およびオタフク岩との行動論上の関係について問われなければならない。いずれにしても、これらの課題は、石刃鏃石器群をのこした〈集団〉の移動・居住形態の復元作業がおこなわれるなかで、あきらかにされることといえよう。

5. まとめ

ここまでオタフク岩出土資料を中心に、石刃鏃石器群における石刃剥離技術の特徴を分析してきた。その結果として、白滝や置戸といった黒曜石原産地の露頭近辺で採取される、大形で良質の黒曜石の角礫を原材とし、原石そのものではなく、ある程度剥離がくわえられた石核の状態でオタフク岩に原材がもちこまれていたことが想定された。また、石刃剥離工程には、打面調整・再生、稜形成・再生といった各種の石核調整と補正技術が介在しており、石刃核の原形には平面形が楕円状で、横断面形が厚手の両面調整石器が利用されていることがあきらかとなった。さらに、打面のサイズを制御することが可能な方法により、定形的な石刃が連続的に剥離されていることがわかった。最後に、石刃鏃・彫器・搔器・削器・石匙や一部の石鏃・揉錐器らの素材が石刃であることを確認し、石刃素材の石器でも種類に応じて異なるサイズの石刃が選択されていることを再確認した。

ここで指摘した特徴は、個別にとりあげれば石刃剥離技術がみられるどの石器群にも存在しえるものであるが、相互に組み合わせてみると、きわめて特色のあるものといえることができる。ここでえられた成果をもとにして、石刃鏃石器群が検出された遺跡間・地域間での石器製作技術の比較研究と、それぞれの遺跡における石器製作作業の内容を見直していかなければならない。本章であきらかにされた諸特徴は、その比較作業に際して一定の基準を提供するものと考えられる。

Ⅲ 石刃鏃石器群をのこした〈集団〉の移動・居住形態

1. 目的

(1) 本章での検討課題

これまでの北海道の石刃鏃石器群に関する研究では、系統論もしくはその時間的位置づけに多くの関心がはらわれてきた。すなわち、シベリア・極東地区に分布する石刃鏃石器群は、後期旧石器時代から新石器時代への移行期に出現し、新石器時代前半におもに隆盛をみたと考えられている（木村 1992:44）一方で、北海道の石刃鏃石器群は、現時点までに確認されている資料をみるかぎりでは、時間的に縄文時代の早期中～後葉相当に位置づけられることが確実視されている（沢 1968:16、佐藤 1983:47-49）。また、系統論的には大陸・サハリンからの集団移住の結果もたらされたものと推定されており、北海道東部における在地の縄文時代の系譜からは大きく逸脱していることが指摘されている（加藤 1963:17、吉崎 1986:303 など）。

こうした一方で、行動連鎖のパターンにかかわるような諸問題について、検討をおこなっている研究者はわずかである。現時点までのところ、断片的な推定（沢 1974:168、杉浦 1989:60-62）や問題提起（戸沢・鶴丸 1971:33）がみられるのみであり、資料相互の関係をふまえた全体像の復元にまでたちいったものはない。

そのなかで、遺跡間の関係に対して注目すべき見解が佐藤和利（1986:100）と藤本強（1981:323-324）により提示されている。佐藤（同前）は、沿岸部と内陸部という異なる地域に立地する遺跡が、それぞれ系統を異にする別集団によってのこされたものと解釈したのに対して、藤本（同前）は、それらを生業活動をふくめた遺跡での活動差によって解釈できるとし、同一集団によってのこされたものと想定した。藤本は、オホーツク海岸のトコロ貝塚と内陸部の常呂川流域に立地する川東羽田遺跡との関係についてのみ言及しているため、「沿岸部－内陸部」としてどこまでの地域をふくめて考えているかは不明である。しかしながら、すくなくともこの両氏は、遺跡間の関係に対して異なる対照的見解をもっていることはあきらかであろう。

二つの異なる見解のどちらが妥当といえるだろうか。本章の目的は、考古学的記録を多角的に吟味することによって、そこから行動連鎖のパターンを反映する傾向性を摘出し、的確な移動・居住形態の仮説モデルを提示することにある。この目的に達するためには、複数の地点を〈集団〉がどのように有機的に関連づけながら利用していたのか、という問題を資料から読みとらねばならない。〈集団〉がのこした遺跡間変異（inter-site variability）から読みとられる移

動・居住形態の仮説モデルについて、第 I 章での方法論的な議論をふまえつつ検討をすすめていくことにしたい。

（２）検討の視点

上記のアプローチに着手するため、北海道の石刃鏃石器群を対象にして遺跡間の連関をどのように把握するのか、その手続きの方法を考えてみることにしよう。とりわけ論題にとりあげねばならないのが、どのようにして検討対象を措定するのか、という問題である。

複数の諸遺跡を検討対象に、その相互関係から集団の行動を読みとろうとするものとして、〈遺跡群研究〉がある。旧石器時代・縄文時代研究の諸論文のなかに散見される〈遺跡群研究〉では、地理的景観¹⁾にしたがって切り取られた地域、たとえば一台地・一河川流域あるいは複数台地などが検討対象として先見的に措定され、その地域内にひろがる遺跡群が分析される²⁾。こうした〈遺跡群研究〉は、特定の景観内のどのような立地が選択的に利用され、それが時間的にどう変化したのか、もしくは遺跡数がどのように増減したのか（矢島 1977:106-107、小野 1979:100、安蒜 1985:207-208、柳沢 1985:88-90、泉 1985:50-52、勅使河原 1992:10-21、渡辺 1994:18-27 など）、という問題を把握するには有意な研究といえる。

しかし、集団の移動・居住形態の復元を目的にするならば、〈遺跡群研究〉は不十分なものといわざるをえない。かりに集団が移動する範囲が視覚的にとらえられる遺跡群の範囲内におさまるならば、〈遺跡群研究〉による分析結果も有意なものになる。しかし、集団がある地理的景観をこえた範囲を移動していたならば、視覚的にとらえられる遺跡群を研究するだけでは、的確な集団の行動の全体像を復元することは困難といえる。移動範囲を水系単位でとらえるか、水系単位をこえた広い単位でとらえるかで議論がわかれるように（安川 1994:240-241）、集団が移動する範囲を決定できるだけの十分な根拠がすでにあたえられているわけではないとすると、移動・居住形態の復元には別の視点からの検討が必要になろう。

こうした問題点を克服するためには、遺構や遺物に認められる何らかの属性に着目して、遺跡間での差異と共通性から遺跡間のつながりを把握する必要がある。そこで注目したいのが、全体的な石器製作工程の痕跡が一遺跡内では完結的に観察されないという現象である。すでに北海道の常呂川流域遺跡群の研究（加藤・桑原 1969:32、加藤他 1971:20）や埼玉県砂川遺跡の研究（安蒜・戸沢 1975:170-179）において確認されているこうした現象は、一遺跡にとどまらない複数の遺跡間での石器製作工程のつながりをあきらかにし、遺跡間の具体的な関連性を把握する可能性を提起したといえる。しかしながら、可能性の指摘・一般的な推測をこえて、時期的・地域的にさまざまに変化する移動・居住形態の具体的なすがたを復元しようとするならば、一遺跡の検討だけでは不十分であり、複数の遺跡を俎上にあげ、その相互間のつながりを把握しなければならぬ。

そこで本章では、各遺跡で検出された石器群が全体的な石器製作工程のなかのどのような位置をしめているのか、という問題の検討をおこなうことにする。かりに一遺跡内でおこなわれていた石器製作作業が、全体的な石器製作工程のなかのある一部分でしかないとすれば、欠落した製作工程は他遺跡にもとめざるをえない。その場合、同様の石器製作技術が観察される遺跡で、なおかつ欠落した工程の作業がおこなわれている遺跡があるとすれば、その相互にはな

んらかの具体的なつながりが存在していた、という仮説をたてることができよう。そうした仮説モデルは、石器製作工程以外の石器組成や遺跡立地・種別といった諸現象をもっとも合理的に説明できるものでなければならない。

以上のような観点から、本章では最初に遺跡間での石器製作技術の比較検討をおこなう。その際は、たんに同類の石器や剥離技術の存在を指摘するだけでなく、それらを構成する技術的諸属性のレベルにまで分解して比較をおこないたい。そして、同一の技術がみられる遺跡間の相互を、石器製作工程のつながりという視点から吟味することによって遺跡間変異を解明し、移動する〈集団〉の軌跡を読みとることにする。ただし、ここで採用する方法論では、同一の技術を保有していた〈技術集団〉のなかの、日常生活の基本的単位となっていた〈小集団〉の行動連鎖のパターンを近似値的に復元しているにすぎないことは、第Ⅰ章での検討からもあきらかである。

2. 検討資料

石器製作技術や石器・遺物組成を検討するという主旨から、図 3-1 に黒印で示した石刃鏃などが単発で採集されている遺跡を検討対象より除外する。単発に石刃鏃などが採集されている遺跡の性格については、次章で論議することにしよう。

1) 豊里遺跡：かつての網走湖西岸、現在は網走川流域西岸の低位河岸段丘の縁辺、標高 8 m 前後に立地する遺跡である。女満別町教育委員会の主催で 1956 年に第一次調査が、1991 年に第二次調査がおこなわれ、合計 400 m²が調査されている（大場・奥田 1960、米村 1992）。二次にわたる調査で、石刃鏃石器群の時期に属する計 8 基の竪穴住居址が検出されている。

2) 湧別市川遺跡：オホーツク海にそった低位段丘上、現海岸線から約 1 km、標高 5 m 前後に立地する遺跡である。第一次調査が 1956 年に北海道大学医学部解剖学教室により計 92 m²が、第二次調査が 1967 年に北海道大学北方文化研究施設により、第三次調査が 1972 年に湧別町教育委員会と札幌大学文化交流研究所により 750 m²の面積が発掘された（児玉・大場 1958、北海道大学 1967、木村 1973）。第二次調査の際に竪穴住居址 1 基が検出されている。本稿では正式報告が公表され実見可能であった第三次調査の資料にしばらく検討をくわえる。

3) オタフク岩遺跡第Ⅱ地点：知床半島の根室水道側、現海岸線から 100 m ほどの標高 43 m 前後の海岸段丘上に立地する遺跡である。1990 年に羅臼町教育委員会によって 800 m²が調査された（涌坂・豊原 1991）。竪穴住居址が 5 基検出されている。前章で石器製作技術の復元を試みた遺跡である。

4) トコロ貝塚：オホーツク海へそそぐ常呂川の河口から上流へ約 1.5km さかのぼる低位段丘上、標高 12 m の地点に立地する。1959 年に東京大学文学部考古学研究室によって調査された。石刃鏃石器群関連の資料は、A・B・E・F トレンチで検出されているが、ここでは層序的に他時期の資料から分離された状態で検出されている F トレンチの貝層下の資料を検討対象とする。F トレンチでは竪穴住居址 1 基が検出されている（駒井編 1963）。

5) 共栄 B 遺跡：太平洋の現海岸線から内陸へ 9 km ほど入った低位の海岸段丘上、標高 19

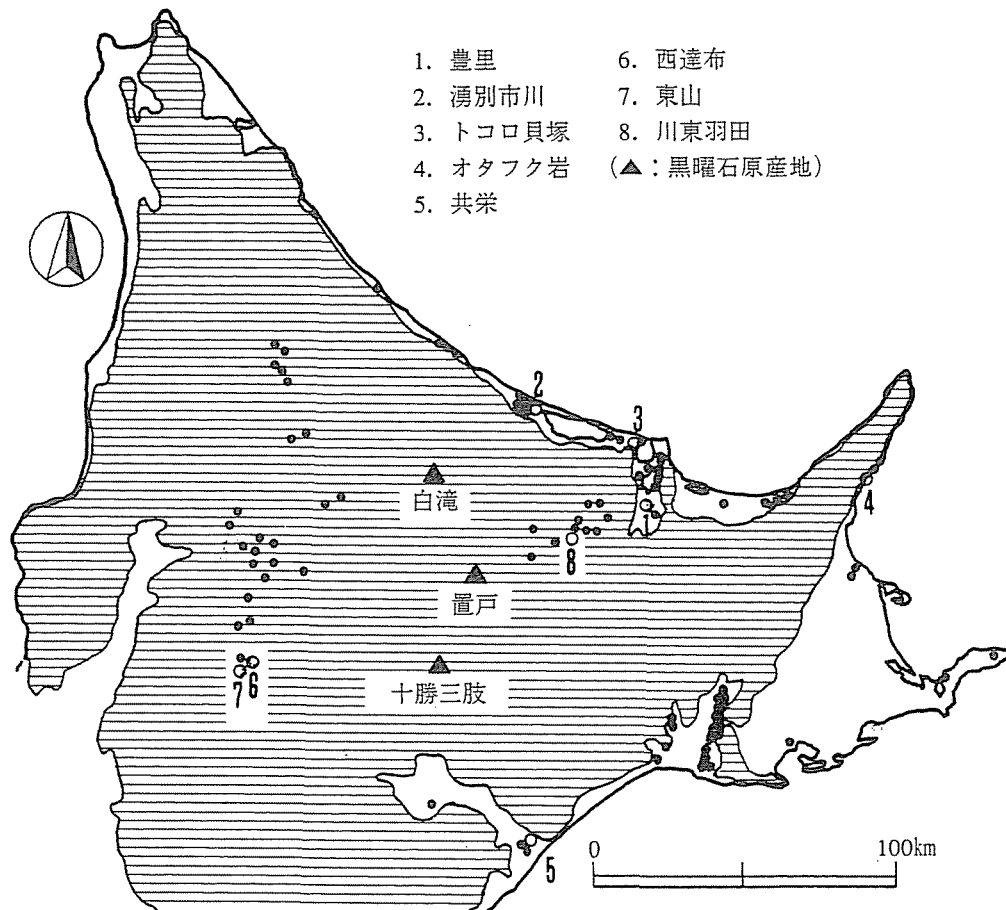


図 3-1 とりあげた遺跡の分布 (トーンは標高 100m 以上)

mの地点に立地する。1975年に浦幌町教育委員会によって282 m²の面積が調査された（後藤・大槻 1976）。竪穴住居址が2基検出されている。

6) 西達布2遺跡：富良野盆地内、西達布川の支流、川松沢川にむかって舌状にはりだす丘陵の緩斜面、標高約300 mの地点に立地する。川との比高は約4 mである。1988年富良野市教育委員会によって420 m²の面積が調査された。竪穴住居址は検出されていない（杉浦 1989）。

7) 東山遺跡：富良野盆地内の西達布川にむかって舌状にはりだす丘陵の緩斜面、標高308 mの地点に立地している。西達布川との比高は約36 mである。1964年に東山地区郷土研究会の主催によって61 m²の面積が調査されたが、遺構は検出されていない（斉藤他 1966）。

8) 川東羽田遺跡：北見盆地内の常呂川から800 mの距離をおいた丘陵斜面、標高101 m前後の地点に立地する。常呂川との比高は約50 mである。1967年に明治大学文学部考古学研究室によって計110 m²の面積が調査され（戸沢・鶴丸 1968、同 1971）、また1986年にも北見市教育委員会によって調査がおこなわれたが（宮・太田 1987）、どちらの調査でも竪穴住居址は確認されていない。ここではおもに明治大学調査分について検討をおこなう。

3. 石器製作技術の比較検討

(1) 検討の方針

以下では、さきに掲げた諸遺跡の石器製作技術の比較検討をおこなう。検討にあたっては、石材、剥片剥離、石器の素材、以上の三点の特徴に着目し、相互の関係のあり方をふまえながら吟味をすすめていくことにする。

(2) 石材

石刃鎌石器群の剥片石器に利用されている石材は、ほとんどが黒曜石であり、ほかに頁岩とメノウがわずかに認められるにすぎない。この傾向はいずれの遺跡においても認められる。

利用されている黒曜石の特徴をつぎに観察してみよう。いずれの遺跡でも15cmをこす黒曜石製の石刃核や石刃が検出されており、人頭大ほどのサイズの前石が選択されていたことが推定される。石刃核や石刃にのこされている自然面は平坦なものが多く、円磨がすすんだいわゆる転礫面が観察されることは少ない。したがって、河川中下流域で採取できる転礫ではなく、岩脈の露頭やその近辺で採取できる角礫を、石刃剥離作業にあたっての原材に選択していたものと考えられる³⁾。

東山遺跡出土の黒曜石製石器の原産地分析によれば、81%（86点）が置戸産、4%（4点）が十勝三股産、1%（1点）が近文台産と推定され、14%（15点）が不明であった（藁科 1994:26）。ほかの遺跡では原産地推定の分析がおこなわれてはおらず、詳細を知ることはできない。しかしながら、筆者の観察したところでは、本稿の検討対象の諸遺跡から検出されている黒曜石製石器の大半は、置戸産か白滝産ではないかとみられる。角礫を用いているという所見を加味すると、石刃鎌石器群における石材採取ゾーンは、置戸や白滝の岩脈の露頭ないしその近辺に限定できるのではないかと推察される⁴⁾。

(3) 剥片剥離技術

石刃鏃石器群は、剥片剥離技術に石刃剥離技術をもつことを最大の特徴とするが、しかし石刃剥離技術だけが石刃鏃石器群において観察される剥片剥離技術ではない。湧別市川遺跡の調査によって、不定形剥片が剥離されているサイコロ状や円盤状を呈する石核の存在に注意が喚起された（木村 1973:22-23）。かりに石刃核をⅠ類、不定形剥片を剥離している非石刃核をⅡ類としよう。筆者の観察するところでは、報告が公表されている遺跡でⅡ類石核がみられるのは、湧別市川とオタフク岩のみである。両遺跡を、Ⅱ類石核が存在するというだけで、他遺跡から区別するのは適当ではない。なぜならば、Ⅱ類石核から剥離される剥片と、Ⅰ類の石刃核に調整をくわえる際に剥離される剥片とを、接合資料以外で厳密に区別するのは困難である。したがって、Ⅱ類石核がないというだけで、不定形剥片を剥離する技術が他遺跡ではおこなわれていなかった、と断言することはできない。くわえて、こうした不定形剥片剥離技術の存在が、遺跡間の時間差や地域差、集団差を直接的に示唆するものであるかどうかは、なお現時点では不明である。すくなくとも、Ⅱ類石核が存在するという事実だけを根拠にして、湧別市川とオタフク岩を検討対象からはずすのは妥当ではない。

以上の見地から本章では、どの遺跡でも観察・検討できる石刃剥離技術の比較検討に重点をおく。比較の手段としては、石刃核と石刃に観察される属性をそれぞれに分解し、その属性ごとに定量的な比較をおこない、遺跡間での剥片剥離技術の差異と共通性を把握する。

a. 石刃核の属性の比較

石刃鏃石器群の石刃核には、打面にこまかな調整が施され、石刃剥離が相当に進行した結果、石刃の剥離面が作業面の全周をめぐるような円錐形を呈するものが一般的であり、原形時の面がのこされているものは少ない。石刃核の属性としてここでは、①打面の種類、②作業面と打面の位置関係、の二点を取りあげる。

打面の種類は、複剥離面・単剥離面・自然面と剥離面の両者がみられるもの・自然面の四種類に区分できる。石刃剥離作業面の陰打瘤をきるようにして形成されている単剥離打面をもつ石刃核が存在するが、そうした資料は打面再生に関連するものと考えられるため、ここでの検討からは除外する。そうすると、各遺跡ともに例外なく石刃核の打面は複剥離面であり、打面調整はかならず施されている。

次に作業面に対する打面の位置について検討をおこなう。石刃鏃石器群で検出される石刃核のすべては、打面と作業面の位置が固定しているものであり、単設・両設のカテゴリーにふくめられる。豊里やオタフク岩では両設打面の石刃核が少数出土しているが、各遺跡ともに圧倒的に単設打面が多い（表 3-1）。この結果は、石刃剥離工程のなかで打面転移の頻度が低かった可能性を示唆している。この点は、のちほど石刃の背面構成の分析にもとづいてさらに検討をくわえることにする。

b. 石刃の属性の比較

石刃の属性として、①石刃のサイズ、②打面のサイズ、③背面構成、④打面の種類、⑤打点直径、⑥打瘤の状態を取りあげる（図 3-2）。

最初に石刃のサイズを検討する。石刃鏃石器群における石刃の場合、折れている資料が一定

表 3-1 各遺跡の石刃核

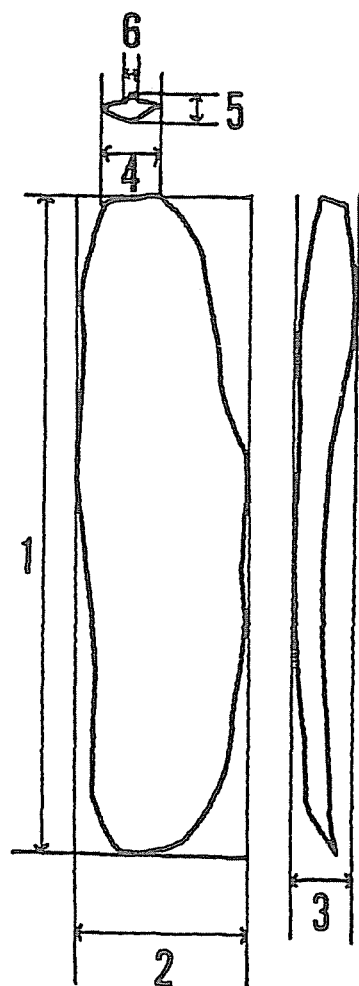
	単設打面	両設打面	計
豊里	231	8	239
%	96.6	3.4	100
湧別市川	49	0	49
%	100	0	100
オタフク岩	21	3	24
%	87.5	12.5	100
トコロ貝塚	8	0	8
%	100	0	100
共栄B	5	0	5
%	100	0	100

表 3-2 各遺跡の石刃の背面構成

	I a	I b	I c	I d	I e	I f	I g	II a	II b	II c	II d	II e	II f	II g
豊里	0	37	3	0	16	0	0	711	74	8	1	3	0	1
%	0	4.33	0.35	0	1.87	0	0	83.26	8.66	0.94	0.12	0.35	0	0.12
湧別市川	2	83	10	0	22	0	0	688	121	1	3	27	0	0
%	0.21	8.67	1.04	0	2.3	0	0	71.89	12.64	0.1	0.31	2.82	0	0
オタフク岩	1	107	21	0	19	2	0	521	74	14	6	13	0	0
%	0.13	13.75	2.69	0	2.44	0.25	0	66.96	9.51	1.79	0.77	1.67	0	0
共栄B	1	31	0	0	0	1	0	143	23	0	0	0	0	0
%	0.5	15.58	0	0	0	0.5	0	71.86	11.56	0	0	0	0	0
西達布 2	0	3	1	0	0	0	0	31	3	0	0	0	0	0
%	0	7.89	2.63	0	0	0	0	81.59	7.89	0	0	0	0	0
東山	0	3	0	0	0	0	0	49	4	0	0	0	0	0
%	0	5.36	0	0	0	0	0	87.5	7.14	0	0	0	0	0

表 3-3 各遺跡の石刃の打面の種類

	A	B	C	D	E
豊里	280	0	0	0	15
%	94.92	0	0	0	5.08
湧別市川	271	9	0	1	10
%	93.13	3.32	0	0.34	3.44
オタフク岩	205	6	1	0	0
%	93.61	2.74	0.45	0	0
共栄B	72	0	0	0	0
%	100	0	0	0	0
西達布 2	15	0	0	0	0
%	100	0	0	0	0
東山	24	0	0	0	0
%	100	0	0	0	0



- 1. 長さ
- 2. 幅
- 3. 厚さ
- 4. 打面幅
- 5. 打面厚
- 6. 打点直径

図 3-2 石刃の属性

数認められるため、有意な最大長のデータを得ることはできないが、最大幅と最大厚は各遺跡でまとまった点数を計測することができる。各遺跡の石刃は、最大幅で 14mm から 20mm 前後、最大厚で 3mm から 4mm 前後の数値を示している（図 3-3）。各遺跡では共通したサイズの石刃が検出されていると判断できよう。

打面幅と打面厚をつぎに検討してみると、打面幅は 8mm から 12mm 前後、打面厚は 3mm から 4mm 前後、に各遺跡のデータが集中する傾向がみられる（図 3-4）。打面のサイズについても、各遺跡から検出されている石刃はほぼ共通した傾向を示している。

背面構成については、厳密には完形品を対象に検討をおこなわねばならないが、ほとんどの石刃が折れた状態で検出されているため、全体的な傾向を把握する目的で背面が十分に観察できると判断した 4 cm 以上の石刃を対象に分類をこころみた。全部もしくは一部に自然面がみられるものをⅠ類、自然面がみられないものをⅡ類と大別し、さらに以下のように細別した。

Ⅰ a 類：背面すべてが自然面のもの。

Ⅰ b 類：背面の一部に自然面があり、腹面と同一の加撃方向を示す剥離痕があるもの。

Ⅰ c 類：背面の一部に自然面があり、腹面に対して横位方向を示す剥離痕があるもの。

Ⅰ d 類：背面の一部に自然面があり、腹面の加撃方向とは逆方向を示す剥離痕があるもの。

Ⅰ e 類：背面の一部に自然面があり、腹面と同一および横位方向を示す剥離痕があるもの。

Ⅰ f 類：背面の一部に自然面があり、腹面と同一および逆方向を示す剥離痕があるもの。

Ⅰ g 類：背面の一部に自然面があり、腹面と同一および横位・逆方向の剥離痕があるもの。

Ⅱ a 類：すべての剥離痕が腹面と同一方向の加撃方向であるもの。

Ⅱ b 類：腹面と同一および横位の加撃方向を示す剥離痕をもつもの。

Ⅱ c 類：腹面と同一および逆方向の加撃方向を示す剥離痕をもつもの。

Ⅱ d 類：腹面と同一および横位・逆方向の加撃方向を示す剥離痕をもつもの。

Ⅱ e 類：すべての剥離痕が腹面の加撃方向に対して横位方向を示すもの。

Ⅱ f 類：すべての剥離痕が腹面の加撃方向に対して逆方向を示すもの。

Ⅱ g 類：腹面の加撃方向に対して横位・逆方向を示す剥離痕をもつもの。

各遺跡ともに圧倒的にⅡ a 類が多く、ついでⅡ b 類とⅠ b 類がみられる（表 3-2）。Ⅱ b 類は稜形成調整痕付石刃にふくめられるものが多いため、実質的に各遺跡で出土している石刃は、腹面と同一の加撃方向を示す剥離面を背面にとどめているものが 80 % 以上をしめていることになる。以上の分類は完形品を対象におこなったのではないが、打面転移を示す資料がきわめて僅少であるという傾向からみて、実際のあり方もこれに合致するものとみてよい。

打面の種類として、A 類：複剥離面、B 類：単剥離面、C 類：自然面、D 類：自然面と剥離面がみられるもの、E 類：線状打面、と分類した。どの遺跡でも A 類が 90 % 以上をしめていることが分類の結果わかった（表 3-3）。

打点直径に関してしてみると、各遺跡で打点直径の観察できない石刃が 90 % 以上をしめており（表 3-4）、遺跡間で差異を認めることはできない。

打瘤の状態については、Cotterell と Kamminga（1987:685-691、1990:130-135）による剥離の発生形式に関する研究を参考にし、打瘤がみられるもの（Salient）をⅠ類、打瘤がみられず打瘤上部の打面と腹面との境界部分が腹面側へ内傾しているもの（Diffuse）をⅡ類、内傾が観察できず打

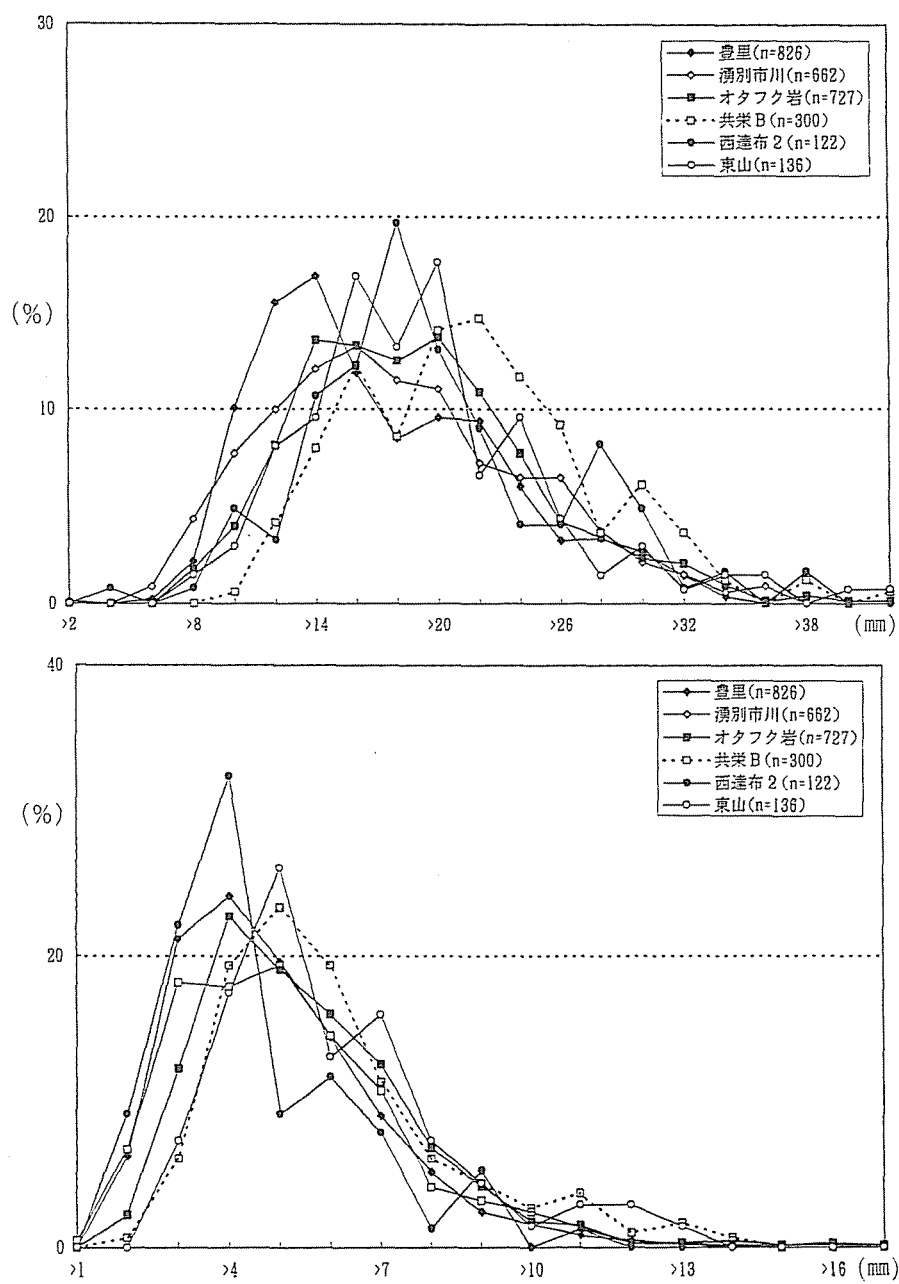


図 3-3 石刃のサイズ (上・幅、下・厚さ)

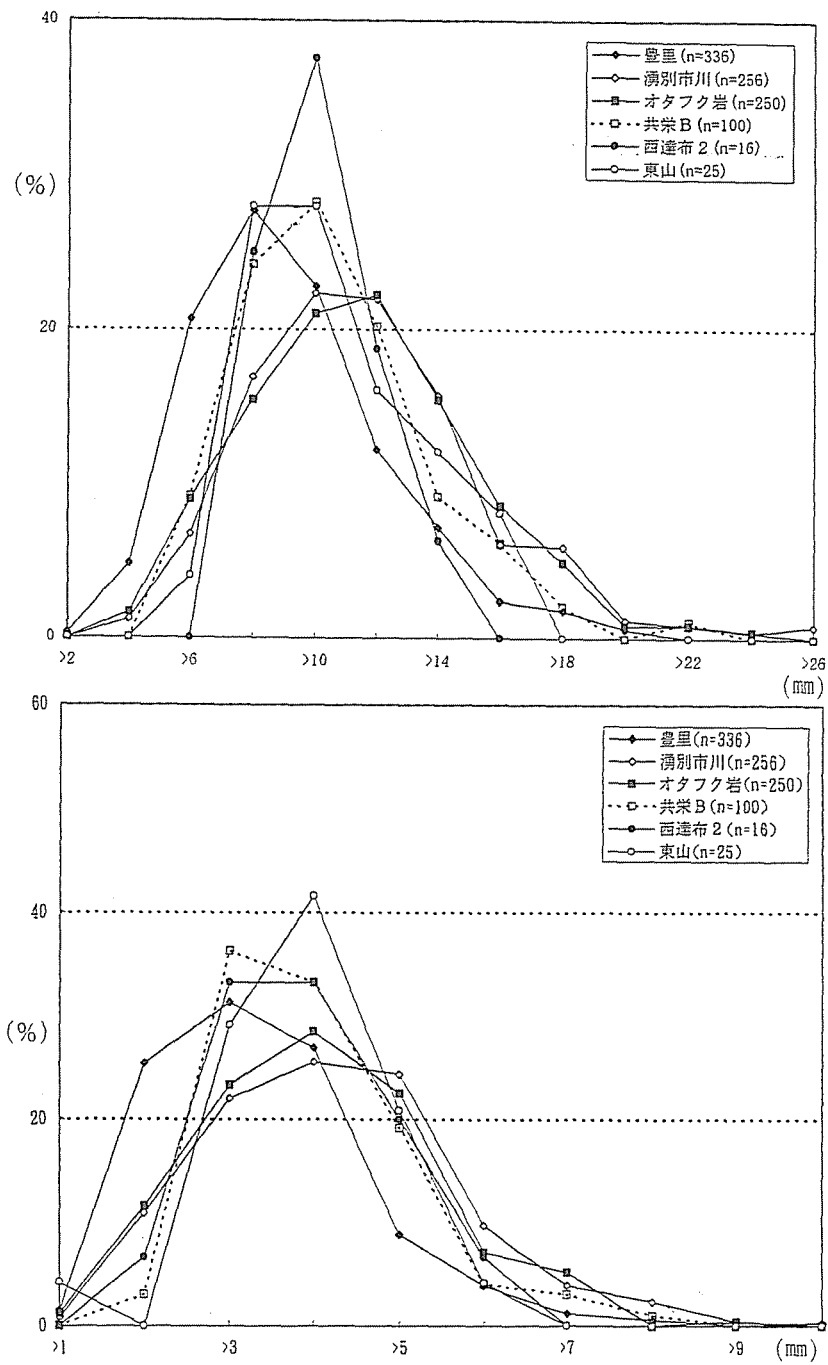


図 3-4 石刃の打面のサイズ (上・打面幅、下・打面厚)

表 3-4 各遺跡の打点直径（単位 mm）

	0	< 1	< 2	< 3	< 4	< 5	< 6
豊里	327	0	0	7	5	0	0
%	96.4	0	0	2.1	1.5	0	0
湧別市川	245	0	1	4	5	1	0
%	95.7	0	0.4	1.5	1.9	0.4	0
オタフク岩	238	0	1	2	4	2	1
%	95.9	0	0.4	0.8	1.6	0.8	0.4
共栄B	100	0	0	0	0	0	0
%	100	0	0	0	0	0	0
西達布 2	16	0	0	0	0	0	0
%	100	0	0	0	0	0	0
東山	23	0	0	0	1	1	0
%	92	0	0	0	4	4	0

表 3-5 各遺跡の打瘤の状態

	I	II	III
豊里	263	33	3
%	87.96	11.04	1.00
湧別市川	264	21	6
%	90.72	7.22	2.06
オタフク岩	174	25	12
%	82.46	11.85	5.69
共栄B	57	4	1
%	79.16	19.45	1.39
西達布 2	13	1	1
%	86.66	6.67	6.67
東山	22	2	0
%	91.67	8.33	0

瘤がみられないもの (Flat) をⅢ類と分類する。分類結果をみると、どの遺跡でもⅠ類が安定して 80 % 前後みられ、Ⅱ類がそれに続く共通した傾向が認められる (表 5-5)。

c. 諸属性の吟味

石刃剥離技術の検討でとりあつかった諸属性は、剥離方法 (打撃・加圧法) に関連する属性と、剥離工程に関連する属性とに区分することができる。

比較した属性のうち、打面のサイズや打点直径、打瘤の種類は、剥離方法に関連する属性と考えられる。打面のサイズのなかで打面厚は、剥離の方法によっては人為的に制御可能な属性であり、遺跡間でほとんど差がみられないことは、共通した石刃剥離方法が各遺跡で採用されていたことを強く示唆している。大沼克彦と Bergman (Ohnuma and Bergman 1982) は、実験的研究により、剥片の打点や打瘤にみられる変異が直接打撃の際の硬質・軟質ハンマーの差異によるものであることを指摘した。しかし、いくつかの成果 (Sollberger and Patterson 1976) は認められるものの、間接打撃や押圧剥離をふくんだ同定研究はまだ開始されてはおらず (Owen 1988:7)、そのため、石刃礫石器群の石刃に観察される打点や打瘤の傾向が特定の剥離方法に対比できるものと確言することは、現状ではできない。したがって、ここでは資料の傾向を把握するにとどめておく⁹⁾。ただし、すくなくとも打点や打瘤の属性もまた打面のサイズと同様に各遺跡で共通した傾向を示していることは、同様の剥離方法が採用されていたという想定を裏づける可能性があるだろう。

石刃核で観察した打面の種類・打面と作業面の位置関係、石刃で観察した打面の種類・背面構成は、剥離工程のなかの打面調整と打面転移に関連する属性である。打面の種類の検討からは、いずれの遺跡でも複剥離打面が圧倒的に多くみられるため、打面調整はほぼ例外なく施されていたことがわかった。また、腹面と同一の加撃方向を背面の剥離痕は示す場合が圧倒的に多い、という石刃の背面構成の分析結果にしたがえば、どの遺跡においても石刃剥離の進行過程で打面転移はほとんどおこなわれなかったとみられる。

石刃剥離工程に関連するとして上記の諸属性は、遺跡間で定量的な比較ができる。しかしそれ以外に、定量的な比較はできないが、石刃剥離工程の特徴をあらわしている調整・補正技術として、石刃核作業面の稜線の形成・再形成のための作業面での横位調整、打面の再生などがあげられる。これらの調整・補正技術の存在を示す稜付石刃・打面再生剥片の検出状況は、遺跡ごとで顕著な差をみせている。打面再生剥片は、西達布 2・東山・川東羽田では検出されていない。稜付石刃に関してしてみると、西達布 2 や東山では二次加工が施されている稜付石刃は検出されているが、二次加工が施されていない稜付石刃は検出されていない。これらの遺跡で打面再生剥片や二次加工が施されていない稜付石刃が検出されないのは、遺跡内での石器製作作業の差異が起因しているものと考えられる。この点は後述する。

最後に石刃のサイズだが、石刃のサイズという属性は、製作者の目的とするところが反映していると考えられるとともに、原石のサイズや剥離方法・工程などの諸要素の影響をうけているともみられる。検討結果からは、いずれの遺跡でもほぼ共通したサイズの石刃が検出されていることがわかった。石材や剥離工程・方法に関する観察が妥当なものであることを前提とすると、各遺跡では共通したサイズの石刃が志向されていたものと判断してよからう。

（４）石器の素材

石器には石刃を素材にしているものと、不定形剥片を素材にしているものがある。石刃鏃・彫器・削器・搔器は石刃が素材である。石鏃や揉錐器の一部には、厚さや形状からみて石刃素材と思われるものもあるが、多くは幅広・寸詰まりの剥片を素材としている。それらには、Ⅱ類石核から剥離された剥片を素材にしているものもふくまれているとみられる。全体形状が縦長である石匙は、背面全体が二次調整によっておおわれているが、腹面の状態からみて二次加工による素材の変形がそれほど観察されないことから、石刃を素材にしていると判断できる。

尖頭器や石筥は盤状・横長剥片が素材になっている（梶原 1976:11）。これら盤状・横長剥片素材の器種の背面には大きな自然面がのこされている場合が多い。したがって、盤状・横長剥片は、石器製作のなかでも早い段階に剥離されたものと考えられる。ちなみにオタフク岩では、石筥の長さは平均 11cm 前後ある。想定域をでるものではないにせよ、石刃核が作出される過程では大ぶりの剥片が剥離される可能性は高いと思われる、それらの剥片が尖頭器や石筥らの素材になっていたのではないかと推測される。

次に石刃を素材にしている石器をより詳細に観察してみると、石器の種類に応じてサイズの異なる石刃を選択していることがわかる。石刃鏃・彫器の最大幅の平均値は、石刃鏃で 11mm 前後、彫器は 19mm 前後であり、遺跡ごとの差はほとんどない（表 3-6）。遺跡ごとに石刃鏃と彫器の幅の計測値を t 検定によって検討したが、いずれの遺跡でも有意水準 5 % で両器種の幅には有意差があることがわかった（表 3-7）。石刃鏃や一部を除いた彫器⁶¹は、二次加工によって幅がきわだって減少することは考えがたいことから、ここに指摘した最大幅の差は、素材として選択された石刃のサイズの差を反映していると考えて差し支えない。藤本強（1992:149-153）は、アムール川流域のノヴォペトロフカ遺跡や北海道のトコロ貝塚の資料を分析して、石刃鏃には細身の石刃が、それ以外の石刃素材の器種には太身な石刃が、その素材に利用されていることを指摘した。ここでの筆者の検討は、藤本が指摘した素材選択のあり方が、北海道のどの遺跡の事例においても観察できることを示すこととなったといえよう。

（５）石器製作技術による遺跡間の比較

ここまで遺跡間での石器製作技術の比較をおこなってきた。その結果、原材に選択されている石材、剥片剥離技術、石器の素材選択の三点に関しては、各遺跡を通じて強い画一性を示していることがわかった。これまで指摘されている細部調整技術の共通性（木村 1976:15）とを加味すると、遺跡ごとの石器製作技術の高い共通性は再度強調しておく必要がある。

4. 組成の比較検討

本節では、石器・遺物組成の遺跡間比較をおこなう。

（１）石器組成

出現の有無をみると、石刃鏃、彫器、削器、搔器、揉錐器、磨製石斧、砥石、石鋸は、

表 3-6 石刃鏃（上）と彫器（下）の幅（単位 mm）

遺跡	サンプル数	最小値	平均値	最大値	標準偏差
豊里	64	7	11.6	22	2.04
湧別市川	79	8	12.9	24	3.14
オタフク岩	123	7	13.7	11	1.19
トコロ貝塚 FT	12	8	10.8	4	4.22
共栄 B	14	8	10.5	14	1.87
西達布 2	11	8	11.6	14	2.01
東山	6	9	10.8	12	1.07
川東羽田	57	7	11.7	27	3.02

遺跡	サンプル数	最小値	平均値	最大値	標準偏差
豊里	5	17	19.4	22	2.24
湧別市川	77	10	20.3	34	4.7
オタフク岩	86	11	19	42	4.91
トコロ貝塚 FT	0	0	0	0	0
共栄 B	51	9	20.1	35	5.72
西達布 2	13	8	19.7	33	6.98
東山	26	9	18.8	43	7.01
川東羽田	7	15	17	19	1.64

表 3-7 石刃鏃と彫器の幅の t-検定

遺跡	t 値	有意水準0.05での 有意差の有無
豊里	- 8.16698	+
湧別市川	-15.2045	+
オタフク岩	- 8.30017	+
共栄 B	- 5.97739	+
西達布 2	- 3.42642	+
東山	- 2.7539	+
川東羽田	- 4.69168	+

ほぼすべての遺跡から出土している。一方で、尖頭器、石鏃、石筥、石匙、石錘、磨石、石皿・凹石、敲石は、一部の遺跡で組成から脱落している（表 3-8）。石器組成表をみると、尖頭器をはじめとして磨石、石皿・凹石、敲石などをもふくむ石器組成と、これらが脱落する石器組成とが認められる。豊里・湧別市川・オタフク岩・トコロ・共栄などは前者の例である。トコロや共栄では、石匙や尖頭器などに一部脱落が認められるが、石鏃・磨石・石錘などは検出されており前者の組成のうちにふくめることができよう。後者の例としては、西達布・東山・川東羽田などをあげることができる。大まかにみれば、沿岸部に位置する遺跡では前者の組成が、内陸部に位置する遺跡では後者がみられるといえよう。

ここで沿岸部と内陸部での石器組成の差に注目すれば、内陸部の遺跡において石錘・磨石・石皿・凹石が脱落するのは、生業活動として漁労活動や植物性食料の加工作業が低調であり、逆にそれらの石器が検出されている沿岸部の諸遺跡では、漁労活動や植物性食料の加工作業も生業活動のレパートリーにくわわっていた、と解釈することができるかもしれない。実際、藤本強（1981:324）はそのような解釈を採用している。一般論として、組成の内容は活動地点の放棄要因の影響をうける可能性が指摘されており（Schiffer 1987:89-98）、ただちに「生業活動」の解釈に結びつけるには問題がある。しかし、石錘・磨石・石皿・凹石らのように、遺跡近辺で原材が比較的容易に入手でき、なおかつ重量の点からみて携帯性が不適当な石器の場合、その有無は生業活動の性格を反映している可能性がある。生業活動の問題については、遺跡の種別や立地といった〈集団〉の移動・居住形態にかかわる全体的な輪郭があきらかにされた時点で再度考えてみよう。

（2）遺物組成

各遺跡から出土した石器、石刃、石核、剥片・碎片の組成を検討する（表 3-9、図 3-5）。

検出された剥片・碎片の比率・点数は、その遺跡での石器製作作業の性格を推測させるものとして重要である。ここでいう「石器製作作業」は、器種の調整加工・再加工にかかわるよりは、むしろ剥片剥離にかかわるものである。剥片剥離作業にともなって多量の剥片・碎片が飛散することは、われわれが石器製作実験を通じて経験的に認識しているところであり、剥片・碎片が多量に検出された遺跡では、剥片剥離作業がおこなわれていた可能性が高いと考えてよい。石器や石刃に関しては、製作された地点からもちだされる可能性があるが、剥片・碎片がもちだされている可能性はきわめて小さい。こうした理由から、剥片・碎片の比率と点数は、遺跡の性格を考えるうえで重要な指標になることが了解できよう。

剥片・碎片の比率と点数をみると、各遺跡は以下のように三種類に区分できる。

a 類) 比率が 70 % 以上、点数が千点以上：豊里・湧別市川・オタフク岩。

b 類) 比率が 15 %～30 %、点数が 50 点以上：トコロ・共栄。

c 類) 比率が 15 % 以下、点数が 50 点以下：西達布・東山・川東羽田。

a・b 類に区分された諸遺跡では、剥片・碎片の比率や点数からみて剥片剥離作業がおこなわれていたと考えられる。a・b 類にふくめられる諸遺跡から検出された剥片・碎片には大・中形のものが多いため、先述のように打面再生剥片や稜付石刃が検出されていることからみても、遺跡内で剥片剥離作業はおこなわれていたと考えて大過あるまい。反対に、c 類に区分さ

表 3-8 石器組成表

遺跡	石刃鏃	彫器	削器	搔器	掻錐器	石匙	石筥	尖頭器	石鏃	石斧	石鋸	砥石	敲石	石皿・凹石	磨石	石錘	石製装身具	計
豊里	208	5	375	318	24	0	2	103	181	57	17	94	76	2	45	279	25	1811
%	11.48	0.28	20.8	17.56	1.32	0	0.11	5.68	9.98	3.14	0.93	5.18	4.18	0.11	2.48	15.4	1.37	100
湧別市川	136	397	85	70	2	3	9	36	29	39	10	34	5	11	18	40	3	927
%	14.67	42.83	9.17	7.55	0.22	0.32	0.97	3.88	3.13	4.2	1.08	3.68	0.54	1.18	1.19	4.31	0.32	100
オタフク岩	157	597	279	33	5	6	8	19	41	74	10	32	23	3	0	33	20	1340
%	11.71	44.56	20.83	2.47	0.37	0.44	0.59	1.41	3.06	5.53	0.74	2.39	1.72	0.22	0	2.47	1.49	100
トコロ貝塚FT	7	0	1	11	1	0	1	0	1	2	0	23	1	3	0	7	0	58
%	12.07	0	1.72	18.96	1.72	0	1.72	0	1.72	3.45	0	39.67	1.72	5.17	0	12.08	0	100
共栄B	23	108	13	12	2	1	0	0	2	16	3	5	9	0	1	27	6	228
%	10.09	47.37	5.7	5.26	0.88	0.44	0	0	0.88	7.02	1.32	2.19	3.95	0	0.44	11.84	2.62	100
西達布2	11	30	44	7	4	0	0	0	0	11	8	2	0	0	0	0	0	117
%	9.4	25.65	37.61	5.99	3.41	0	0	0	0	9.4	6.84	1.7	0	0	0	0	0	100
東山	7	27	0	4	2	0	0	0	0	5	9	2	0	0	0	0	1	57
%	12.28	47.37	0	7.02	3.51	0	0	0	0	8.77	15.79	3.51	0	0	0	0	1.75	100
川東羽田	204	10	1	3	0	0	0	3	1	3	0	0	0	0	0	0	0	225
%	90.66	4.44	0.44	1.34	0	0	0	1.34	0.44	1.34	0	0	0	0	0	0	0	100

表 3-9 遺物組成表

	石器	石核	石刃	剥片・碎片	計
豊里	1811	239	5136	27349	34535
%	5.24	0.69	14.88	79.19	100
湧別市川	927	60	2447	9944	13378
%	6.91	0.46	18.29	74.34	100
オタフク岩	1340	34	839	8580	10793
%	12.42	0.31	7.77	79.5	100
トコロ貝塚	58	8	140	88	294
%	19.73	2.72	47.62	29.93	100
共栄B	228	8	301	109	646
%	35.29	1.24	46.59	16.88	100
西達布2	117	0	42	13	172
%	68.02	0	24.42	7.56	100
東山	57	1	111	25	194
%	29.38	0.51	57.22	12.89	100
川東羽田	225	0	63	12	300
%	75	0	21	4	100

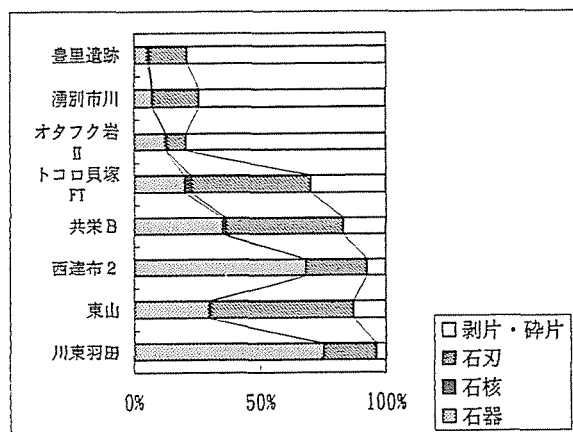


図 3-5 遺物組成

れた西達布⁷⁾・東山・川東羽田では、剥片剥離作業がおこなわれていたとは考えがたい。これらの諸遺跡からは、打面再生剥片や二次加工の施されていない稜付石刃が検出されてはおらず、また検出されているわずかな剥片・碎片は、石器の調整加工および刃部再生の時点で剥離されたものと想定されるからである。実際に東山では 25 点の剥片・碎片のうち 4 点が彫器の削片であり、また彫器削片以外の剥片・碎片は、ほとんどが長さ 3 cm 以内の小形のものであることから、上記の想定は妥当性をもつものといえよう。したがって、これらの遺跡で検出された石器は、素材もしくは完成された状態で遺跡にもちこまれたものと推察される。

なお、同じように石刃剥離作業がおこなわれていたと考えられる諸遺跡でも、a 類と b 類の遺跡間には剥片・碎片の比率や点数に関して差異を認めることができる。この差異がどのような要因によるのかは別の機会に検討するとして、ここでは当面、剥片剥離作業の有無を基準として導かれた a・b 類と c 類の二分を確認しておくことにしよう。

(3) 分析結果の吟味

石器組成や遺物組成のデータは、遺跡内での石器の分布状態や調査面積によっては、本来その遺跡にのこされた組成とは大幅に異なったものになってしまう可能性がある。この点の吟味をぬきにして、遺跡の性格を議論することはできない。次節では、遺物組成をもとに各遺跡の性格について考察する予定のため、ここでは遺物組成のデータの吟味をおこないたい。

かりに石器、石刃、石核、剥片・碎片のそれぞれの遺跡内での分布に、常態的なかたよりがみられるとすれば、ほとんどが石器や石刃でしめられている西達布・東山・川東羽田の遺物組成は、たんに分布のかたよりの一端が調査で把握されたにすぎないことになる。この問題を解決するため、石器、石刃、石核、剥片・碎片のそれぞれが充分に検出されている遺跡での石器の平面分布を検討し、分布にかたよりがあるかどうか確認しておく必要がある。

そこで、出土遺物全点の分布を再検討することができるオタフク岩の遺物分布を検討した。石器、石刃、石核、剥片・碎片にわけ、それぞれの分布のかたよりが客観的に把握できる分布密度の等高線を作成した(図 3-6)。この図によれば、剥片・碎片の分布には、調査区の南西部分(B から F までの 15 ～ 22 列)にかけてなかに粗密はあるが大きな集中が認められるが、ほかに北東部分にも二ヶ所の集中(E 8・E 9・F 8・F 9 と C 11・C 12・D 12)がみられる。石器、石刃、石核のそれぞれの分布には、調査区の南西部分(B から F までの 15 ～ 22 列)に集中がみられる。分布のあり方を相互に比較してみると、調査区の北東部分では、剥片・碎片だけが単独に集中していることがわかる。それに対して、南西部分では最も集中している場所にずれが認められるとはいえ、大きくみた石器と石刃、石核の集中と剥片・碎片の集中は、相互に重なっているといえよう。

オタフク岩では、石器と石刃、石核の分布は、単独で集中するのではなく、剥片・碎片の集中とほぼ重なっていることがあきらかにされた。湧別市川でも同様の傾向が認められる。報告書(木村 1973:28-32)では、石器の集中部ごとの石器や剥片・碎片の点数を提示しているが、これをみるかぎりでは剥片・碎片だけで構成されている集中部はみられない。この二つの遺跡の事例からみて、以下のような傾向を導くことができる。つまり、石刃・石器群が検出された遺跡では、遺跡内での分布のかたよりの結果によって、剥片・碎片だけが集中的に検出される

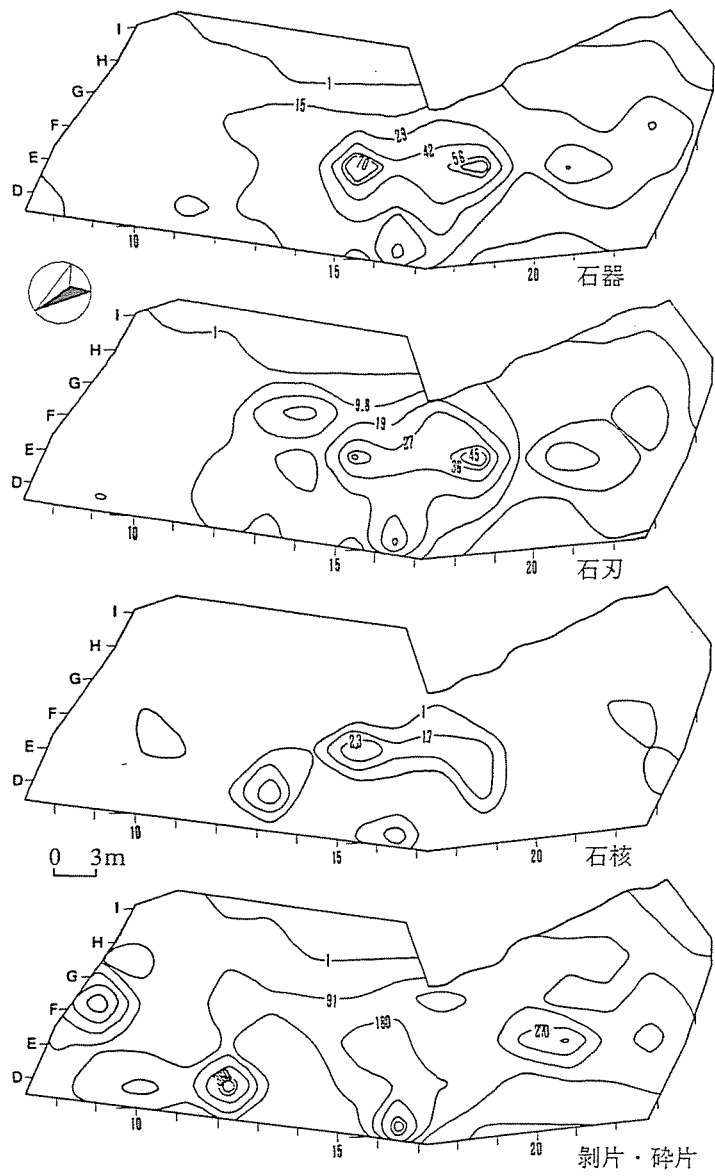


図 3-6 オタフク岩遺跡第Ⅱ地点の遺物分布密度

ことはあっても、石器や石刃だけが集中的に検出される可能性は低い、と。そのため、西達布・東山・川東羽田でみられるような、剥片・碎片の検出量が非常に少ない遺物組成を、遺跡内の分布のかたよりに起因するものと一方的に解釈することはできないことになろう。

これらの諸遺跡の調査面積は、西達布が 420 m²、東山が 61 m²、川東羽田が 110 m²である。このうち川東羽田では、遺物包含層が安定して検出されているわけではないため、遺物の内容が本来の組成をどれほど反映しているのか判断は難しい。そのため、川東羽田については判断を保留にするが、西達布・東山では散漫にひろがる遺物の分布が調査の結果とらえられており、遺跡の全容がほぼあきらかにされていると考えられる。したがって、遺物分布に関する上記の検討を加味すると、さきに示した遺物組成のデータは、遺跡の性格を評価するうえで有意なものとしてよい。次節ではこのデータをもとに遺跡の性格を検討し、移動・居住形態の仮説モデルの説明にふみこみたい。

5. 移動・居住形態の検討

(1) 遺跡間の相互補完性

前節までに検討したように、石器製作技術に関連する諸属性には遺跡間で共通性が認められながらも、石器組成や遺物組成には遺跡間で差異が確認できた。こうした差異と共通性が意味するところを以下で考察してみよう。

前節で遺物組成の検討をおこなったが、その特徴からみて各遺跡は a 類・b 類・c 類の三つに区分できることを指摘した。a・b 類に区分された豊里・湧別市川・オタフク岩・トコロ・共栄では、石器や石刃のほかに、石核や剥片・碎片が検出されており、遺跡内に剥片剥離作業の痕跡を確認することができた。一方、c 類に区分された西達布・東山・川東羽田では、検出された石器群の大半が石器や石刃のため、剥片剥離作業の痕跡はほとんど確認できなかった。したがって、a・b 類に区分される遺跡と c 類に区分される遺跡は、全体的な石器製作工程のなかで相互補完的な位置をしめていたということがうかがえる。

石器や石刃だけが検出され、剥片剥離作業の痕跡がほとんど認められない c 類の遺跡が存立しうるためには、剥片剥離作業の痕跡が確認されている遺跡とのあいだでなんらかの関係が成立していたと考えなければならぬ。c 類の遺跡で検出されている石器や石刃は、第 3 節の比較検討であきらかにした石器製作技術の共通性からみて、a・b 類の遺跡で製作されていたものと推察される。したがって、c 類の遺跡で検出された石器や石刃は、a・b 類の遺跡で製作されたものがもちこまれたと考えるのがもっとも妥当となろう。そのため、c 類の遺跡は、a・b 類の遺跡をのこした集団が移動してきたことを契機に形成されたのではないか、という仮説をたてることができる。石器製作作業の進行が不可逆的であることを念頭におけば、a・b 類の遺跡を起点にした移動活動が想定されよう。

なお伴出する土器群の検討結果によれば、北海道の石刃礫石器群は、比較的短期間のうちに出現・消滅したと考えられている（沢 1968:16）。土器群の検討にもとづく遺跡間の時間的關係については、いずれ詳細な議論を別機会におこないたいと考えているが、ここでは伴出する

土器群の位置づけから、遺跡間の時間的関係について概略のみ言及しておく。

石刃鍬石器群に伴出する土器には、器形が鉢形またはコップ形をなし、口縁部が平縁で、無文や条痕文がみられるものが多いが、口縁部ちかくには絡条体圧痕文がよくみられる。いわゆる浦幌式と命名されたものである（名取 1955:30）。浦幌式は、本稿で検討対象にした遺跡のなかでは、川東羽田をのぞくすべての遺跡において検出されている。このほか型押文や円形のスタンプ状の文様を口縁部ちかくにもつものが、豊里やトコロでわずかに知られている。いわゆる女満別式やトコロ 14 類と命名されたものである（大場・奥田 1960:73、駒井編 1963:169）。しかしながら、これらの土器と浦幌式は、トコロ貝塚の遺構内で共伴して出土することが報告されている（駒井編 同前:155）。同様に、縄文・絡条体圧痕文・組紐圧痕文・貼付隆起文の組合わさりを特徴とする東釧路Ⅱ・Ⅲ式が、湧別市川・オタフク岩・網井で確認されているが、これらの土器にも浦幌式との共伴が指摘されている（木村 1973:33、涌坂・豊原 1991:68、豊原 1981）。

以上に概観した範囲では、浦幌式がどの遺跡でも検出されていることから（表 3-10）、石刃鍬石器群が検出された遺跡間には段階差とよべるような顕著な時間的間隔を認めることはできない³¹。これは、さきに指摘した遺跡間の移動に関する仮説と矛盾せず、逆にその可能性を支持するものとなろう。

（2）遺跡の立地

各遺跡の立地や標高については、第2節の遺跡概観の項で説明したが、あらためてそれを本節で整理してみよう。

図 3-1 の遺跡分布からもあきらかなように、豊里・湧別市川・オタフク岩・トコロ・共栄は、現海岸線にかなり接近した地点に位置している。これらの遺跡は、いずれも低位の段丘上に立地し、標高もオタフク岩Ⅱを例外にすると、ほとんどが 20 m 以内の地点に立地している。オタフク岩は、標高が 40 m とやや高いものの、現海岸を眼下におく崖上に立地していることからみて、ほかの遺跡と同様の立地傾向をみせていると考えて大過あるまい。一方で、西達布・東山・川東羽田は、現海岸から 100km 前後も離れた内陸部の丘陵の緩斜面に立地し、標高は 100 m をこすという傾向が認められる。

重要な点は、現海岸からの最短距離・標高・立地する地形によって把握される沿岸部と内陸部との遺跡の区分が、石器製作作業の検討から把握された遺跡の区分と対応することである。すなわち、剥片剥離作業の痕跡が確認された遺跡は沿岸部に立地し、その痕跡が確認できなかった遺跡は内陸部に立地しているのである。遺物組成の検討によって設定した a・b 類と c 類の遺跡間で、集団は移動していたであろうという仮説を、筆者はさきに提起した。ここまでの検討をつけくわえるならば、そうした移動活動は、沿岸部と内陸部という異なった地理的景観をまたがるものであったことになる。

（3）遺跡の種別

沿岸部と内陸部という異なる地理的景観のそれぞれを、集団はどのように利用していたのか。ここでは遺構の検出状況から遺跡の種別設定をおこなうことで、この問題を検討してみよう。

	浦幌式	女満別式 トコロ14	東釧路Ⅲ式
豊里	○	○	
湧別市川	○		○
オタフク岩	○		○
トコロ	○	○	
共栄	○		
西達布	○		
東山	○		

表 3-10 各遺跡出土の土器型式

石刃鏃石器群が検出された遺跡で発見される遺構には、竪穴住居址と土坑の二種類がある。遺跡種別の設定の基準は、そのうち竪穴住居址の有無によることにし、検出されている遺跡をⅠ種、検出されていない遺跡をⅡ種と大別する。豊里・湧別市川・オタフク岩・トコロ・共栄は、竪穴住居址が検出されておりⅠ種に区分される。竪穴住居址が検出されていない西達布・東山・川東羽田はⅡ種に区分される。

竪穴住居址の有無によってⅠ種とⅡ種の遺跡種別を設定したが、竪穴住居址が検出されていないⅡ種とした遺跡の場合、調査面積が極端に小さかったり、予想される遺跡のひろがり調査しきれていないとすると、本来的には存在していた竪穴住居址が検出されないことも予測できる。前章で指摘したように、Ⅱ種とした遺跡のうち、川東羽田をのぞく西達布・東山の両遺跡は、調査によって遺跡の全容がほぼおさえられたと考えられるため、そうした問題を考慮する必要はそれほどない。また、1991年度におこなわれた豊里の調査（米村 1992:17-48）や湧別市川（北海道大学 1967:1）・トコロ（駒井編 1963:149-150）らの報告をみると、竪穴住居址は石器群の分布がもっとも集中する部分ないしその近辺において確認されている。竪穴住居址の空間的位置と石器群分布とのあいだに一定の対応関係があることを認めるならば、遺跡の全容がほぼ把握されたとみられる西達布・東山の両遺跡には、竪穴住居址は本来的に存在していなかった可能性が高いことになる。

遺跡種別としてⅠ種とⅡ種を区分したが、注目される点は、遺跡種別の検討によって把握された遺跡の区分が、遺物組成、さらには前節で検討した遺跡立地にもとづく区分と一致することである。石器製作作業が活発におこなわれていた沿岸部の諸遺跡では、竪穴住居址をとまなう居住活動が営まれていたことが確認でき、また石器製作作業の痕跡にとぼしい内陸部の諸遺跡では、竪穴住居址をとまなわない活動が営まれていたとみられる。前者の遺跡の場合は本拠地（base camp）の性格が、後者の遺跡の場合には野営地（temporary camp）の性格が想定されよう。ただし後者の遺跡のなかでも川東羽田は、石器組成や遺物組成からみて、より特殊な性格をもっていたことが容易に想像できる。さきにも述べたように出土状況が不明確なため断定することはできないものの、土器が検出されていないこと、検出された石器の種類がきわめて少ないこと、石器組成のなかでも石刃鏃が圧倒的に多いこと（90.66 %）などを勘案すると、特定の活動場所（special purpose site）、もしくは道具の一時保管場所（cache）、あるいはその両者が組合わさっていた性格が想定できよう。

以上のような遺跡種別の設定によって、石刃鏃石器群が検出された各遺跡は、大きくみて本拠地と野営地に区別された。ここでおこなった大別は、沿岸部と内陸部という異なった地理的景観の相互で、集団がどのような行動をとっていたのかを示唆するものといえる。したがって、ここまで検討してきたかぎりでは、本章の冒頭で差し出した遺跡間関係の解釈に関しては、藤本強（1981:324）による活動差という観点からの説明の方がより妥当なものとなる。

ただし注意しておくべき点は、この大別によって特定の地点でおこなわれた行動のすべての性格が説明できるわけではないことである。たとえば本拠地としたⅠ種の遺跡は、個々の遺跡での遺物出土量が膨大であること、遺構相互に切り合い関係が認められることから、累積的な行動がなされたことによって遺跡が形成されている可能性を予測することができる。単位行動が累積されることによって形成される回帰的な遺跡の場合、そこでおこなわれる単位行動の

性格には振幅がみられること、いわば本拠地的な利用と野營地的な利用とがなされる可能性があることは、民族誌の検討からすでに指摘されている（Binford 1982:11-16）。遺跡形成の際の個別行動を解きほぐして、その性格を究明することは、今後へのこされた課題といわねばなるまい。ただし、ここまでの検討結果からすれば、Ⅱ種とした遺跡がいわば本拠地的に利用されることはなかった、と結論づけることができよう。

なお、佐藤訓敏（1983:52-54）が綿密に集成したデータからもあきらかなように、石器群がまとまって発見されている遺跡以外に、石刃鏃などが単発で採集されている遺跡は数多い。先述したように、図 3-1 に黒印で示した遺跡がそれらに相当する。これらの遺跡に関しては、次章で検討してみることにしたい。

（４）移動・居住形態の仮説モデル

以上、遺物組成や遺跡立地・種別に対して検討をくわえてきたが、その結果、集団は沿岸部と内陸部という異なる地理的景観をまたがるようにして移動をおこなっていたこと、また沿岸部の諸遺跡は本拠地として利用され、内陸部の諸遺跡は一時的な野營地として利用されていたことが把握された。石器製作工程の進行が不可逆的であることを考慮にいれると、道具の準備・補充にかかわる作業がおこなわれている沿岸部の遺跡を起点として、移動はおこなわれていたと考えられる。一方の内陸部の遺跡では、道具の素材を用意する作業はおこなわれてはおらず、もちこまれた石器・石刃の範囲内で道具の使用と補充はまかなわれていたとみられる。携えてきた道具が消耗してしまうと、その補充をおこなうためには沿岸部の遺跡へ回帰せざるをえない。内陸部のどの遺跡においても道具の素材を用意する作業がおこなわれていないという現象は、内陸部の遺跡が非回帰的で占地もごく短期間であったことを示唆していよう。

このように復元される移動・居住形態は、第Ⅰ章で紹介した Bang-Andersen（1996:429-440）の「沿岸部－内陸部の相互関係（coast/inland interaction）」という仮説モデルときわめて共通するものといえる。彼は、南ノルウェーの中石器時代において、沿岸部と内陸部という異なる地理的景観をまたがるようにして〈集団〉が移動し、沿岸部・内陸部間には生業差にもとづく遺跡利用の季節差があった、という移動・居住形態の仮説モデルを提示している。検討に利用されている動・植物遺存体が限られているため、季節性に関する推定には今後の再検証が必要であるし、個別の遺跡での形成過程を考慮にいれると、利用形態についての二者択一的な理解には一部に検討の余地をのこすことになる。しかしながら、Bang-Anderson や筆者が復元した移動・居住形態の仮説モデルからは、地理的景観に応じて異なる活動を営む、という土地利用にあたっての共通した傾向をうかがうことが可能である。北海道の石刃鏃石器群の場合、移動活動が季節的周期にしたがっていたものであったのかどうかは今後検討されるべき課題であるが、少なくともここに提示した移動・居住形態の仮説モデルは、占地を転々と移動するようなパターンとは異なるだけに、移動活動のサイクルにはなんらかの規則性があったものと考えて差し支えなからう。

沿岸部の遺跡では、遺跡立地や石器組成からみて、その規模や性質は不明であるにしても、水産資源の利用がおこなわれていたことはまちがいない（加藤 1963:6）。もちろん、狩猟活動や植物性食料の利用もおこなわれていたのであろうことは、出土している石器組成からあきら

かである。一方の内陸部の遺跡では、石錘や磨石・石皿類が石器組成から欠如していることを生業活動の反映ととらえるならば、内陸部では狩猟活動によりウェットがおかれていたものと想定することが可能である。このように想定される沿岸部と内陸部での生業活動の重点の差異は、ここまで検討してきた移動活動が、たんに地形を含意するものとしての地理的景観を横断するだけでなく、生業活動と密接に関連して、異なる生態環境ゾーンの開発・利用のために実行されたものと理解されるべきことを示していよう。

（５）石器石材の入手と移動・居住形態

最後に、石器石材の入手とここまで吟味してきた移動・居住形態との関係を検討してみよう。とりわけ確認しておくべき点は、石刃鏃石器群が検出された遺跡間における石器製作作業にかかわる差異が、石器石材の原産地からの距離という条件によって説明可能であるのかどうか、についてである。

オタフク岩の石刃鏃石器群における石材利用の傾向については前章で簡単に触れた。そこでは、第一に、原石そのものではなくある程度剥離がくわえられた石核の状態では遺跡にもちこまれていること、第二に、原産地の露頭およびその近辺での原石の自然面を剥ぐような作業が予測できること、第三に、石器石材は集団間での交換等による間接的獲得ではなく、直接的な採取を想定した方が妥当であることを指摘した。

以上にあきらかとされた点とここでの到達点とをつきあわせて考えてみよう。遺跡分布を示した図 3-1 には、主要な黒曜石の原産地の位置も示してある。黒曜石原産地と沿岸部の諸遺跡とのあいだには、50 ～ 130km 前後の直線距離があることがわかる。図 3-1 をみるかぎり、石器製作作業が集約的にこなわれていたと考えられるⅠ種の遺跡が原産地近くに位置し、石器製作作業の痕跡がほとんど確認できなかったⅡ種の遺跡が原産地から離れて位置するという傾向は認められない。むしろ、置戸の原産地により近距離の川東羽田では、石器製作作業がほとんど確認できなかったのに対して、それより遠距離の豊里やオタフク岩では石器製作作業がおこなわれていた痕跡が確認されたのである。したがって、遺跡内での石器製作作業は、石器石材の原産地からの距離ではなく、遺跡の性格、この場合は移動・居住形態のなかでの位置に決定的な影響をうけているとみてよからう⁹⁾。また、第3節での検討結果によるかぎり、原産地からの距離に応じて石器製作技術が変化をみせることも、基本的にはなかったことを確認しておこう。

遠隔地からの石器石材の直接的な入手を考える場合、Binford（1979）がエスノアーケオロジーの成果から提起した「埋め込み戦略（embedded strategy）」も考慮にふくめて、以下のような状況を想定することが可能であろう。

①石器石材の採取を目的とした‘派遣隊’によって入手される。

②移動する過程で実施される生業諸活動に、石器石材の採取活動が組み込まれた状況。ただしこの状況でも、集団全体がかかわっていたのか、‘派遣隊’のような集団の一部がかかわっていたのか、には重大な差がある。

現状で把握されているデータだけでは、このうちのいずれかを決めることは難しい。ただし、遺跡内での石器製作作業の量的（集約的な石器製作作業がおこなわれていたのか否か）・質的

（石器製作技術が石器石材の原産地から離れるにしたがって変化しているのか否か）側面に、石器石材の原産地からの距離がまったく影響をあたえていないということは、上記した②の想定のうち集団全体がかかわる状況は成り立ちがたいことを示唆していよう。埋め込み戦略の利点は、石器石材の入手にかかわる労力のロスをできるだけ軽減することにあると考えられる。道具類の製作や補充を目的として、石器石材の採取活動が生業諸活動に埋め込まれていたとするならば、ほとんど原材に何も手がくわえられないまま遠隔地である沿岸部に原材がもちこまれている、という石刃鏃石器群に観察される現象は、埋め込み戦略における労力ロス軽減の観点からみて、きわめて説明しがたいものであろう。むしろ、石刃鏃石器群の場合、原産地およびその近辺で採取された原材が、そのままダイレクトに沿岸部の本拠地にもちこまれている状況を想定するほうが妥当といえよう。したがって、①のケース、もしくは②のケースのうち‘派遣隊’のような集団の一部が内陸部と沿岸部とを移動する過程で、付随的に石器石材の採取活動もおこなっていたことが想定されることになろう。

6. まとめ

ある地理的範囲内の考古学的記録から、行動連鎖のパターンを反映する傾向性を抽出するという方向性にしたがって、〈集団〉がのこした遺跡間変異（inter-site variability）を充分におさえつつ、遺跡間のつながりを把握する検討を本章ではおこなってきた。

その目的を達するため、本章の冒頭で略述したような、ある地理的景観内で視覚的に把握される〈遺跡群〉を検討対象として先見的に措定し研究するのではなく、共通性が高い石器製作技術がみられる遺跡間を対象に、石器製作工程の検討からその連関をとらえるという議論をおこなってきた。その結果、従来、一遺跡の研究から可能性が指摘されていた複数遺跡間での石器製作工程上のつながりを具体的に解明することができ、また、特定の地理的景観内の〈遺跡群〉だけを検討対象にしていたは論議が困難な、異なる地理的景観をまたがるような移動・居住形態の仮説モデルを提示することができたのである。その結果、沿岸部と内陸部という異なる地理的景観をまたがるようにして移動活動がおこなわれていたこと、沿岸部・内陸部の遺跡にはそれぞれ本拠地・野営地という性格が想定されることを指摘してきた。

しかしながら、資料の量的・質的な問題から起因する制約によって、提示した仮説モデルには未解決の課題がのこされており、〈集団〉の移動・居住形態の全体像がこれで説明づけられたというわけではない。とりわけ、移動の周期性や移動活動をおこなっていた際の集団サイズに関する問題は、それをどう実証するかをふくめて、今後のにこされた大きな課題といえる。移動ルートの問題についても具体的な言及はおこなわなかったが、内陸部のうち上川盆地などは道北部からの移動も想定できるため、道北部での資料の検出が今後必要となるであろう。

また、以上に提示した仮説モデルは、石器製作技術の遺跡間比較をおこなうために、一定量の石器が検出されている遺跡に検討の対象をしぼらざるをえなかった。そのため、わずかな石器のみが発見されている多数の遺跡の評価をおこなうことはできなかった。しかしながら、移動・居住形態の全体像を復元するためには、それらの遺跡についての位置づけを明確にし、他

遺跡との関係についても把握しておくことが重要といえよう。

次章では、とくに後者の問題に関して遺跡立地の検討からアプローチし、ここで提示した仮説モデルの補足を試みていくことにしたい。また、遺跡間変異にかかわる自然地形上の問題についても述べていくこととする。

IV 石刃鏃石器群の遺跡立地とその背景

1. はじめに

筆者は、前章において移動・居住形態の復元という観点から、第一に、北海道の石刃鏃石器群をのこした集団が沿岸部と内陸部とのあいだで移動活動（季節的なパターンをもっていた可能性がある）をおこなっていたこと、第二に、沿岸部の遺跡の一部は本拠地として、内陸部の遺跡は野営地として利用されていたであろうこと、を仮説的に復元した。その際に、遺跡立地の傾向についても若干の指摘をおこなったが、石器製作技術の比較という主旨から、検討対象にとりあげたのが8遺跡ときわめて少なかったため、限られた範囲の遺跡についてしか言及をおこなうことはできなかった。結果的に、量的にまとまった遺物・遺構がのこされていない遺跡をふくめた全体的な立地状況について、そこで議論することはできなかったのである。

北海道東部¹⁾の石刃鏃石器群の遺跡立地に関しては、筆者の前稿のほかに、藤本強（1981）や佐藤和利（1986）らも言及を試みている。両氏ともに、遺跡立地の傾向から生業活動の内容について大まかな見通しを示している。それによれば、後期旧石器時代の遺跡立地とは対照的に、石刃鏃石器群では沿岸部に大規模な遺跡がみられることから、漁労活動が生業活動のなかで重要な位置をしめていたであろうこと、が明解に把握されたのである。ただし、両氏ともにとりあげている遺跡が網羅的ではなかったため、土地利用の傾向を十分な量的裏づけをもって論議するまでにはいたらなかった。本章では、近年新たに発見されたデータを補足しつつ遺跡の網羅的な集成を試みることによって、遺跡立地の傾向をさまざまな角度から考察していくことにしたい。

遺跡立地の検討は、〈集団²⁾〉の土地利用の傾向を把握していくうえで重要な意味をもつ検討課題と考えなければならない。というのも、遺跡が所在する立地条件の共通性を探ることによって、集団が占地しようとした際の土地に対する選択条件を復元することが可能となるからである（小宮山 1992、菊地 1996 など）。それを通時的に比較していけば、大局的な生業活動の傾向を推測していくのも可能となるであろう（鈴木 1985 など）。また、遺跡の立地は、検出される遺物・遺構の分析とは異なり、比較的容易にあらゆる種別の遺跡に関して共通した視点から吟味をくわえていくことが可能である。いずれにしても、集団の行動連鎖のパターンは、綿密に発掘調査された地点だけでなく、地理的景観内にひろがる活動地点の総体の検討が、その復元の鍵となることは明記しておかねばならない。

ここで注意を要するのは、石刃鏃石器群が当地において展開していた時期と現在とでは、自然地形を構成する諸要素が大きく異なっていた可能性があることである。遺跡立地を解釈するにあたっては、当然ながら、過去の時点での自然地形と遺跡との関係をあきらかにしなければならない。したがって、遺跡立地の研究においては、たんに考古学的事象を整理するだけでは充分ではなく、地質・地理学その他の分野での自然地形史に関する研究の成果を組み込むことによって、はじめて妥当な考古学的解釈が可能になるといえよう。すくなくとも、こうしたアプローチは、2、3の指摘（沢 1974 など）を別にすれば、石刃鏃石器群の従来の研究においては、ほとんど配慮されることがなかったといってもよいのである。

なお、北海道の石刃鏃石器群は、共伴する土器型式からみて縄文時代早期中～後葉に併行することが指摘されている（沢 1968、佐藤 1983）。一方、放射性炭素年代測定法や黒曜石水和層年代測定法などでは、上記の編年観と整合的な 7,600yrs BP ～ 7,100yrs BP のあいだにおさまる測定値が各遺跡で提示されている³⁾。したがって、これから自然地形に関する検討をおこなっていく際には、地質・地理学的データがまとまって提示されている 7,500yrs BP 前後の段階について検討していくことにしたい。

2. 石刃鏃石器群の遺跡立地

（1）北海道東部の地形の概要

最初に、北海道東部の地形について概観しておこう（図 4-1）。

北海道の中央部には、二列の山地群が南北に帯状に分布する。西側の山地群は北から宗谷丘陵・天塩山地・夕張山地、東側の山地群は北から北見山地・石狩山地・日高山脈である。その山地群のあいだには中央凹地帯として北から南に頓別平野、名寄盆地、上川盆地、富良野盆地が分布する。そのうち、北見山地を流れる河川には、頓別川、幌別川、幌内川、雄武川、興部川、渚滑川、湧別川、常呂川、網走川などがあり、いずれも北東に流下し、流域には谷底平野や河岸段丘がひろがる。そして、これらの河川が流れこむオホーツク海の沿岸部には海岸段丘が分布している。

北見・石狩山地と接するようにして北海道北東部から中央部にかけて、東部火山地域とよばれる知床火山群、屈斜路・阿寒火山群、然別火山群、大雪山火山群が分布する。そのうち大雪山火山群の南東には造盆地運動をうけて形成された十勝平野があり、平野を貫流する十勝川流域沿いには河岸段丘や沖積低地がひろがっている。平野内には特徴的に扇状地形がみられる。十勝平野の東には白糠丘陵・鶴居丘陵がちなり、さらにその東には、根釧台地と総称される標高 200 m 以下の広大な台地がひろがっている。根釧台地内には段丘・沖積低地が認められるが、いずれも起伏の少ない地形を呈している。根釧台地のなかでも釧路市や標茶町、鶴居村にかけての一带は、釧路平野と呼ばれる場合がある。

（2）遺跡の分布

こうした地形状況のなかで、石刃鏃石器群の遺跡がどのように分布しているのかを把握する

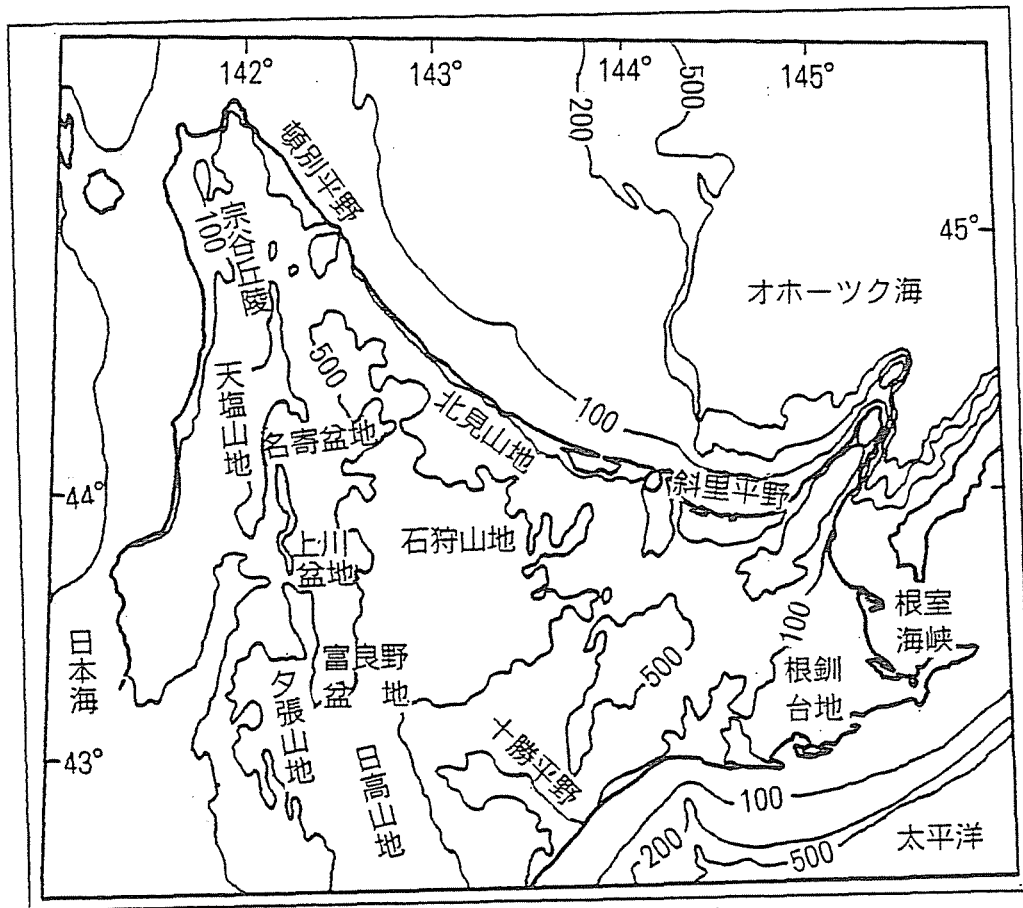


図 4-1 北海道東部の地形

ために、遺跡分布図（図 4-2）を示す。図 4-2 の作成にあたっては、北海道東部で発見されている石刃鏃石器群の遺跡を網羅的に集成する必要がある。そこで、本章の末尾の付表に示したような集成をおこなうことになった。

北海道内の石刃鏃石器群の集成は、すでに佐藤訓敏（1983）による試みがあり⁴⁾、今回はその後の発掘調査の進展や、筆者らがここ数年道内各地で断続的に実施している分布調査によってえられたデータをくわえることにした。佐藤和利（1986）は、石刃鏃石器群の遺跡立地を比較分析する際に、石刃鏃の点数を量的に検討するという見地から、石刃鏃が検出されていない遺跡は原則的に検討対象から除外している。しかし本稿では、石刃鏃石器群が発見されている遺跡を網羅的に検討するという目的から、石刃鏃石器群の一般的な石器組成を構成⁵⁾することになる石刃鏃以外の特徴的な石器（彫器や搔器）、浦幌式土器等が発見されている遺跡についても検討対象にとりあげ、最終的に 110 の遺跡をあつかうこととした⁶⁾。図 4-2 は付表で集成した遺跡の全体の分布を図示している。

概観した地形区分にしたがうならば、遺跡は平野もしくは台地とよばれている地域、あるいは北見山地からオホーツク海へ流下する河川沿いの河岸段丘とオホーツク海沿いにひろがる海岸段丘に密に分布していることがわかる。ついで多くの分布をみせているのが、中央凹地帯を構成するいくつかの盆地内である。山地群や火山地域がひろがっている一帯には、遺跡はほとんど分布していない。

以上によって、大局的な遺跡の分布状況をとらえることができたが、より詳細な立地のあり方について検討するために、次に立地に関する検討項目を設定して議論をすすめていきたい。

（3）遺跡立地の傾向

付表に示した遺跡立地データのなかの標高や比高、水系の記載にあたっては、各報告書を参照したほか、北海道教育委員会が所蔵している北海道埋蔵文化財包蔵地調査カードも参考にした。また、地形区分については、瀬川秀良（1974）による分類を参照して記載をおこなった。記載項目としては、①標高、②比高、③地形、④水系をあげた。このうち水系とは、現況として遺跡が面しているのが海・河川・湖沼のいずれであるのかを示している。いうまでもなく、この水系に関しては、石刃鏃石器群がのこされた時期の立地状況と現況とは大きな異なりが生じている可能性がある。この点については、当該期の自然地形、とりわけ旧海岸線の位置の検討をおこなう次章において再考してみたい。

以下では、項目ごとの傾向を検討していく。

①標高 標高をみると、約 40 % の遺跡が標高 20 m 以内の比較的低標高の地域に集中しているが、わずかながらまばらに 400 m 前後まで遺跡が途切れることなく立地していることがわかる。なかには愛山溪登山道（氏江 1993）のように 1,600 m という突出した標高に立地する事例もみられるが、きわめて特異な状況を示していると考えてよかろう。付表を詳細にみると、0 ～ 20 m の標高の遺跡がオホーツク海沿岸・釧路平野・十勝平野・根室海峡沿岸に、30 ～ 60 m の遺跡が網走湖岸・知床半島南岸に、90 ～ 130 m の遺跡が北見盆地・名寄盆地に、130 ～ 200 m の遺跡が上川盆地・名寄川流域・天塩川上流域に、230 ～ 400 m の遺跡が常呂川上流

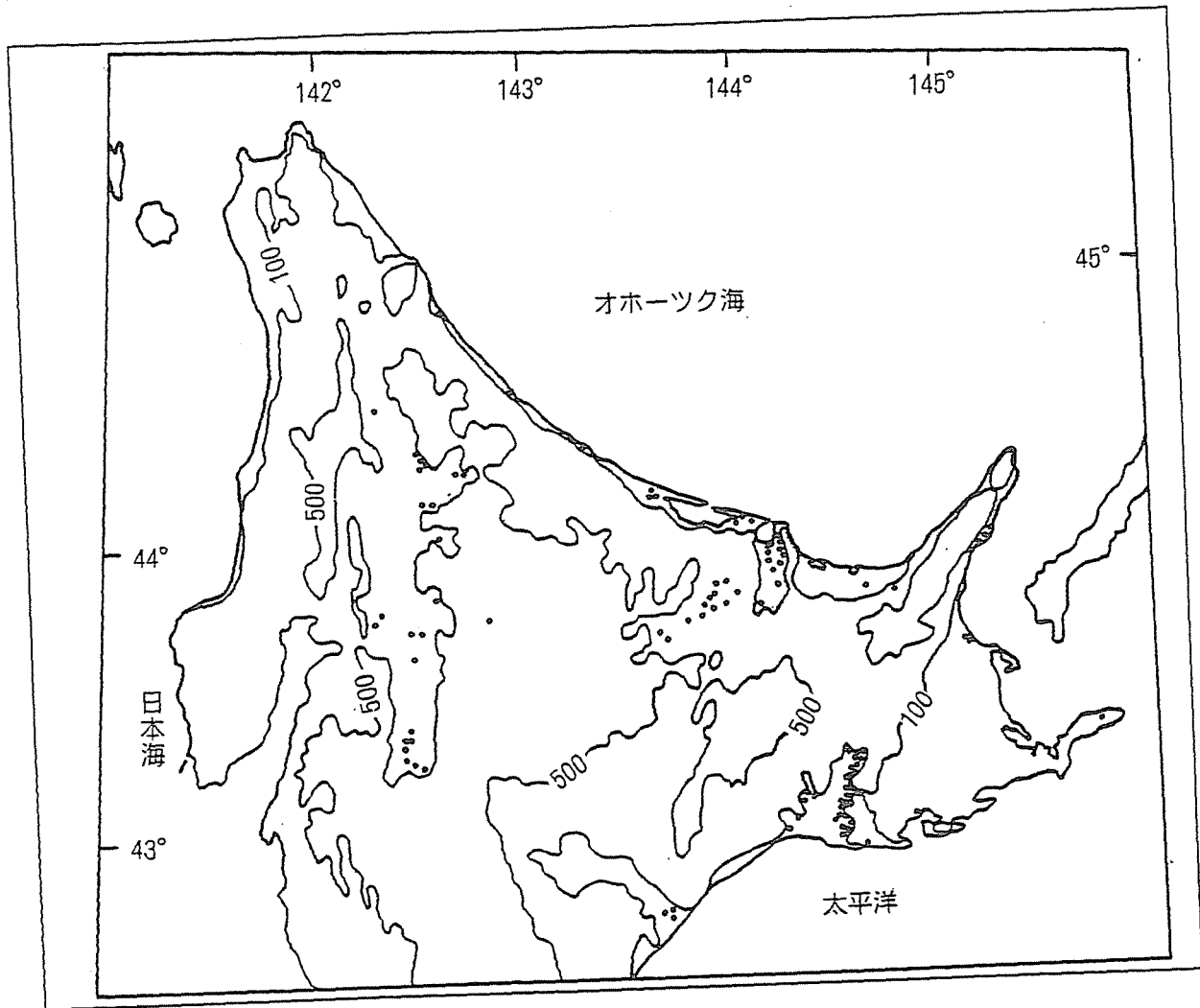


図 4-2 遺跡の分布

域・富良野盆地・石狩川上流域に、というように地域に応じた標高のまとまりを認めることができる。

標高をもとにみてみると、0～40 m前後の標高を示す海岸・平野地域の遺跡と、それ以上の標高が認められる内陸盆地・山地の遺跡とに大きく二分することができよう。

②比高 比高をみてみると、標高が0～20 mの海岸・平野地域の遺跡は、一様に15 m以下というように比高差が小さい。それに対して、内陸盆地の河川中・上流域に立地する遺跡には、すでに杉浦重信（1989:57）が富良野盆地の事例をとりあげて指摘しているように、20～60 mという相対的に比高差が大きい遺跡と、5 m以下のきわめて比高差の小さい遺跡とがある。前者の典型例としては、富良野市の東山遺跡（比高差36 m）や旭川市の旭が丘遺跡（同22 m）、後者の典型例としては富良野市の西達布2遺跡（同4 m）・鳥沼遺跡（同3 m）をあげることができる。

③地形 地形では、段丘（海岸・河岸）に立地するのが圧倒的に多く、丘陵上に立地する遺跡は相対的に少ない。海岸・平野地域ではおもに段丘に遺跡が立地するが、内陸盆地では段丘とともに丘陵にも遺跡が立地する傾向がみられる。ただし、丘陵に立地するといっても、いずれも河川の流路に近い地形変換点の縁辺に立地しており、河川に流れ込む沢の源流部付近に立地するいくつかの遺跡をのぞくと、河川の流路から離れた地点に立地する遺跡は認められない。この傾向は段丘に関しても同様である。微地形に着目してみると、海岸・平野地域の遺跡のほとんどは段丘上の平坦な地点に立地する傾向が強いようであるが、内陸盆地の丘陵に立地する遺跡のなかには、川東羽田遺跡のように丘陵の斜面上に立地する場合が認められるのは注目してよい。

特殊な立地をみせる遺跡としては、山地に立地する遺跡や河川の氾濫原に立地する遺跡があげられる。また、河川との比高差がある崖面に開口する洞穴にも遺跡がいくつかのこされている。ただし、それらでは石刃鏃が単発でみつかっただけであり、長期間の居住活動をおこなっていた痕跡はのこされていない。

④水系 遺跡が面している水系には、海・河川・湖沼のいずれもが認められる。海岸に近い平野地域では、比較的規模の大きい河川（釧路川や網走川など）沿いに遺跡が立地しているのに対して、内陸盆地では、比較的小規模な河川（西達布川や布礼別川、訓子府川など）沿いに立地する場合から、大規模な河川（石狩川や天塩川など）沿いに立地する場合までさまざまである。とくに小規模な河川沿いに分布するということはない。

遺跡の面する主水系が海・河川・湖沼のいずれでも、主水系に河川や小規模な沢が流れ込むことによって形成される合流地点近くに、約半数の遺跡が立地する傾向が認められる。合流地点以外でも、主水系に舌状に張り出す地形に遺跡が立地する場合が多いようである。

（４）遺跡種別とその立地

石刃鏃石器群が検出された遺跡を網羅的にとりあげ、立地の傾向について検討をくわえてきた。ただし、ここで注意を要するのは、表面採集で石器が一点のみ確認されている遺跡から、何千点という石器・土器が検出されている遺跡までが、前掲の集成には同列にふくまれていることである。そこで前章でおこなった遺跡の種別設定をふまえて、遺跡間での差異を摘出して

みることにしよう。

前章では、①石器製作（とりわけ剥片剥離）作業がおこなわれていたか否か、②竪穴住居址の有無、の二点を主要な手がかりにして遺跡の種別を設定した。すなわち、石器製作作業が集約的におこなわれ竪穴住居址がのこされているⅠ種の遺跡として、豊里遺跡・湧別市川遺跡・オタフク岩遺跡第Ⅱ地点・トコロ貝塚・共栄B遺跡を、一方、石器製作作業がほとんどおこなわれておらず、竪穴住居址も検出されていないⅡ種の遺跡として、西達布2遺跡・東山遺跡・川東羽田遺跡をあげた。前者の遺跡からは、石刃鏃石器群を構成する基本的な石器組成が揃って検出されているのに対して、後者の遺跡の石器組成は、そのうちのいくつかの石器（石錘・敲石・磨石・石皿・凹石・石匙・石篋など）が欠落しているのも特徴である。そして、Ⅰ種の遺跡に関しては本拠地（base camp）、Ⅱ種の遺跡に関しては野营地（temporary camp）という性格が想定できることもあわせて指摘した。

ここで注意を喚起しておきたいのは、本稿でさきに集成した諸遺跡のなかには、発掘調査によってほぼ全容が把握されている遺跡以外にも、表面・露頭面採集によって遺跡の所在が確認されているだけのものもふくまれていることである。したがって、遺跡種別の判別のうえで重要な指標となる遺構の有無の確認や石器製作作業の内容の評価を、すべての遺跡で同レベルにおこなうことができないのは明白である。そこで、ここでは発掘資料によって遺跡の概要が把握されている事例を中心に議論をすすめていきたい。どの遺跡で発掘調査がおこなわれているのかについては、付表を参照していただきたい。

発掘調査はおこなわれているものの報告書が公表されていないため、明示的な根拠を示すことはできないが、概報等の記載を勘案するかぎり、東釧路遺跡第Ⅱ地点（岩崎他 1980）・網井遺跡第2地点（豊原 1981）・ニッ山遺跡第1地点（沢 1968）・ニッ山遺跡第3地点（豊原 1985）・新吉野台遺跡（名取 1950）は、Ⅰ種の遺跡に該当する条件を満たしているものと考えてよい。前章でⅠ種とした遺跡と、これらの遺跡をあわせて考えてみると、海岸・平野地域に分布する段丘の縁辺上の低標高な地点に、遺跡が立地する傾向が共通して認められるのがわかる。ニッ山遺跡第3地点や現海岸線を眼下におく崖上に立地しているオタフク岩遺跡第Ⅱ地点をのぞいて、いずれの遺跡も約 15 m 以下というように比高差が小さいのも特徴的である。以上から、Ⅰ種に属する遺跡のあいだでは、遺跡立地の特徴を多く共有していることがあきらかとなった。なお、水系については遺跡間でバリエーションが認められるが、この点は次章で再考してみたい。

なお、上記した遺跡以外にも鶴居村の下幌呂1遺跡やアシベツ川右岸遺跡（沢他 1987）などは、Ⅰ種の遺跡に属する可能性が高いが、表面採集でしか遺跡の概要が把握されていないため、詳細な検討をくわえることはできない。ただし、これらの遺跡も低標高の段丘縁辺に立地している点からみて、Ⅰ種とした諸遺跡と立地上の特徴を共有している。

一方、上記した以外の発掘調査がおこなわれている遺跡は、Ⅱ種に区分するのが妥当であろう。その遺跡立地の特徴をみると、標高・比高・地形・水系のいずれにも多様性がみられる。それらの遺跡は、海岸・平野地域と内陸盆地の両方に分布が認められるため、必然的にさまざまな標高を示すことになる。内陸盆地に分布する遺跡の比高に関しては、さきに指摘したように、比高差が小さい場合（5 m 以下）と比高差の大きい場合（20 ～ 60 m）とが認められ

る。また、内陸盆地では段丘以外に丘陵・山地・河川の氾濫原といった地形に、さらには洞穴にも遺跡が確認されているのが、付表をみるとよくわかる。Ⅱ種とした遺跡は、河川沿いに立地する場合が多く認められるが、河川の規模をみると、規模が大きな河川沿いから小さな河川沿いに立地する場合まで、さまざまなバリエーションを認めることができる。

以上の概観から、発掘調査がおこなわれている遺跡にかぎっても、Ⅰ種とⅡ種の遺跡とでは立地の傾向に明瞭な差が認められることがわかった。すなわち、Ⅰ種の遺跡間では立地上の特徴を多く共有しているのに対して、Ⅱ種の遺跡間では標高・比高・地形・水系の各項目について共通性が認められなかったのである。図式的に説明すれば、Ⅰ種の遺跡は比較的共通した特徴をもつ地点にのこされているのに対して、Ⅱ種の遺跡はさまざまな立地上の特徴をもつ地点にのこされている、といえるであろう。

ただし、発掘調査されたⅡ種の遺跡のなかでも、発見される遺物量には遺跡間で顕著な差をみいだすことができる。たとえば、富良野市の西達布2遺跡や東山遺跡、釧路市の桜ヶ岡遺跡第2地点や東釧路遺跡第3地点のように、石刃鏃に彫器・搔器・削器・揉錐器・石鏃・磨製石斧・石鋸・砥石・少量の土器などが伴って発見される場合がある一方で、常呂町トコロチャシ南尾根遺跡や根室市別当賀一番沢川遺跡、富良野市扇瀬公園A遺跡のように、石刃鏃だけが単発で発見される場合も認められる。発掘調査されている42遺跡のなかで約25の遺跡は、石刃鏃のみが発見されているだけの後者の場合に属する。したがって、前者の遺跡と同様に、後者の遺跡も量的に安定して存在しているとみてまちがいなからう。

ここで強調しておきたいのは、Ⅱ種の遺跡のなかにこうした区分を導入したとしても、さきにⅡ種の遺跡立地の傾向として指摘した事柄は、区分されたどちらの場合にも認められる、という点である。すなわち、石刃鏃だけが単発で発見されている遺跡のみならず、石刃鏃以外の石器（彫器や搔器など）が伴って発見される遺跡までもが、遺跡数は相対的に少ないながらも、内陸盆地から海岸・平野地域にまで分布がおよぶことにより、標高や比高、地形、水系に関して遺跡間でバリエーションが認められるのである。ここでは、Ⅱ種の遺跡が出土遺物の組成や量を指標としてさらに細分が可能であること、しかしながら、指摘した立地状況は区分された両者いずれにも等しくみられることを確認しておきたい。

（5）小結

ここまでの検討の結果、Ⅰ種とした遺跡では立地上の特徴を遺跡間が多く共有しているのに対し、Ⅱ種とした遺跡では立地上の特徴に関して遺跡間で変異が著しくみられることがわかった。こうした状況は、何を意味しているのであろうか。

Ⅰ種の遺跡が居住活動の拠点としての本拠地の性格をもっていたであろうことは、前章すでに指摘した通りである。土地利用にあたっての地点選択に関して、そこでおこなわれる活動の内容がその重要な規定条件になっていたと仮定するならば、Ⅰ種の遺跡が立地上の特徴を共有しているということは、いずれの遺跡においても共通した活動が志向されていたことを物語っていよう。すなわち、Ⅰ種とした遺跡は、大局的にはいずれも共通した性格をもっていた可能性が高いこと、本拠地となる地点が選択される際には、同じような立地状況を示す地点が地理的景観内のなかから選ばれていたこと、が示唆されるのである。

逆にⅡ種の遺跡は、地理的景観内のさまざまな地点が選択されているのが特色といえるだろう。Ⅰ種の遺跡について指摘した脈絡からいえば、Ⅱ種の遺跡のなかには、さまざまな性格をもっている遺跡がふくまれていることになる。前章では、Ⅱ種の遺跡の性格を野営地と指摘したが、総体としてみれば妥当ではあるものの、さまざまな個別的活動が各地点で営まれていたとして、Ⅱ種の遺跡全般の性格をとらえ直すことが必要であろう。それぞれの遺跡において、たとえば狩猟の解体場、見張り場所、移動時の滞在地、というような個別的活動のいずれがおこなわれていたのかを特定していくことは、現時点では難しいといってよい。しかしながら、前述した遺跡立地の状況からは、地理的景観内に散在する各種の資源利用のために、本拠地からの派生的な行動の一環としてⅡ種の遺跡が各地点にのこされたのではないか、という解釈をおこなうことが可能になるであろう。

前章で示した移動居住形態の仮説モデルに、本章での遺跡立地の検討結果を重ねてみると、沿岸部の共通した立地状況を示す地点に本拠地がのこされ、沿岸部や内陸部での多角的な資源利用のために、さまざまな立地状況を示す地点に本拠地からの派生的な活動の結果として、総体としての野営地がのこされたと考えられる。

以上のような推定結果と第Ⅲ章での検討成果をふまえて、石刃鍬石器群をのこした〈集団〉の移動・居住形態の全体像を図示してみることにしよう（図 4-3）。ポイントは以下のようなところにある。

- ①沿岸部の一部の遺跡（Ⅰ種）は、本拠地として利用されていた。共通した活動がそれぞれの遺跡で実施されていた可能性が高い。
- ②内陸部の遺跡（Ⅱ種）は、沿岸部から移動してきた結果のこされたものであり、野営地として利用されていた。
- ③沿岸部に分布するⅡ種の遺跡は、同じ沿岸部に分布するⅠ種の遺跡からの移動によってのこされたものであり、野営地として利用されていた可能性が高い。
- ④沿岸部と内陸部の双方に分布するⅡ種の遺跡では、さまざまな活動が実施されていた可能性が高い。
- ⑤内陸部のⅡ種の遺跡それぞれが、ダイレクトにⅠ種の遺跡からの移動によってのこされたのか、別のⅡ種の遺跡を経由した移動の結果のこされたものかどうかは不明である。
- ⑥石器石材の組成の中心となっている黒耀石の採取活動は、沿岸部からの直接的な‘派遣隊’によって採取された、もしくは内陸部への移動活動の際に付随的に採取されたかのどちらかの可能性が高い。

3. 完新世初頭における北海道東部の旧海岸線

（1）旧海岸線の位置をめぐって

本節では、石刃鍬石器群の遺跡立地を考察していくのに必要な当該期の自然地形に関して、とりわけ旧海岸線の位置をめぐろの問題を検討してみたい。自然地形を構成する諸要素のなかで、当該期から現在にいたるまでの過程でもっとも変化しているのが、旧海岸線の位置ではないか

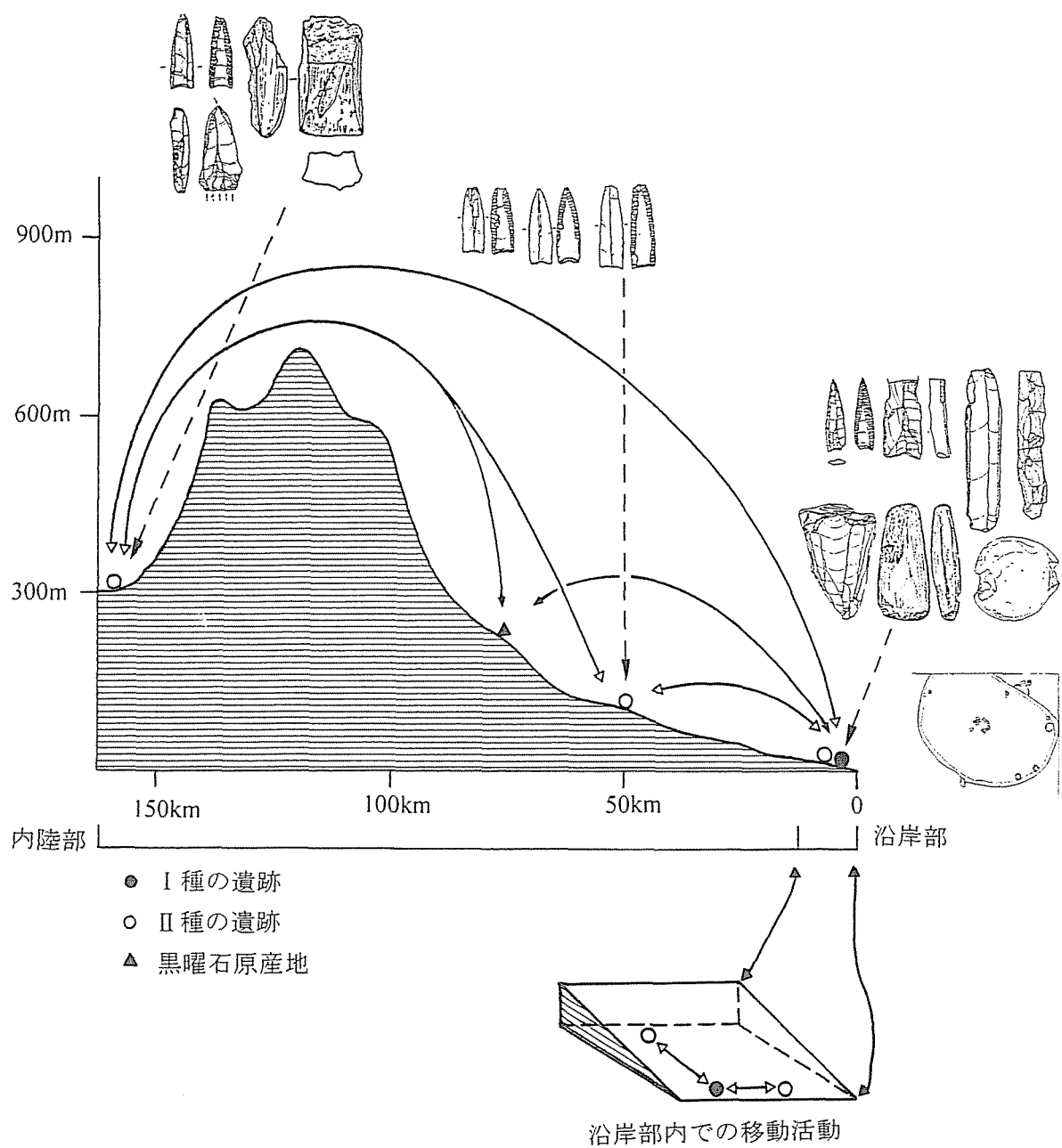


図 4-3 北海道の石刃鍬石器群をのこした〈集団〉の移動・居住形態仮説モデル

と予測されるからである。なお、以下では説明の便宜上、「旧海岸線」とは、石刃礫石器群が北海道東部に展開していた時期の海岸線を指す用語として使用していくことにする。

いうまでもなく、更新世から完新世初頭にかけては全地球的に海水準が上昇し、各地の海岸線の位置はそれに応じてさまざまな変化をみせていたと考えられている。最終氷期最寒冷期である 18,000yrs BP 前後から、縄文海進最盛期の 6,000 ~ 5,500yrs BP にいたるまで海水準は上昇傾向を示しているが、最近の研究によれば、8,000yrs BP を境にしてそれ以前の上昇量はやや緩やかになる傾向があることが指摘されている（斉藤ほか 1995）。なお注意を喚起しておきたいのは、更新世のダンスガード・オシュガー・サイクル（多田 1997）の変調であるボンドサイクルが、完新世にも存在していた可能性が指摘されていることである（福沢 1998:359）。このボンドサイクルの詳細な解明は、今後の研究の進展に待つところが大きい。海岸線の位置をめぐる議論にどのような影響をあたえるのかについて、これから注視していかなければならない問題のひとつである。

更新世終末から完新世初頭にかけての時期を対象とする研究においては、とりわけ遺跡の立地や分布の傾向から行動連鎖のパターンに関する妥当な推定をおこなっていくためには、海岸線の位置を確定することが重要な意味をもつであろうことはまちがいない。北海道の石刃礫石器群の場合、冒頭でもふれたように時間的には縄文時代早期中～後葉に併行するものと考えられており、一般的には海進ピーク時からやや先行する時期に位置づけられる。したがって、どの地域において海進がどのような推移で進行していたのか、が遺跡立地の解釈にからんで重要な問題に発展すると思われる。

日本列島周辺の海水準の変化に関しては、第四紀学のなかで膨大な研究の蓄積がみられる。それらの最近の研究動向をみると、地域的な海水準変動の差異が詳細に解明されるべきである、という考えが重視されるようになってきている。地域的な海水準変動の要因としては、局地的な地殻の隆起や沈降の存在が介在していた可能性が高い（遠藤・小杉 1990、海津 1994、中田他 1994 など）。北海道東部といった範囲の旧海岸線に関しても、その範囲のなかを一律的に理解するのではなく、そのなかのより細かな地域ごとの差異に注意をはらわねばならない、といえるだろう。考古学的事象の解釈にとっては、そうしたローカルな現象により着目する必要があるのである（van Andel 1989）。そのため次では、石刃礫石器群が実際に展開していた時期の旧海岸線の位置について、北海道東部のなかにいくつかの地域を設定し、そこでの復元作業から全体のパターンを通観してみたい。

（２）各地域における旧海岸線

海岸線の位置決定には、ボーリング試料の収集や露頭の観察によって把握される海成層の分布が重要な基準となる。海成層であるか否かを判定するには、対象となっている層準から産出する海棲生物の化石の存在が有力な指標となる。そのなかでも貝殻は、微化石と比較すると移動しにくく、肉眼でも確認が可能で、なおかつ水深の推定をおこなうことも可能である、という特性をあわせもっている（下山 1994）。多くの分析で貝化石が利用されているのはこうした理由による。さらに、海成層の分布と微地形の観察をつきあわせることによって、かつての海岸線を復元することが可能になる。

石刃鍬石器群の場合、北海道東部に展開した時期は海進ピーク時よりもやや時間的に先行することから、海進の開始からピーク時にいたるまでの推移が十分に復元されている地域を中心に議論をすすめていくことが得策である。そこで、石刃鍬石器群に属する遺跡が密集して発見され、なおかつ旧海岸線の位置の推移が復元されている地域を検討対象にとりあげてみたい。ここでは、①オホーツク海沿岸のサロマ湖から網走湖にかけて（A地域）、②知床半島（B地域）、③根室海峡沿岸（C地域）、④釧路平野（D地域）、の4地域を対象に設定して概観する。

最初にA地域における旧海岸線の位置であるが、この地域については大嶋和雄ら（1996）が完新世初頭からの旧海岸線の位置の推移を復元している。それによれば、サロマ湖を中心とした地域でのボーリング試料や周辺地形、および内湾性堆積物と考えられるマガキを産出する粘土層の堆積状況などの検討から、完新世初頭には溺れ谷に海水が進入してきた結果、現在の常呂平野をふくむいくつかの内湾が形成され、現海岸線よりもかなり内陸の奥深くまで海岸線が進入していたことをあきらかにしている。

ここで指摘されている現象は、常呂川下流域における常呂平野の形成過程を、微地形や沖積層堆積物（とくに内湾あるいは溺れ谷の底に堆積したと考えられる泥質堆積物）の検討からあきらかにした海津正倫（1983）の研究結果とも整合的である。海津正倫の復元成果をみると、常呂平野では10,000yrs BP頃から海が内陸へ進入をはじめ、石刃鍬石器群が当地で展開していた時期には常呂平野に内湾が形成されていたことが指摘されている。こうした地形の形成過程に対する想定を裏づけるようなデータとしては、常呂平野内で採取された試料から、坂口豊ら（Sakaguchi *et al.* 1985）がマガキ・フジツボを採取した層の直下から約9,200yrs BPの年代値を、浜野庸子ら（Hamano *et al.* 1985）が海生珪藻の産出する層準から約8,900yrs BPの年代値を、それぞれ放射性炭素年代測定法によって報告しているのが注目されよう。

網走湖周辺に関しては、前田保夫ら（1994）が網走湖大曲で収集したボーリング試料からえられたマガキの年代を測定した結果、8,000yrs BPには現在の網走湖にも海水が流入していたことをあきらかにしている。また、愛宕誠治（1998）は、網走川が美幌川と合流し網走湖にそそぐまでの地域を網走川下流低地とよび、この地域の沖積層の形成過程について検討を試みている。それによれば、すくなくとも7,300yrs BPには網走川低地の中中部（女満別町内部）まで海岸線がおよんでいたことが、中部泥層（MM層）とよばれる海津（1983:5）が海進の痕跡と判断した層の分布によってあきらかにされている。

以上の諸見解をあわせて考慮にいれると、サロマ湖から常呂平野、網走湖にかけてのオホーツク海沿岸では⁷⁾、現在沖積層が分布する地域を中心にして、いくつかの内湾が形成されるような同様の海進状況がみられたと考えてよからう。大嶋ら（前掲）の復元をもとにした復元図を示す⁸⁾（図4-4）。

次にB地域とC地域の両者をみていこう。知床半島（B地域）の沿岸沿いの海底地形をみるとあきらかなように（図4-1）、大陸棚が極端に狭く、水深が1,000 mに達する海底谷が沿岸近くまで迫っている。そのため、大嶋ら（1994）は、完新世初頭から現在にいたるまで海岸線の位置はほとんど変化していなかったと考えている。逆にC地域では、野付崎や根室半島から国後島にかけての一带に広く-10 mから-20 m前後の大陸棚が発達しており、大嶋ら（前掲）は、

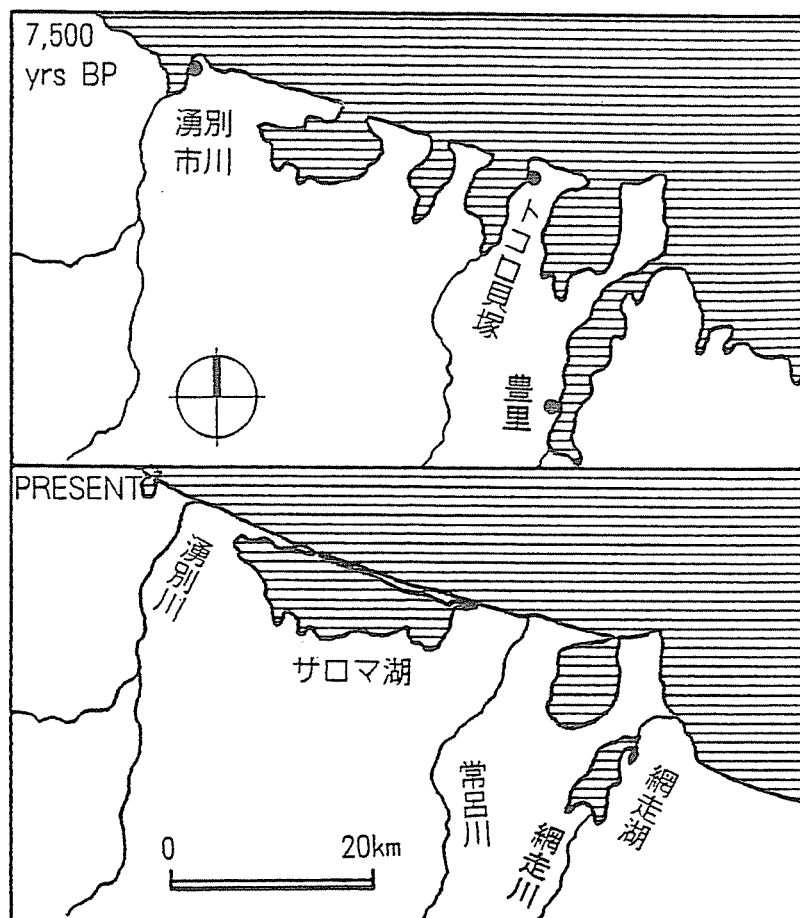


図 4-4 A地域の海岸線

そうした海底地形に野付崎周辺のボーリング試料の分析をつきあわせることによって、当該地域は当時 -10 m前後の海水準になっていて、野付崎から国後島にかけては陸地化していたことを報告している。野付崎の形成と根室海峡の成立は、5,500yrs BP の縄文海進最盛期以降のことと考えられている。大嶋らの復元をもとに旧海岸線の復元図を示す（図 4-5）。

D 地域の釧路平野については、岡崎由夫（1960a、1960b、1974）が完新世初頭から海進ピーク時にかけての海岸線の変化に関して、微地形や貝化石、縄文時代早・前期の貝塚の検討をもとに復元を試みている。それによれば、10,000 yrs B.P.から海岸線が内陸に進入をはじめ、7,000 yrs BP から 6,000yrs BP にかけての海進ピーク時には「古釧路湾」が形成されていたことから、すくなくとも、石刃鏃石器群が当地において展開していた時期には、現在釧路低地とよばれている地域のほとんどは海面下に没していたこととにるのである。当時の海域は、東は別保川に沿って別保市街地近くまで、北は達古部沼や塘路湖、シラルトロ湖の北方にまで達していたと考えられる（岡崎 1974）。岡崎の復元を参考にして旧海岸線の復元図を示す（図 4-6）。

（３）旧海岸線の位置の類型

以上、北海道東部のなかに A から D までの 4 地域を設定して、旧海岸線の位置の概観をおこなってきた。北海道東部における当該期の旧海岸線の状況を、現時点の海岸線の位置と対比させて通観してみると、a から c までの 3 類型を設定することができる。

類型 a：現海岸線よりも内陸奥深くにまで部分的に内湾が形成されて海岸線が進入している地域。A（オホーツク海沿岸）と D（釧路平野）の二地域が該当する。

類型 b：現海岸線と旧海岸線の位置がほとんどかわっていない地域。B 地域（知床半島沿岸）が該当する。

類型 c：現海岸線近くの大陸棚は陸地化していて、現在よりも沖合いに旧海岸線が存在していたと考えられている地域。C 地域（根室海峡）が該当する。

それぞれの地域での旧海岸線の位置は、地形観察および露頭面・ボーリング試料での層相の検討、さらに海成沖積層から産出する貝化石などの解析によって復元されたものである。ここで把握された地域間における旧海岸線の位置の差異がどのような理由によって生じたのかについては、地質学・地理学のあいだでもまだ詳細な解答が提出されているわけではないため、ここで結論づけるような説明をおこなうことは保留しておきたい。ただし、最近の海水準変動の研究状況を参照にいれるならば（太田他 1990、中田他 1994 など）、たとえばハイドロアイススタシーにしたがった地殻の隆起量の差異が、それに大きくかかわっていたのではないかと予測される。

いずれにしても、石刃鏃石器群が北海道東部に展開していた時期である 7,500yrs BP の旧海岸線は、地域に応じてその位置に明瞭な差異が認められ、内湾が形成されるような海進状況を見せる地域もあれば、逆に現在の沿岸の大陸棚が陸地化しているような地域もあることがわかった。こうした旧海岸線の状況は、当然ながら遺跡立地や分布の解釈に何らかの影響をあたえるものと思われる。

（４）遺跡立地との関係

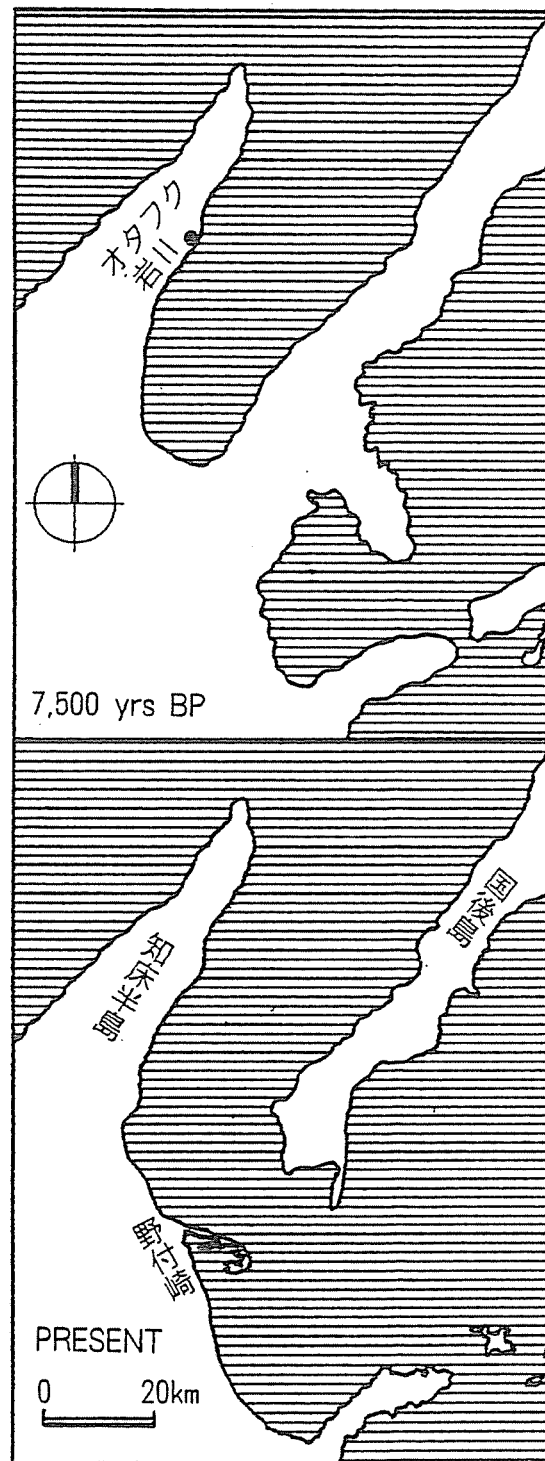


図 4-5 B・C 地域の海岸線

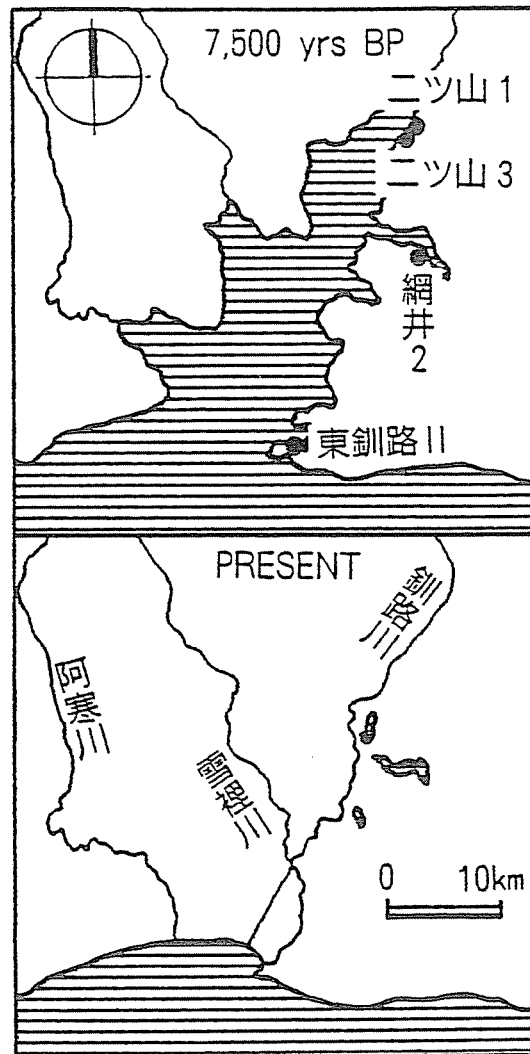


図 4-6 D 地域の海岸線

内湾が形成されていたと考えられる類型 a に該当する A 地域（オホーツク海沿岸のサロマ湖から網走湖にかけての地域）・D 地域（釧路平野）では、I 種にふくめられる遺跡は、現在の海岸線に直接的に面して立地しているわけではない。しかしながら、図 4-4 と図 4-6 に示したように、I 種に属する A 地域の湧別市川遺跡・トロコ貝塚・豊里遺跡、D 地域の東釧路遺跡第 II 地点・網井遺跡第 2 地点・ニッ山遺跡第 1 地点・ニッ山遺跡第 3 地点らは、旧海岸線の復元結果を参照にいれるならば、当時ひろがっていた内湾に面して立地していたと考えてよからう。釧路地域の状況に関しては、すでに沢四郎（1974:170）が推定している通りである。

現海岸線と旧海岸線の位置がほとんど変化していない類型 b にあてはまる B 地域（知床半島沿岸）はよいとして、つぎに問題となるのが類型 c にあてはまる C 地域（根室海峡沿岸）であろう。C 地域では、野付崎から国後島にかけての浅い大陸棚が当時は陸地化していて、現海岸線よりも沖合いに旧海岸線があったと考えられている（図 4-5）。ここで遺跡分布に関して注目すべき点は、C 地域において I 種の遺跡が確認されていないことであろう。当該地域の標津町の伊茶仁カリカリウス遺跡や古道第 2 堅穴群遺跡、根室市のトーサムボロ遺跡では、いずれも石刃鍬石器群にふくめられる資料が発掘調査によって検出されているものの、すべて石刃鍬が単発的にみつかっているのみであり、石刃や石刃核、剥片・碎片がまとまって検出されているわけではない。したがって、それらの遺跡を I 種にふくめて考えることはできないのである。

C 地域に I 種の遺跡がみられないのは、他地域で I 種の遺跡が海岸線に面して立地する傾向があることを前提とするならば、C 地域における当時の沿岸域が水没してしまったため、沿岸域に立地していた I 種の遺跡もそれとともに水没してしまった、という可能性を支持するのではなかろうか。もちろんこれは、現時点で確認されている状況から推定したものだけに、将来的な検証作業の積み重ねが必要なのは認めておかねばならない。ただし、比高差 30 m 前後の切り立った崖が連続的に分布している B 地域にではなく、ゆるやかな海浜がひろがっていたとみられる A・D 地域に多くの I 種の遺跡が分布していることから考えて、同様の海浜状況が形成されていたと考えられる水没した C 地域の大陸棚にも、I 種の遺跡が遺存している可能性は高いと考えられよう。

ここまでの検討結果をまとめると以下ようになる。

- ① A 地域と D 地域では、当時海進の結果いくつかの内湾が形成されており、現在はやや内陸に立地している遺跡でも、かつては旧海岸線に面して立地していたことがあきらかになった。
- ② C 地域では、野付崎や根室半島から国後島にかけての大陸棚が当時は陸地化していたが、その後の海進の結果によって当時の沿岸域が水没してしまったため、I 種の遺跡もそれとともに水没してしまった可能性がある。C 地域において現在 I 種の遺跡が確認されていないのは、このことを反映しているのかもしれない。

（5）小結

本拠地の性格をもっていたと想定される I 種の遺跡は、いずれも旧海岸線に面して立地していることがあきらかにされた⁹⁾。とりわけ注目すべきは、ほとんどの遺跡が海進によって形成された内湾に面していることである。内湾での水産資源を確保することが、本拠地と想定される I 種の遺跡を中心になされていたであろうことは想像に難くない。さきにミクロな立地状況

の検討から I 種の遺跡間での立地上の共通性を指摘したが、内湾に面して立地するという比較的マクロな立地状況に関しても、I 種の遺跡間は強い共通性を示すことがわかったのである。

4. 遺跡間変異の問題と旧海岸線

ここまで、遺跡立地の解釈に重要な関連をもつことになる自然地形、とりわけ旧海岸線の位置をめぐる問題について検討をくわえてきた。その結果、旧海岸線の位置次第では、遺跡の分布や立地に関する解釈に大きな異なりが生じてしまう可能性を指摘してきた¹⁰⁾。すくなくとも、類型 c のような状況を示す地域においては、現時点で確認されている遺跡の範囲内だけで集団の行動パターンを復元することは、問題が多いといわざるをえない。

このように、旧海岸線の位置が考古学的な解釈に重大な影響をあたえていることが実際の検討作業の結果わかったことは、遺跡間変異 (inter-site variability) を把握する方法論上の課題を考えていくうえで、重要な意味をもつことになろう。

遺跡間変異の把握とは、仮設される一集団がどのような地理的範囲内にいかなる遺跡をのこしているのかをあきらかにし、その把握によって最終的には、集団の行動パターンの全体像を復元することが目的になるものである。そこで問題点のひとつとしてとりあげねばならないのは、現時点で確認されている遺跡の変異の範囲が、当時の集団の行動のバリエーションを充分に反映しているのかどうか、という点であろう¹¹⁾。とりわけ更新世から完新世初頭にかけては、自然環境を構成するさまざまな要素（自然地形もそれに当然ふくまれる）が激変する時期であり、いま確認できる自然環境の諸条件がそのまま当時の復元に直接役立つというわけではない。同時に、遺跡の分布や立地（とその解釈）にもそれが何らかの影響をおよぼしている可能性は、十分に想定されなければならない。

第 I 章で指摘したように、デンマークのマグレモーゼ文化期に関する研究では、行動連鎖のパターンを復元していくうえでの重大な障壁になる要素として、海岸線の変化がとりあげられている (Price 1985:342-345)。というのも、かりに当時、沿岸部を移動範囲にふくむような行動パターンが実際に存在していたとしても、現時点でその痕跡を確認することができなければ、復元される行動連鎖のパターンは、そうした実態から大きくかけ離れたものになってしまう恐れが生じてくるからである。

遺跡間変異の問題を考えていくうえで、かつて存在していた遺跡が自然的要因によって消滅もしくは確認がきわめて困難になってしまっていないか、という可能性を吟味することは重要である。本稿中の C 地域に関して指摘してきた、海面下の大陸棚に遺跡が遺存しているのではないかという可能性も、遺跡間変異とのかかわりの視点から考察される必要がある。ほかに、存在を確認することはきわめて困難であろうが、沖積地の厚い地層下にある遺跡の探索も、埋没段丘の存在を考慮にいれるならば、遺跡間変異の問題を考えていくうえで今後重要な検討課題となつてこよう。

現実的に発見・調査が難しいそうした遺跡については、偶然的な発見があればよいのであるが、当分は間接的な方法によって遺跡の存在を推測していくしか議論の糸口はないと思われる。

間接的な推測としては、本稿でおこなってきたように、現・旧海岸線がそれほど変化していない地域での検討結果から、逆にそれが変化している地域の状況について類推をおこなう、というのもひとつの方法であろう。鈴木忠司（1985）も同様の手続きをふんで、細石刃石器群段階では人間と海との親和的な関係が成立してはいなかったことを指摘している。これとは別に、遺跡数の通時的な増減を検討していくことで、いまは確認できない遺跡の存在を予測することもできる（小杉 1998）。あるいは、デンマーク中石器時代前葉のマグレモーゼ文化期の動物遺存体に対する分析結果が示すように、遺跡の利用季節を解明することによって、現在は確認することができない海岸線沿いの遺跡の存在を予測する（Rowley-Conwy 1993）こともできよう。マグレモーゼ文化期の場合、これまで利用季節の推定が可能であった遺跡のすべてが夏季を示すものに偏っていたため、冬季には現在海面下に水没してしまった低地帯が利用されていたのではないか、という推測がだされたのである。

貝塚や洞穴遺跡をのぞくと動物遺存体の検出がほとんど望めない日本では、遺跡の利用季節を基軸として上記のような推定をおこなうことは不可能に近いが、利用季節以外でも遺跡間のつながりを立証しうるような要素を摘出することができれば、上と同じような論理展開で、水没してしまった地域における遺跡の存在を推測することも可能となるであろう。

更新世終末から完新世初頭にかけての中・高緯度地帯において、低地である沿岸部で水産資源の利用が本格化・組織化したのは、日本列島だけにとまらなない一般的な現象といっても差し支えはない。しかし、当時、活動の主舞台となっていた可能性のある沿岸部は、海水準変動にともなって、水没してしまったり厚い地層下に埋没してしまったり、といった影響を容易にうけやすい地域でもある。そうした状況のもとで遺跡間変異の的確な復元をめざしていくためには、ここまで述べてきたような幾通りかの推定方法を用いることもふくめて、集団がのこした遺跡の変異の幅を見極めていくような議論が、今後重要な意味をもつことになるだろう。こうした方向性の研究を積極的に推進するための条件としては、考古学的な議論に地質学・地理学的な知見を導入することが、これからますます必須になるといえよう¹²⁾。

5. まとめ

本章での検討結果をまとめると次のようになる。

- ① 石刃・鏃石器群が発見されている遺跡立地の傾向を、設定した遺跡種別に応じて整理していくと、Ⅰ種とした遺跡の立地上の特徴には遺跡間を通じて共通性が認められたのに対して、Ⅱ種とした遺跡の立地上の特徴には遺跡間で変異が大きく認められることがわかった。
- ② Ⅰ種の遺跡がある一定期間のあいだ居住活動が営まれる本拠地であったならば、上述の傾向は、本拠地となる地点が選択される際に、共通した立地状況を示す場所がとくに選ばれていたことを示唆していよう。逆にⅡ種の遺跡の場合には、さまざまな性格をもつものがふくまれているため、結果として遺跡間でさまざまな立地上の特徴を示すことになったと考えられる。
- ③ Ⅰ種の現況での遺跡立地をみると、海岸線沿いに立地する場合が認められるのと同時に、や

や内陸にはいった地点に立地している遺跡も認められる。しかしながら、旧海岸線を復元してみると、Ⅰ種の遺跡いずれも海岸線沿いに立地していることがあきらかとなった。

- ④根室海峡沿いの地域にはこれまでⅠ種の遺跡が確認されていなかったが、旧海岸線が現在よりも沖合いにあったことが事実であるならば、海岸線沿いに立地していたであろうⅠ種の遺跡は、現在は海面下の大陸棚に水没してしまった可能性が大きい。

本章では、遺跡立地に関するいくつかの検討項目を設定して、それらが遺跡間でどのような差異と共通性を示しているのかを議論してきた。その結果、Ⅰ種の遺跡とⅡ種の遺跡とでは対照的な遺跡立地のパターンを示していることがわかった。これにより、沿岸部や内陸部でのⅠ種とⅡ種の遺跡それぞれをのこした諸活動のあり方について、一定の見通しをもつことが可能になったのである。ただし、遺跡立地に関する議論でとりあげた検討項目は、遺跡立地に関連する諸属性からみればきわめてかぎられたものであるだけに、今後は他要素からの検討を積み重ねていく必要があるだろう。とりわけ、個別遺跡でおこなわれていた活動を詳細にあきらかにするためには、微地形と周辺の地形環境とのかかわりについて、それぞれの遺跡のあり方をみていくことが重要である。第Ⅰ章の冒頭で述べた遺跡領域分析（site catchment analysis）の観点は、こうした段階の分析作業にとっては有効な視座をもっているものといえよう。今後の課題としたい。

付表 遺跡立地データ

No.	支庁	遺跡	市町村	標高	比高	地形	水系	発掘
1	宗谷	川尻	枝幸	12	10	段丘	河川	○
2	網走	開生	雄武	11	8	段丘	河川	○
3		ウブナイ	紋別	5	3	段丘	河川	○
4		柳沢	紋別	5	3	段丘	河川	○
5		湧別矢内	湧別	4	2	段丘	河川	
6		湧別市川	湧別	5	2	段丘	河川	○
7		湧別し尿処理場	湧別	5	2	段丘	河川	
8		トコロ貝塚	常呂	12	11	段丘	河川	○
9		トコロチャシ南尾根	常呂	23~26	17	段丘	河川	○
10		岐阜第2	常呂	16~22	16	段丘	河川	○
11		ST04	常呂	10	6	段丘	河川	
12		豊実T3	端野	80	50	段丘	河川	
13		川東7	北見	70	15~20	丘陵	河川	
14		川東羽田	北見	95~103	50	丘陵	河川	○
15		美里D	北見	120	10	丘陵	河川	
16		美里洞穴	北見	360	70	山地	河川	○
17		柏木1	北見	150	20~30	丘陵	河川	
18		豊地9	北見	240	110	丘陵	河川	
19		広郷20	北見	130	20~30	段丘	河川	
20		広郷43	北見	115	20	段丘	河川	
21		紅葉山	留辺蘂	214~222	20	丘陵	河川	○
22		常元1	置戸	390	25	段丘	河川	
23		境野北	置戸	230	27	丘陵	河川	
24		天都山	網走	90~100	90	段丘	河川	
25		二見岡	網走	53	50	丘陵	湖沼	
26		嘉多山	網走	27	25	段丘	湖沼	
27		クツチャロ	網走	20~30	20	段丘	河川	
28		向陽ヶ丘	網走	80~90	40~50	丘陵	河川	
29		旧大曲神社	網走	20~30	20	丘陵	河川	
30		呼人湖畔荘	網走	30~60	30	段丘	湖沼	
31		大曲洞穴	網走	100	80	丘陵	河川	○
32		呼人	網走	30	30	段丘	湖沼	
33		NM09	網走	11	10	段丘	湖沼	
34		豊里	女満別	8	2	段丘	河川	○
35		ピラオツマツコウマナイチャシ	美幌	27	14	段丘	河川	○
36		駒生	美幌	65	2	段丘	河川	

No.	支庁	遺跡	市町村	標高	比高	地形	水系	発掘
37	網走	神浦8号	小清水	20	10	段丘	河川	
38		富士土屋	斜里	130	40	丘陵	河川	
39	根室	羅臼川南岸	羅臼	15	14	段丘	海	
40		ソスケ	羅臼	40	40	段丘	海	○
41		トビニウス南岸	羅臼	36	29	段丘	海	○
42		オタフク岩第Ⅱ地点	羅臼	43	42	段丘	海	○
43		カリカリウス	標津	15	8	段丘	河川	○
44		古道2	標津	10~15	4~9	段丘	河川	○
45		トーサムポロL1	根室	16	15	段丘	湖沼	○
46		別当賀一番沢川	根室	7~12	6	段丘	河川	○
47	釧路	オカレンポーシ	厚岸	7	6	段丘	海	
48		タワ1	標茶	40~50	10~20	丘陵	河川	
49		鴨沢	標茶	30~40	26	丘陵	河川	
50		五十石	標茶	25	11	段丘	河川	
51		飯島	標茶	50	35~40	段丘	河川	○
52		ニッ山第1地点	標茶	30	12	段丘	河川	○
53		ニッ山第2地点	標茶	20	7	段丘	河川	
54		ニッ山第3地点	標茶	37~45	30	段丘	河川	○
55		ニッ山第6地点	標茶	20	10	段丘	河川	
56		茅沼	標茶	15~19	4	段丘	河川	
57		金子	標茶	20	8	段丘	湖沼	○
58		塘路湖	標茶	6~10	0~8	段丘	湖沼	
59		斉藤1	標茶	30	10~20	段丘	河川	
60		斉藤2	標茶	20	12	段丘	河川	
61		綱井	標茶	10	10	段丘	湖沼	
62		綱井2	標茶	12	6	段丘	湖沼	○
63		シラルトロ	標茶	13	4	段丘	河川	
64		アレキナイ川左岸	標茶	15	6	段丘	河川	
65		ポンタワ第2	標茶	40	10	段丘	河川	
66		達古武7	釧路(町)	10~15	5	段丘	湖沼	
67		達古武8	釧路(町)	10~20	6	段丘	湖沼	
68		岩保木10	釧路(町)	40~50	40	段丘	河川	
69		遠矢4	釧路(町)	10~30	20	段丘	河川	
70		テンネル南	釧路(町)	20~30	18	段丘	河川	
71		岩保木中の沢1	釧路(町)	50~60	40	段丘	河川	
72		北斗第1地点	釧路(市)	17~24	6~13	段丘	河川	○
73		大楽毛第4地点	釧路(市)	10~20	10	段丘	河川	○

No.	支庁	遺跡	市町村	標高	比高	地形	水系	発掘
74	釧路	東釧路第Ⅰ地点	釧路(市)	15~20	14	段丘	河川	○
75		東釧路第Ⅱ地点	釧路(市)	10	8	段丘	河川	○
76		東釧路第3地点	釧路(市)	15~20	14	段丘	河川	○
77		桂恋神社	釧路(市)	20	19	段丘	海	
78		桜ヶ岡第2地点	釧路(市)	50	50	段丘	河川	○
79		下雪裡	鶴居	20	3	段丘	河川	
80		下幌呂A	鶴居	7~17	1	段丘	河川	
81		アシベツ川右岸	鶴居	10~20	2	段丘	河川	
82	十勝	共栄B	浦幌	19	8	段丘	河川	○
83		生剛A	浦幌	20	10	段丘	河川	○
84		新吉野台	浦幌	19	8	段丘	河川	○
85		下大樹	大樹	70	7	段丘	河川	○
86		下当縁	大樹	25	17	段丘	河川	
87	上川	二の橋	下川	190	20	丘陵	河川	○
88		北町C	下川	150~200	20	丘陵	河川	
89		日の出4	和寒	290	30	段丘	河川	
90		恩根内	美深	60	3	段丘	河川	
91		上士別	士別	170~190	20	段丘	河川	
92		三郷	士別	200~225	25	丘陵	河川	○
93		日進	名寄	115	26	丘陵	河川	
94		日進33	名寄	95	4	氾濫原	河川	
95		日進2	名寄	98	3	段丘	河川	
96		朝日	名寄	125	15	丘陵	河川	
97		江差牛	上川	350~400	50	丘陵	河川	
98		愛山溪登山道	上川	1600	60	山地	河川	
99		幌倉沼	東川	224	2	段丘	河川	
100		東神楽14号	東神楽	180~190	20	段丘	河川	
101		千代岡	東神楽	170~195	20	段丘	河川	
102		オサラッペ左岸	旭川	130	20~25	段丘	河川	○
103		旭ヶ丘	旭川	120	22	段丘	河川	
104		三の山	富良野	330	5	丘陵	河川	
105		東富丘	富良野	355	10	丘陵	河川	
106		東山	富良野	308	36	丘陵	河川	
107		烏沼	富良野	175~180	3	丘陵	河川	
108		西達布2	富良野	298~310	4	丘陵	河川	
109		扇瀬公園A	富良野	172	1	段丘	湖沼	
110		幾寅A	南富良野	350~360	6	段丘	河川	

おわりに

本稿におけるここまでの議論を整理すると以下になるであろう。

- ①複数の遺跡間の関係性を不可避的にとりあつかわねばならない移動・居住形態の復元的研究にとって、本稿の第Ⅰ章で示したような、ある地理的範囲内における考古学的記録から〈集団〉の行動連鎖のパターンを反映する傾向性を抽出することによって、移動・居住形態の仮説モデルを構築するという分析視座は、北西ヨーロッパや日本における従来の移動・居住形態研究が内包する問題点やポテンシャルを把握していくうえで、きわめて有効であることが確認された。
- ②日本におけるこれまでの移動・居住形態研究では、複数遺跡間での類型設定、石器製作工程もしくは石器組成からみた遺跡間のつながりの解明、という点について一定の業績があげられている。しかしながら、それらの研究では、検討対象の措定、遺跡間接続の妥当性、各種データの仮説モデルのなかでの統合化、という諸点に関して検討の余地をのこしている。それらの問題点をふまえて本稿では、北海道の石刃鏃石器群を題材として、石器製作工程のつながりという視座から遺跡間接続の妥当性をあきらかにし、なおかつ遺跡立地、遺跡分布、遺跡種別といったさまざまな検討項目を整合的に説明しうるような仮説モデル構築をめざした。
- ③石器製作工程のつながりを解明するためには、複数遺跡間での詳細な石器製作技術の復元およびその比較が必要である。本稿の第Ⅱ章では、まずオタフク岩遺跡第Ⅱ地点出土の石器群の分析から、これまで概要のみが知られていた石刃鏃石器群の石器製作技術の全体像を復元し、遺跡間比較の基準を提示した。そして、第Ⅲ章において、比較に耐えられるだけの一定の出土量が認められる遺跡を対象として、遺跡間における石器製作技術の詳細な比較をおこなった。
- ④比較分析の結果では、北海道内の石刃鏃石器群が確認されている遺跡間において、きわめて共通性の高い石器製作技術および利用石器石材がみられることが判明した。さらに、沿岸部と内陸部とのあいだでは、実施されている石器製作作業に工程上の格差が認められ、それが相互補完的なものであることがあきらかにされた。以上の知見から、北海道の石刃鏃石器群をのこした〈集団〉は、沿岸部と内陸部とのあいだで移動活動をおこない、沿岸部の一部の遺跡は本拠地として、内陸部の遺跡は野营地として利用されていたことを推定した。
- ⑤さらに第Ⅳ章では、石刃鏃石器群が発見されている遺跡を北海道東部内から網羅的に集成し

て、遺跡立地の傾向について整理をおこない、なおかつ第三章で設定した遺跡種別との対応関係についても検討をおこなった。そこでは、遺跡種別として設定したⅠ種とⅡ種が対照的な立地パターンを示していること、それが地理的景観内の各種の資源利用を目的とした土地利用の結果であることを示した。

- ⑥最後に、遺跡間変異の把握に重大な影響をあたえると予測される当該期（7,500yrs BP 前後）の自然地形、とりわけ旧海岸線の位置について検討を試みた。結果的に、石刃鏃石器群の遺跡種別として設定したうち、Ⅰ種とした本拠地と想定される遺跡の見かけ上の分布には、旧・現海岸線の位置に関する地域的差異が影響をあたえていることをあきらかにした。

以上の議論によって、移動・居住形態の復元的研究をめぐる方法論的課題についてあらたな視点を提示することができたとともに、北海道の石刃鏃石器群を題材とした実践作業をおこなうなかで、当該資料に即した具体的な仮説モデルを構築し、さきに示した方法論的視座の有効性を確認することができた。くわえて、移動・居住形態の復元的研究をより蓋然性の高いものとするためには、提示した仮説モデルに対していくつか補足しなければならない点が存在するが、その一例として本稿では、遺跡立地の解釈にかかわる自然地形の変化の問題をとりあげ、遺跡間変異の議論にそれが大きく関与するものであることをあきらかにしてきた。

移動・居住形態の復元的研究をめぐる方法論的課題に関していうならば、遺跡形成過程の分析をめぐる問題、およびそれが移動・居住形態の仮説モデルとどのような関連をもつのかについて、論すべきいくつかの問題点があることは指摘しておかねばならない。たとえば、ある遺跡における回帰性とその内容が、提示された仮説モデルにおけるその遺跡の位置づけと整合的であるのか否か、あるいは、行動連鎖のパターンを反映していると考えられる考古学的記録の傾向性が、それぞれの遺跡の堆積環境のなかでどのような変形をうけているのか、という点が具体的に検討されるべきであろう。あるいは、石器組成の検討から遺跡間における機能分有の関係をとらえていくためには、器種ごとの製作・使用・廃棄の過程の差を十分に認識した分析が必要である。それらの復元にも遺跡形成過程の研究が有効な分析視座を提供することと予測されよう。いずれも今後の課題としておきたい。

謝 辞

本稿を執筆するにあたっては、博士論文指導委員である北海道大学文学部の林 謙作・菊池俊彦・煎本 孝・小杉 康・菅 豊の諸先生から懇切かつ厳しい御指導を賜った。とりわけ、林 謙作先生からは日常的に終始一貫して御指導を賜った。末筆ではあるが、ここで厚い感謝の意を表したい。

また、赤松守雄・阿子島香・石川 朗・出穂雅実・右代啓視・大塚達朗・大沼克彦・加藤博文・北沢 実・木村英明・杉浦重信・仙波伸久・鶴丸俊明・西 幸隆・平川善祥・山原敏朗・涌坂周一の諸先生・諸氏からは、資料の実見にあたっての御高配や議論に応じていただく過程で貴重な御教示をいただいた。また、北海道大学文学部北方文化論講座の天野哲也先生をはじめとする大西秀之・小野裕子・高瀬克範・中沢祐一の諸氏からは、日常的に多々の御教示・御配慮をいただくことができた。この場を借りて御礼申し上げたい。

第 I 章註

- 1) 移動・居住形態 (Residence-Mobility Pattern) は、地点内での活動 (居住活動) と地点間での活動 (移動活動) とを包括する用語として使用する。類似した意味内容をもつ用語としては、セトルメント・システム (小林他 1971:239-240)、居住構造 (野口 1996:110)、居住形態 (佐藤 1997:2) があげられる。これらの用語では、移動と居住の両活動を積極的に組み込んだ術語設定をおこなっていないため、ここで新たな用語を用いることにした。
- 2) 遺跡間における石器接合資料と区別するために、〈遺跡間接続〉と呼んでおく。
- 3) ここでの〈構造〉という用語は、あくまでも限定された対象に内在する骨組みという意味で使用している。
- 4) 以後の本稿中で提示していく年代測定値は、とくに注意をくわえないかぎり、いずれも未補正值である。
- 5) トナカイを主要な対象獣とした狩猟活動がおこなわれ、異なる地理的景観の相互をまたがするような長距離移動がなされていたという Sturdy らの仮説に対しては、Weiniger (1989:354-355) や Eriksen (1996:114-122) らの批判がある。
- 6) ただし、フォスナ文化期は二分すべきではないとする見解もある (Bjerck 1986)。
- 7) 現在、われわれが入手している遺跡規模や遺跡分布に関するデータは、その多くが行政的な発掘調査や偶然的な表面採集の結果によって把握されていることを忘れるべきではない。そこには、さまざまなサンプリング・バイアスが存在している可能性が充分にある。既存の資料を用いて分析する場合、調査面積や調査精度のばらつきが問題となるし、拠点的な集落は別として短期間の利用しかなされている遺跡の場合、発見自体が困難であるとともに、たとえ発見されても往々にしてその年代的位置づけを把握することはきわめて困難なことが多い (Price 1978:95-96)。こうした問題に対処するために、北西ヨーロッパにおいては景観考古学 (landscape archaeology) と呼ばれる試みが、たとえば Bang-Andersen (1987, 1989, 1990) や Mithen and Lake (1996) らによって実践されている。それは、一定地域内での計画的・組織的調査 (地表面採集や試掘の併用) によって、できるかぎり実態に近い遺跡分布や遺跡規模のあり方を把握しようとする試みである。
- 8) このような経過については、すでに詳細な学史的回顧 (野口 1996 など) がある。
- 9) 関東地方の後期旧石器時代後半期を対象とした移動・居住形態の研究において、遺跡立地などの分析が有効であるとの指摘 (佐藤 1997:7) はある。
- 10) 両アプローチを統合して実践している事例は、いまのところ認められない。ただし、加藤晋平らによる常呂川流域の細石刃石器群に関する一連の研究では、遺跡間における石器製作作業の工程上の差異について一定の注意がはらわれている (加藤他 1971)。ただし、二遺跡 (間村遺跡と吉村遺跡) を例にとりあげているだけであり、移動・居住形態の復元という観点では、きわめて不十分なままであった。

第 II 章註

- 1) 石刃核の製作から石刃が剥離されるにいたるまでの手順を〈石刃剥離工程〉とし、用いられた加撃具と打撃・加圧法の総体をここでは〈石刃剥離方法〉と呼ぶ。

- 2) 湧別市川遺跡の報告書（木村 1973:23）で注意がはらわれているように、不定形剥片を剥離する円盤状・サイコロ状の石核が石刃鑢石器群には伴出する。しかしながら、現時点までに不定形剥片を剥離する石核が確認されているのは、湧別市川遺跡とオタフク岩遺跡第Ⅱ地点だけであり、個別遺跡での石器製作技術をとらえるうえでは重要であるが、遺跡間比較をおこなううえでの共通の尺度にはならないため、検討対象としては不適切である。
- 3) こうした形容は、あくまでも研究者みずからの価値観を投影したものにすぎず、資料の性質を説明するためのタームにはならないはずである。
- 4) 「縄文時代早期中～後葉相当」と述べたが、これはあくまでも時間的併行関係を意味しているだけであり、石刃鑢石器群がいわゆる〈縄文時代〉の枠組みのなかに位置づけられうるかどうかとは別問題である。後者の問題に答えるためには、石器群の検討だけでなく、浦幌式・女満別式ら伴出する土器型式に対する評価が必要なことはいうまでもない。さらには、われわれ研究者が一般的に共有している〈縄文時代・縄文文化・縄文社会・縄文土器〉の設定原理について再吟味しなければならないはずである。
- 5) 経験的にいって打瘤の状態は、さらに細かく分けることができるが、そこからどれほど有意な情報が読みとれるのかは未知数である。コットレルとカミングアの両名は、剥離力学を考慮にいて、ヘルツ型（Hertzian）・曲げ型（Bending）・楔型（Wedging）の三つの剥離の発生形式を区分した（Cotterell and Kamminga 1987:685-691、1990:130-135）。この分類が現状ではもっとも妥当なものと考え、本章ではそのうち前二者をそれぞれⅠ類・Ⅱ類とした。さらに、内傾・打瘤ともに観察されない平坦な状態のものも観察されたためⅢ類を設定した。
- 6) 藤本強（1992）は、アムール川流域のノヴォペトロフカ遺跡や常呂町トコロ貝塚の事例分析から、石刃鑢とそれ以外の剥片石器の素材になった石刃は、「異なる技術体系に属する二種類の石刃剥離技術」（同上:149）により剥離されたものと考えている。可否は簡単には決しがたいが、立証のためには、わずかな石刃核の観察だけでなく母岩単位での石刃剥離技術の摘出をおこなう必要がある。
- 7) 剥離方法の同定に関する実験的研究は、細石刃剥離技術の研究では成果をあげているが（大沼・久保田 1992:8-20 など）、一方の石刃剥離技術に関しては、いくつかの実験的分析が欧米でなされているが（Sollberger and Patterson 1976:525-530 など）、その結果が石材や剥離工程の差異を越えて一般化できるのかどうかは不明であり、今後の検討課題といわねばなるまい。
- 8) 後期旧石器時代の両面調整石器に関して千葉英一（1993:註 10）が同様の指摘をおこなっている。

第Ⅲ章註

- 1) ここでは〈地理的景観〉という語を、山岳・丘陵・台地・河川・海岸・湖沼などの地形を含意するものとして使用する。生態環境的背景は当面ふくめないことにする。
- 2) 本稿では、ある特定の景観内に集中する遺跡のまとまりを〈遺跡群〉と呼ぶことにしているが、「ある人間集団によって残されたすべての遺跡の集合」を「遺跡群」ととらえる大井晴男（1982:67）の見解があることも付記しておきたい。

- 3) こうした傾向は石刃核に限定されるものであり、石刃核以外では異なる傾向を示す。次で説明するⅡ類とした非石刃核には円磨された自然面がよく観察でき、河川中下流域で採集された転礫の黒曜石が用いられていたと考えられる。石刃核と非石刃核で石材採取ゾーンが異なっていた可能性が高い。
- 4) 石材採取ゾーンに関しては、地域的な差異も考慮しなければならない。とりわけ、北海道大学文学部北方文化論講座に保管されている浦幌町新吉野台遺跡の発掘資料を観察するかぎりでは、十勝地域では異なったあり方を示しているようである。
- 5) かつて加藤晋平（1972:10-11）は、石刃核の打面にみられるパンチ痕の存在から押圧剥離による石刃剥離を想定したが、パンチ痕の成因を考えるかぎり、そうした想定は成り立たない。
- 6) 槌状剥離面の末端が石器の片側縁から他側縁へぬけてしまっている彫器は、幅が大きく減じられていると考えられるため、計測対象からは除外した。
- 7) 西達布2遺跡では、一部に他時期の資料が検出されているが、それらに用いられている石材の大半は転礫の黒曜石であり、石刃鏃石器群に所属するものとは明確に分離できる。
- 8) 筆者もまた佐藤訓敏（1983:47-48）のように、相対的には女満別式が検出されている遺跡が古く、東釧路Ⅱ・Ⅲ式を伴出している遺跡は新しいと考えている。浦幌式を細分する見解（後藤 1991）については、なお今後の資料の蓄積が必要であるが、遺跡間の時間的關係を知るうえで必要な観点ではないかと考えている。
- 9) これとは対照的なケースとして、Ricklis と Cox（1993:448-458）による中央テキサスの沿岸地域における後期先史時代の遺跡群研究の例をあげておこう。彼らが検討した事例によれば、剥片：製品の比率は、それぞれの遺跡の機能や占地の季節性の影響をうけることなく、石材の原産地からの距離が遠くなるに比例して製品の比率が高くなるという。このケースにおいて遺跡の性格は、利用され廃棄される石器の種類に影響をおよぼすことはあっても、遺跡内での石器製作作業の質量に影響をおよぼすことはなかったのである。

第Ⅳ章註

- 1) ここでいう「北海道東部」とは、北海道を東西に二分した際の東側の地理的区分である。
- 2) ここで議論しようとする〈集団〉の単位は、前章で指摘したように、〈技術集団〉のなかに仮設される、日常生活の基本的な単位となっていたであろう小集団のレベルを想定している。
- 3) いずれの年代値も 1960 年代から 1980 年代にかけて計測されたものが多く、AMS 等の改善された年代測定法を適用する必要がある。
- 4) 佐藤訓敏（1983）の集成結果をみると、白滝町や訓子府町等で石刃鏃石器群が採集されていることが記載されているが、遺跡の所在を特定することができないため、ここではとりあげなかった。そうした遺跡が道内で数ヶ所ある。
- 5) 北海道の石刃鏃石器群を構成する石器の諸特徴については、木村英明（1976）が簡明な整理をおこなっている。
- 6) 紙数の関係から各遺跡の出典は、本文中においても示さなかったが、御諒解を賜りたい。

- 7) なお、内湾が形成されるような同様の海進状況は、当該地域より南東に位置する斜里平野（児平 1995 M S）で 8,000yrs B.P.前後から、北西に位置するクッチャロ湖周辺（松島 1982）でも 9,000 yrs B.P.前後から進行していたことが報告されている。
- 8) 図 4-4 から図 4-6 に示す旧海岸線の復元図を作成するにあたっては、地質調査所で発行されている 5 万分の 1 地質図で確認できる知見も副次的に参考にした。
- 9) なお、ここまで十勝地方の状況をまったく述べてこなかったが、I 種に属すると考えられる共栄 B 遺跡と新吉野台遺跡の立地については、とくに言及しておく必要がある。両遺跡が立地する段丘の眼下には、海進によって形成されたと考えられている沖積低地がひろがっている（平川・小野 1974:626）。したがって、両遺跡ともに海岸線に面していた可能性は高いが、具体的に海進がどの時期にどの程度進行していたのかについて議論されてきたわけではなく、今後の検討が必要であるといえる。
- 10) 海岸線の位置の地域的差異を手がかりにして、考古学的に観察される事象の解釈をおこなおうとする試みは、いまだきわめて少ない。後期旧石器時代から縄文時代草創期にかけての九州内での遺跡立地や分布の地域的差異を、海水準変動とのかかわりから解釈しようとした萩原博文（1997）の着眼点は、意義あるものと思われる。
- 11) ある時期の遺跡立地の傾向が充分な吟味を経ないで一般的に常識化されてしまうと、研究の焦点が過度にある特定の立地を示す遺跡にあてられてしまう可能性がある。北海道の細石刃石器群の場合、河川流域の段丘縁辺に多くの遺跡が立地するが、それ以外の立地を示す遺跡も実際は存在する（高倉・出穂 1998:37）。遺跡間変異の議論は、そうした従来の遺跡立地観を相対化するところから出発しなければならない。
- 12) 欧米では Geoarchaeology とよばれる一分野が確立していて、その標準的なテキストをみると、海水準変動と考古学とのかかわりについても相応の頁を割いて説明がくわえられている（Rapp, Jr and Hill 1998、Herz and Garrison 1998）。

引用・参考文献（A B C 順）

- 会田容弘 1992 「東北地方における後期旧石器時代石器群の剥片剥離技術の研究—接合資料をもとにした剥片剥離技術分析の試み—」加藤稔先生還暦記念会編『東北文化論のための先史学歴史学論集』 209-292 頁
- 阿子島香 1995 「ドゥフォール岩陰の彼方に—石器群の空間分布と人間活動—」『歴史』第 84 輯 1-29 頁
- 阿子島香 1996 「マドレーヌ文化期における適応戦略と遺跡構造分析」『古代』第 101 号 1-29 頁
- 阿子島香 1997 「続・ドゥフォール岩陰の彼方に—岩陰遺跡文化層の構造論的理解—」『歴史』第 89 輯 83-112 頁
- 雨宮瑞生 1993 「温帯森林の初期定住—縄文時代初頭の南九州を取り上げて—」『古文化談叢』第 30 号 987-1025 頁
- 安蒜政雄 1977 「遺跡の中の遺物」『季刊どるめん』第 15 号 50-62 頁
- 安蒜政雄 1985 「先土器時代における遺跡の群集的な成り立ちと遺跡群の構造」論集・日本

- 原史刊行会編『論集・日本原史』吉川弘文館 193-216 頁
- 安蒜政雄 1990 「先土器時代人の生活空間—先土器時代のムラー」『日本村落史講座第2巻 景観Ⅰ』雄山閣 3-22 頁
- 安蒜政雄・戸沢充則 1975 「砂川遺跡」『日本の旧石器文化2 遺跡と遺物（上）』雄山閣出版 158-179 頁
- Andersen, S.H. and Johansen, E. 1986. Ertebølle Revisited. *Journal of Danish Archaeology*, Vol.5: pp.31-61.
- Andresen, J.M., Byrd, B.F., Elson, M.D., McGuire, R.H., Mendoza, R.G., Staski, E. and White, J.P. 1981. The Deer Hunters: Star Carr Reconsidered. *World Archaeology*, Vol.13: pp.31-46.
- 愛宕誠治 1998 「網走川下流低地の沖積層とそのC¹⁴年代」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書（IX）』名古屋大学年代測定資料研究センター 140-148 頁
- Bahn, P. 1977. Seasonal Migration in Southwestern France during the Late Glacial Period. *Journal of Archaeological Science*, Vol.4: pp.245-257.
- Bang-Andersen, S. 1987. Surveying the Mesolithic of the Norwegian Highlands : A Case Study on Test-pits as a Method of Site Discovery and Delimitation. In *Mesolithic Northwest Europe: Recent Trends*, edited by P. Rowley-Conwy, M.Zvelebil and H.P.Blankholm: pp.33-45. Sheffield: Department of Archaeology and Prehistory, University of Sheffield.
- Bang-Andersen, S. 1989. Mesolithic Adaptations in the Southern Norwegian Highlands. In *The Mesolithic in Europe*, edited by C.Bonsall: pp.338-350. Edinburgh: John Donald Publishers.
- Bang-Andersen, S. 1990. The Myrvatn Group, a Preboreal Find-Complex in Southwest Norway. In *Contributions to the Mesolithic in Europe*, edited by P.M.Vermeersch and P.V.Peer: pp.215-226. Leuven: Leuven University Press.
- Bang-Andersen, S. 1996. Coast/inland Relations in the Mesolithic of Southern Norway. *World Archaeology*, Vol. 27: pp.427-443.
- Binford, L.R. 1977. General Introduction. In *For Theory Building in Archaeology: Essays on Faunal Remains, Aquatic Resources, Spatial Analysis, and Systemic Modeling*, edited by L.R.Binford: pp.1-10. New York: Academic Press.
- Binford, L.R. 1978. *Nunamiut Ethnoarchaeology*. New York: Academic Press.
- Binford, L.R. 1982. The Archaeology of Place. *Journal of Anthropological Archaeology*, Vol.1: pp.5-31.
- Binford, L.R. 1989. Isolating the Transition to Cultural Adaptations: An Organizational Approach. In *The Emergence of Modern Humans: Biocultural Adaptations in the Later Pleistocene*, edited by E.Trinkaus: pp.18-41. Cambridge: Cambridge University Press.
- Binford, L.R. and Binford, S.R. 1966. A Preliminary Analysis of Functional Variability in the Mousterian Levallois Facies. *American Anthropologist*, Vol.68, Part 2: pp.238-295.
- Bordes, F. and Crabtree, D. 1969. The Corbiac Blade Technique and Other Experiments. *Tebawa*, Vol.12: pp.1-22.
- Brinch Petersen, E. 1973. A Survey of the Late Palaeolithic and the Mesolithic of Denmark. In *Mesolithic in Europe*, edited by S.K.Kozłowski: pp.77-128. Warsaw: Warsaw University Press.
- Brinch Petersen 1989. Vænget Nord: Excavation, Documentation and Interpretation of a Mesolithic Site at Vedbæk, Denmark. In *Mesolithic in Europe*, edited by C.Bonsall: pp.325-330. Edinburgh: John Donald Publishers.

- 千葉英一 1993 「新道4遺跡における細石刃石器群の検討—美利河技法の成立—」『吉崎昌一先生還暦記念論集 先史学と関連科学』 5-23 頁
- Clark, J.G.D. 1954. *Excavations at Star Carr*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, J.G.D. 1972. *Star Carr: A Case Study in Bio-archaeology*. Reading: Addison Wesley Modular Publication 10.
- Clarke, D.L. 1976. Mesolithic Europe. In *Problems in Economic and Social Archaeology*, edited by G.Sieveking, I. H.Longworth and K.E.Wilson: pp.449-481. London: Duckworth.
- Cotterell, B. and Kamminga, J. 1987. The Formation of Flakes. *American Antiquity*, Vol.52: pp.675-708.
- Cotterell, B. and Kamminga, J. 1990. *Mechanics of Pre-industrial Technology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crabtree, D.E. 1968. Mesoamerican Polyhedral Prismatic Blades. *American Antiquity*, Vol.33: p.446-478.
- 遠藤邦彦・小杉正人 1990 「海水準変動と古環境」『モンスーン・アジアの環境変遷』総合地誌研究叢書 20 93-103 頁
- Eriksen, B.V. 1996. Resource Exploitation, Subsistence Strategies, and Adaptiveness in Late Pleistocene-Early Holocene Northwest Europe. In *Humans at the End of the Ice Age: The Archaeology of the Pleistocene-Holocene Transition*, edited by L.G.Straus, B.V.Eriksen, J.M.Erlandson and D.R.Yesner: pp.79-100. New York: Plenum Press.
- Fraser, F.C. and King, J.E. 1954. Faunal Remains. In *Excavations at Star Carr*, edited by J.G.D.Clark: pp.70-95. Cambridge: Cambridge University Press.
- 藤本 強 1981 「常呂川流域の遺跡の分布」『北見市史 上巻』北見市 317-332 頁
- 藤本 強 1992 「アムール河流域、ノヴォペトロフカ遺跡の石刃鏃と石刃」『平井尚志先生古稀記念考古学論攷 第1集』 139-157 頁
- 福沢仁之 1998 「氷河期以降の気候の年々変動を読む」『科学』第 68 巻第 4 号 353-360 頁
- Gamble, C. 1986. *The Palaeolithic Settlement of Europe*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 後藤秀彦 1991 「浦幌式土器について」『十勝考古学とともに』十勝考古学会 29-42 頁
- 後藤秀彦・大槻日出男 1976 『共栄B遺跡』浦幌町教育委員会
- Grigson, C. 1981. Fauna. In *The Environment in British Prehistory*, edited by I.G.Simmons and M.J.Tooley: pp. 110-124. London: Duckworth.
- 萩原博文 1997 「九州の旧石器時代の遺跡立地と石器の出土状況」『考古学ジャーナル』No. 413 23-26 頁
- Hamano, Y., Maeda, Y., Matsumoto, E. and Kumano, S. 1985. Holocene Sedimentary History of Some Coastal Plains in Hokkaido, Japan Ⅲ : Transition of Diatom Assemblages in Tokoro along the Okhotsk Sea. *Japanese Journal of Ecology*, vol.35 : pp.307-316.
- 原田昌幸 1993 「遊動と定住—縄文時代の初期定住—」『季刊考古学』第 44 号 82-86 頁
- 林 謙作 1997 「縄文社会の資源利用・土地利用—「縄文都市論」批判—」『考古学研究』第 44 巻第 3 号 35-51 頁
- 林 謙作 1998 「講座縄文時代史 35 定住集落の成立と普及（5）」『季刊考古学』第 64 号 85-92 頁

- Herz, N. and Garrison, E.G. 1998. *Geological Methods for Archaeology*, New York: Oxford University Press.
- 北海道大学文学部付属北方文化研究施設 1967 『湧別遺跡発掘調査概報』
- Indreliid, S. 1975. Problems Relating to the Early Mesolithic Settlement in Southern Norway. *Norwegian Archaeological Review*, Vol.8: pp.1-18.
- Indreliid, S. 1978. Mesolithic Economy and Settlement Patterns in Norway. In *The Early Postglacial Settlement of Northern Europe: An Ecological Perspective*, edited by P.A.Mellars: pp.147-176. London: Duckworth.
- 平川一臣・小野有五 1974 「十勝平野の地形発達史」 『地理学評論』第 47 巻第 10 号 607-632 頁
- 岩崎隆人・畑 宏明・沢 四郎・西 幸隆 1980 「釧路市東釧路遺跡第Ⅱ地点の発掘調査—昭和 41 年—」 『釧路市立郷土博物館紀要』第 7 号 57-70 頁
- 岩谷朝吉・斉藤武一 1959 『東神楽 14 号遺跡』東神楽村郷土史研究会
- 泉 拓良 1985 「縄文集落の地域的特質」 『講座考古地理学 4 村落と開発』学生社 45-64 頁
- Jacobi, R.M. 1973. Aspects of the 'Mesolithic Age' in Great Britain. In *The Mesolithic in Europe*, edited by S.K. Kozłowski: pp.237-265. Warsaw: Warsaw University Press.
- Jacobi, R.M. 1978. Northern England in the eighth millennium bc: an essay. In *The Early Postglacial Settlement of Northern Europe*, edited by P.Mellars: pp.295-332. London: Duckworth.
- 梶原 洋 1976 「石刃鏃文化について」 『浦幌町郷土博物館報告』第 8 号 8-12 頁
- 加藤晋平 1963 「石刃鏃について」 『物質文化』第 1 号 3-18 頁
- 加藤晋平 1970 「先土器時代の歴史性と地域性」 『郷土史研究講座 1 考古学と地域』朝倉書店 58-92 頁
- 加藤晋平 1972 『縄文時代のたんの』端野町教育委員会
- 加藤晋平・桑原 護 1969 『中本遺跡—北海道先土器時代遺跡の発掘報告—』永立出版
- 加藤晋平・畑 宏明・鶴丸俊明 1969 「エンド・スクレイパーについて—北海道常呂郡端野町吉田遺跡の例—」 『考古学雑誌』第 55 巻第 3 号 206-236 頁
- 加藤晋平・鶴丸俊明・水村孝行 1971 「多面体彫器の問題—北海道東部間村・吉村両遺跡の調査から—」 『考古学ジャーナル』No.57: 10-22 頁
- 菊池 真 1996 「遺跡立地にみる先史人類の土地利用について—縄文時代中期・下総台地東京湾岸地域の例—」 『史苑』第 57 巻第 1 号 89-98 頁
- 木村英明 1973 『湧別市川遺跡の考古学的調査』湧別市川遺跡調査団・湧別町教育委員会
- 木村英明 1976 「石刃鏃文化について」 『江上波夫教授古稀記念論集 考古・美術編』山川出版社 1-29 頁
- 木村英明 1992 「北海道の石刃鏃文化と東北アジアの文化」 『季刊考古学』第 38 号 43-47 頁
- 絹川一徳 1993 「瀬戸内技法に関する二、三の考察」 『岡山大学文学部紀要』第 19 号 97-120 頁
- 北川浩之 1994 「C¹⁴年代が正確な年代に直結した」 『科学朝日』第 54 巻第 11 号 33-34 頁
- 小林達雄他 1971 「野川先土器時代遺跡の研究」 『第四紀研究』第 10 巻第 4 号 231-252 頁

- 児平英司 1995MS 『完新世における北海道北部・オホーツク海沿岸域の古環境復元』北海道大学大学院地球環境科学研究科平成7年度修士論文
- 児玉作左衛門・大場利夫 1958 「湧別遺跡の発掘について一石刃鏃を伴うブレード文化一」『北方文化研究報告』第13輯 53-114頁
- 駒井和愛編 1963 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 上』東京大学文学部
- 小宮山隆 1992 「中部高地縄文時代後晩期の遺跡立地について」『筑波大学先史学・考古学研究』第3号 81-108頁
- 近藤義郎 1976 「先土器時代の集団構成」『考古学研究』第22巻第4号 56-67頁
- 小杉 康 1998 「定住のはじまりから三内丸山まで」『科学』Vol.68: pp.314-322.
- 小杉 康・鶴田典昭 1989 「日影山遺跡における燃糸文期前葉の石器群の研究」『真光寺・広袴遺跡群 IV』真光寺・広袴遺跡群調査会 325-404頁
- 栗島義明 1986 「先土器時代遺跡の構造論的研究序説」『土曜考古』第11号 55-88頁
- 栗島義明 1998 「洞窟遺跡と開地遺跡の関係一埼玉県神庭洞窟をめぐる一」麻生 優編『日本における洞穴遺跡の構造論的研究』平成7～9年度科学研究費補助金研究成果報告書 118-125頁
- Larsson, L. 1990. The Mesolithic of Southern Scandinavia. *Journal of World Prehistory*, Vol.4: pp.257-309.
- Legge, A.J. and Rowley-Conwy, P.A. 1988. *Star Carr Revisited: A Re-analysis of the Large Mammals*. London: Centre for Extra-Mural Studies, Birkbeck College, University of London.
- 前田保夫・松田 功・中田正夫・松島義章・松本英二・佐藤祐司 1994 「完新世における北海道オホーツク海沿岸の海面変化一海面高度の観測値と理論値について一」『山形大学紀要(自然科学)』第13巻第3号 205-229頁
- 松島義章 1982 「北海道クッチャロ湖畔の海成沖積層のC¹⁴年代とそれに関する問題」『神奈川県立博物館研究報告(自然科学)』第13号 51-66頁
- Mellars, P.A. 1974. The Palaeolithic and Mesolithic. In *British Prehistory: A New Outline*, edited by C.Renfrew: pp.41-99. London: Duckworth.
- Mellars, P.A. 1976a. Settlement Patterns and Industrial Variability in the British Mesolithic. In *Problems in Economic and Social Archaeology*, edited by G.de G.Sieveking, I.H.Longworth and K.E.Wilson: pp.375-399. London: Duckworth.
- Mellars, P.A. 1976b. Fire Ecology, Animal Populations and Man: A Study of Some Ecological Relationships in Prehistory. *Proceedings of the Prehistoric Society*, Vol.42: pp.15-45.
- Mellars, P.A. and Reinhardt, S.C. 1978. Patterns of Mesolithic Land-use in Southern England: A Geological Perspective. In *The Early Postglacial Settlement of Northern Europe*, edited by P.A.Mellars: pp. 243-293. London: Duckworth.
- Mikkelsen, E. 1978. Seasonality and Mesolithic Adaptation in Norway. In *New Directions in Scandinavian Archaeology*, edited by K.Kristiansen and C.Paludan-Müller: pp.79-119. Copenhagen: National Museum of Denmark.
- Mithen, S. and Lake, M. 1996. The Southern Hebrides Mesolithic Project: Reconstructing Mesolithic Settlement in Western Scotland. In *The Early Prehistory of Scotland*, edited by T.Pollard and A.Morrison: pp.123-151.

Edinburgh: Edinburgh University Press.

宮 宏明・太田敏量 1987 『川東羽田遺跡』北網圏北見文化センター

Morrison, A. and Bonsall, C. 1989. The Early Post-Glacial Settlement of Scotland: a Review. In *The Mesolithic in Europe*, edited by C.Bonsall: pp.134-142. Edinburgh: John Donald Publishers.

Myers, A. 1989. Reliable and Maintainable Technological Strategies in the Mesolithic of Mainland Britain. In *Time, Energy and Stone Tools*, edited by R.Torrence: pp.78-91. Cambridge: Cambridge University Press.

中田正夫・前田保夫・長岡信治・横山祐典・奥野淳一・松本英二・松島義章・佐藤祐司・松田功・三瓶良和 1994 「ハイドロアイソスタシーと西九州の水中遺跡」『第四期研究』第33巻第5号 361-368頁

名取武光 1955 「北海道浦幌村吉野台遺跡」『日本考古学年報』第3号 30頁

西 幸隆 1972 「北海道先史時代における石刃鏃文化の位置について—研究史—」『先史』第8号 81-42頁

Noe-Nygaard, N. 1983. The Importance of Aquatic Resources to Mesolithic Man at Inland Sites in Denmark. In *Animals and Archaeology: 2. Shell Middens, Fishes and Birds*, edited by C.Grigson and J.Clutton-Brock: pp. 125-141. Oxford: BAR International Series 183.

野口 淳 1995 「武蔵野台地IV下・V上層段階における遺跡群—石器製作の工程配置と連鎖の体系—」『旧石器考古学』第51号 19-36頁

野口 淳 1996 「「石器文化」の再検討—旧石器時代「居住構造」試論—」『明治大学大学院文学研究論集』第5号 99-116頁

Nygaard, S.E. 1987. Socio-economic Developments along the Southwestern Coast of Norway between 10,000 and 4,000 b.c. In *Mesolithic Northwest Europe: Recent Trends*, edited by P.Rowley-Conwy, M.Zvelebil and H. P.Blankholm: pp.147-154. Sheffield: Department of Archaeology and Prehistory, University of Sheffield.

Nygaard, S.E. 1989. The Stone Age of Northern Scandinavia: A Review. *Journal of World Prehistory*, Vol.3: pp. 71-116.

Nygaard, S.E. 1990. Mesolithic Western Norway. In *Contributions to the Mesolithic in Europe*, edited by P.M. Vermeersch and P.V.Peer: pp.227-237. Leuven: Leuven University Press.

大場利夫・奥田 寛 1960 『女満別遺跡』女満別町

Ohnuma, K. and Bergman, C. 1982. Experimental Studies in the Determination of Flaking Mode. *Bulletin of the Institute of Archaeology, University of London*, Vol.19: pp.161-170.

大沼克彦・久保田正寿 1992 「石器製作技術の復元的研究—細石刃剥離方法の同定研究—」『ラフィダーン』第ⅩⅢ巻 1-26頁

大井晴男 1973 「先土器時代石器群における型式論処理について」『北海道考古学』第9輯 15-24頁

大井晴男 1982 「遺跡・遺跡群の型式論的処理について—オホーツク文化の場合—」『北海道考古学』第18輯 55-81頁

大嶋和雄・池田国昭・羽坂俊一・横田節哉・松本英二・赤松守雄 1994 「北海道野付崎の完新世の地形発達」『茨城大学教養部紀要』第27号 157-165頁

大嶋和雄・池田国昭・羽坂俊一・横田節哉・松本英二・赤松守雄 1996 「北海道サロマ湖の

- 完新世の地形発達」『茨城大学教養部紀要』第30号 99-108頁
- 太田陽子・海津正倫・松島義章 1990 「日本における完新世相対的海面変化とそれに関する問題—1980～1988における研究の展望—」『第四紀研究』第29巻第1号 31-48頁
- 岡崎由夫 1960a 「北海道釧路平原の沖積世の古地理—釧路平原生成過程の研究 第5報—」『第四紀研究』第1巻第7号 255-262頁
- 岡崎由夫 1960b 「釧路平原とその周辺の地形発達史」『地理学評論』第33巻第9号 462-473頁
- 岡崎由夫 1974 「釧路湿原への道のり」『新釧路市史 上巻』釧路市 104-135頁
- 小野 昭 1976 「後期旧石器時代の集団関係」『考古学研究』第23巻第2号 9-22頁
- 小野正敏 1979 「先土器時代の遺跡群と集団」『日本考古学を学ぶ3 原始・古代の社会』有斐閣:88-101頁
- Owen, L.R. 1988. *Blade and Microblade Technology: Selected Assemblages from the North American Arctic and the Upper Palaeolithic of Southwest Germany*. BAR International Series No.441.
- Pitts, M. 1979. Hides and Antlers: A New Look at the Gatherer-Hunter Site at Star Carr, North Yorkshire, England. *World Archeology*, Vol.11: pp.32-42.
- Price, T.D. 1978. Mesolithic Settlement Systems in the Netherlands. In *The Early Post Glacial Settlement of Northern Europe*, edited by P.Mellars: pp.81-113. London: Duckworth.
- Price, T.D. 1980. Regional Approaches to Human Adaption in the Mesolithic of the North European Plain. In *Mesolithikum in Europa*, edited by B.Gramsch: pp.217-234. Potsdam: Veröffentlichungen des Museums für Ur- und Frühgeschichte, 14/15.
- Price, T.D. 1985. Affluent Foragers of Mesolithic Southern Scandinavia. In *Prehistoric Hunter—Gatherers: The Emergence of Cultural Complexity*, edited by T.D.Price and J.A.Brown: pp.341-363. San Diego: Academic Press.
- Price, T.D. 1989. The Reconstruction of Mesolithic Diets. In *Mesolithic in Europe*, edited by C.Bonsall: pp.48-59. Edinburgh: John Donald Publishers.
- Price, T.D. and Brinch Petersen, E. 1987. Prehistoric Settlement in Mesolithic Denmark. *Scientific American*, Vol. 256: pp.90-99.
- Price, T.D., Schoeninger, M.J., and Armelagos, G.J. 1985. Bone Chemistry and Past Behavior: an Overview. *Journal of Human Evolution*, Vol.14: pp.419-447.
- Rapp, Jr., G. and Hill, C.H. 1998. *Geoarchaeology : The Earth—Science Approach to Archaeological Interpretation*, New Haven: Yale University Press.
- Richards, M.P. and Mellars, P. 1998. Stable Isotopes and the Seasonality of the Oronsay Middens. *Antiquity*, Vol. 72: pp.178-184.
- Ricklis, R.A. and Cox, K.A. 1993. Examining Lithic Technological Organization as a Dynamic Cultural Subsystem : the Advantage of an Explicit Spatial Approach. *American Antiquity*, Vol.58: pp.444-461.
- Rowley-Conwy, P. 1983. Sedentary Hunters: The Ertebølle Example. In *Hunter—Gatherer Economy in Prehistory*, edited by G.Bailey: pp.111-126. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rowley-Conwy, P. 1986. Between Cave Painters and Crop Planters: Aspects of the Temperate European Mesoli-

- thic. In *Hunters in Transition: Mesolithic Societies of Temperate Eurasia and Their Transition to Farming*, edited by M.Zvelebil: pp.17-32. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rowley-Conwy, P. 1987. Animal Bones in Mesolithic Studies: Recent Progress and Hopes for the Future. In *Mesolithic Northwest Europe: Recent Trends*, edited by P.Rowley-Conwy, M.Zvelebil and H.P.Blankholm: pp.74-81. Sheffield: Department of Archaeology and Prehistory, University of Sheffield.
- Rowley-Conwy, P. 1993. Season and Reason: The Case for a Regional Interpretation of Mesolithic Settlement Patterns. In *Hunting and Animal Exploitation in the Later Palaeolithic and Mesolithic of Eurasia*, edited by G. L. Peterkin, H.M. Bricker and P. Mellars: pp.179-188. Archaeological Papers of American Anthropological Association Number 4.
- 斉藤文紀・横田節哉・池田国昭・羽坂俊一・井内美郎・赤松守雄・松本英二・山崎理子・子栗一将・大嶋和雄 1995 「粗粒三角州による関析谷埋積シーケンスー対馬、仁田湾の最上部更新・完新統一」『地質学論集』第45号 61-75頁
- 斉藤武一他 1966 『富良野東山ー北海道富良野町の石刃鏃文化の遺跡ー』富良野町教育委員会
- Sakaguchi, Y., Kashima, K. and Matsubara, A. 1985. Holocene Marine Deposits in Hokkaido and their Sedimentary Environments. *Bulletin of Department of Geography, University of Tokyo*, vol.17 : pp.1-17.
- 桜井準也 1997 「相模野地域における縄文時代草創期遺跡のあり方」『考古論叢 神奈河』第5集 1-20頁
- 佐藤宏之 1997 「日本旧石器時代研究と居住形態論」藤本強編『住の考古学』同成社 2-12頁
- 佐藤和利 1986 「北海道石刃鏃文化の立地について」『士別市立博物館報告』第4号 97-100頁
- 佐藤訓敏 1983 「石刃鏃文化の土器群ーその時空的変移ー」『十勝考古』第6号 41-54頁
- 沢 四郎 1968 「釧路地方における石刃鏃の編年の位置ー伴出土器を中心としてー」『新釧路市史会報』第7号 12-17頁
- 沢 四郎 1974 「縄文早期の釧路」『新釧路市史 1』釧路市 158-181頁
- 沢 四郎・西 幸隆・松田 猛 1987 「先史時代の鶴居」『鶴居村史 第1編』鶴居村 17-88頁
- Schiffer, M.B. 1987. *The Formation Proces of the Archaeological Record*. Albuquerque: University of New Mexico Press.
- 瀬川秀良 1974 『日本地形誌 北海道地方』朝倉書店
- 島田和高 1998 「中部日本南部における旧石器地域社会の一樣相ー砂川期における地区の成り立ちと地域の構造ー」『駿台史学』第102号 1-50頁
- 下山正一 1994 「北部九州における縄文海進以降の海岸線と地盤変動傾向」『第四期研究』第33巻第5号 351-360頁
- 白石典之 1987 「「縄文中期的石器」に関する一考察」『行幸田山遺跡 本文編Ⅱ』渋川市教育委員会 631-651頁
- Simmons, I.G. 1979. Late Mesolithic Societies and the Environment of the Uplands of England and Wales. *Bulle-*

- tin of the Institute of Archaeology, University of London, Vol.16: pp.111-129.
- Simmons, I.G. 1981. Sea-level and Climate. In *The Environment in British Prehistory*, edited by I.G.Simmons and M.J.Tooley: pp.83-93. London: Duckworth.
- Skar, B. and Coulson, S. 1987. The Early Mesolithic Site Rørmyr II: A Re-examination of one of the Høgnipen Sites, SE Norway. *Acta Archaeologica*, Vol.56: pp.167-183.
- Sollberger, J.B. and Patterson, L.W. 1976. Prismatic Blade Replication. *American Antiquity*, Vol.41: pp.517-531.
- Sturdy, D.A. 1975. Some Reindeer Economies in Prehistoric Europe. In *Palaeoeconomy*, edited by E.S.Higgs: pp.55-95. Cambridge: Cambridge University Press.
- 杉浦重信 1989 『西達布2遺跡』富良野市教育委員会
- 須藤隆司 1991 「先土器時代集落の成り立ち」『信濃』第43巻第4号 265-288頁
- 鈴木忠司 1985 「再論 日本細石刃文化の地理的背景—生業論への視点—」論集日本原史刊行会編『論集日本原史』吉川弘文館 161-191頁
- 多田隆治 1997 「ダンスガード・サイクル—突然かつ急激な気候変動と日本海洋変動—」『科学』第67巻第8号 597-605頁
- 高倉 純・出穂雅実 1998 「頓別平野および宗谷丘陵における細石刃石器群」『北海道旧石器文化研究』第3号 29-38頁
- 田村 隆 1990 「野見塚遺跡の先土器時代—コア・リダクションと狩猟・採集活動—」『松戸市野見塚遺跡ほか—北総開発鉄道文化財調査報告書Ⅲ—』財団千葉県文化財センター 263-280頁
- 谷口康浩 1998 「縄文時代早期撚糸文期における集落の類型と安定性」『考古学ジャーナル』No.429 9-14頁
- Tauber, H. 1972. Radiocarbon Chronology of the Danish Mesolithic and Neolithic. *Antiquity*, Vol.46: pp.106-110.
- Tauber, H. 1981. $\delta^{13}\text{C}$ Evidence for Dietary Habits of Prehistoric Man in Denmark. *Nature*, Vol.292: pp.332-333.
- 勅使河原彰 1992 「縄文時代の社会構成（上）」『考古学雑誌』第78巻第1号 1-45頁
- Toizumi, T. and Nishimoto, T. 1997. Jomon Shell Middens: Interaction between Jomon People and Marine Environment. In *Rekihaku International Symposium: Terrestrial Environmental Changes and Natural Disasters during the Last 10,000 years* (Abstracts), National Museum of Japanese History.
- 豊原照司 1981 『標茶町網井遺跡・1980第2地点調査概報』標茶町郷土館
- 豊原照司 1985 「標茶町ニッ山遺跡第3地点の調査」『続北海道五万年史』郷土と科学編集委員会 153-161頁
- 戸沢充則 1984 「日本の旧石器時代」『講座日本歴史1 原始・古代1』東京大学出版会 39-73頁
- 戸沢充則・安蒜政雄・鈴木次郎・矢島国雄 1974 『埼玉県所沢市砂川先土器時代遺跡—第二次調査の記録—』所沢市教育委員会
- 戸沢充則・鶴丸俊明 1968 「北海道川東羽田発見の石刃鏃とその遺跡」『考古学集刊』第4巻第2号 1-18頁
- 戸沢充則・鶴丸俊明 1971 「北海道川東羽田発見の石刃鏃とその遺跡（第二次報告）」『考

- 古学集刊』第4巻第4号 29-36 頁
- 氏江敏文 1993 「大雪山系の石刃鏃」『北海道考古学会だより』第43号 4-5 頁
- 海津正倫 1983 「常呂川下流低地の地形発達史」『地理科学』第38巻第1号 1-10 頁
- 海津正倫 1994 『沖積低地の古環境学』古今書院
- van Andel, T.H. 1989. Late Quaternary Sea-level Changes and Archaeology. *Antiquity*, vol.63 : pp.733-745.
- Weniger, G.-C. 1989. The Magdalenian in Western Central Europe: Settlement Pattern and Regionality. *Journal of World Prehistory*, Vol.3: pp.323-372.
- 矢島国雄 1977 「先土器時代遺跡の構造と遺跡群についての予察」『考古学研究』第23巻第3号 100-109 頁
- 山口卓也 1983 「先土器時代における『移動』について」『ヒストリア』第101号 88-105 頁
- 山口卓也 1994 「二上山を中心とした石器石材の獲得」『瀬戸内技法とその時代 本編』中・四国旧石器文化談話会 185-198 頁
- 柳田俊雄・藤原妃敏 1981 「瀬戸内技法と石刃技法—調整技術のもつ意味—」『旧石器考古学』第23号 29-40 頁
- 柳沢和明 1985 「江合川中流域における旧石器時代遺跡の分布」『江合川流域の旧石器』東北歴史資料館 86-93 頁
- 安川豊史 1994 「中・四国地方の遺跡立地」『瀬戸内技法とその時代』中・四国旧石器文化談話会 235-242 頁
- 米倉秀紀 1984 「縄文時代早期の生業と集団行動」『文学部論叢』第13号 1-28 頁
- 米村哲英 1992 『女満別町豊里石刃遺跡 住吉C遺跡』女満別町・女満別町教育委員会
- 吉崎昌一 1986 「北海道における地域性」『岩波講座日本考古学5 文化と地域性』岩波書店 289-324 頁
- 涌坂周一・豊原熙司 1991 『オタフク岩遺跡（第Ⅰ地点・第Ⅱ地点・洞窟）』羅臼町教育委員会
- 渡辺昌宏 1994 「縄文時代後期初頭の集団関係—大阪湾南岸地域の状況—」『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第3集 15-30 頁
- 藁科哲夫 1994 「東山遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地分析」『富良野市郷土館研究報告』第2号 23-40 頁